

くろしおアートプロジェクト10年の記録

みんなで作るまちづくり

くろしおアートプロジェクト10年の記録

みんなで作る まちづくり

くろしおアートプロジェクト実行委員会



くろしおアートプロジェクト 10 年の記録

みんなでつくるまちづくり

2011 年から種子島の西之表市で実施されてきた

「くろしおアートプロジェクト」は、

住民と行政、そして日本と韓国のアーティストがともに参加した

コミュニティアートプロジェクトである。

住民たちの積極的な参加と創意的な活動は地域共同体を活気にあふれさせ、

地域活性化に新しい可能性を見出すことができた。

くろしおアートプロジェクト実行委員会

目次

ご挨拶

- 004 …… 実行委員長（住民代表） / 平川 浩
- 005 …… アートディレクター / ジン・ヨンソブ
- 008 …… 西之表市長 / 八板 俊輔
- 009 …… 西之表市商工会会長 / 福井 清信

1 黒潮が育んだ種子島の歴史・商店街の歴史

- 012 …… 種子島の歴史 / 鯨嶋 安豊（西之表市立図書館長）
- 014 …… 商店街の記憶 / 長渡 礼子

2 プロジェクトをする背景

- 018 …… 流れをつかみ巻き起こったくろしお / 田村 薫
- 022 …… くろしおアートプロジェクト年表
- 024 …… 種子島流木動物園
- 025 …… 種子島アートプロジェクト ～ with kids ～

3 コミュニケーションの芸術、コミュニティアート / ジン・ヨンソブ

- 030 …… 1、木のおさかなアートプログラム
- 033 …… 2、ファブリックコラージュコミュニティプログラム
- 034 …… 3、アート看板
- 036 …… 4、壁ギャラリープログラム
- 038 …… 5、アートベンチ
- 040 …… 6、モニュメント
- 044 …… 7、商店街アートプログラム / 田村 薫

4 くろしおアートプロジェクトの運営

050 …… 町の人たちの運営方法

052 …… くろしおアートプロジェクト組織相関図

5 町の人々の物語 / 岩田 とも子

056 …… 竹下 秀樹 他 25 名の町の人々の物語

6 アーティストたちの物語 / ジン・ヨンソプ、岩田 とも子

110 …… 杉原 木三 他 18 名のアーティストたちの物語

7 町の未来

188 …… コミュニティアート活動を通じた希望のまちづくり / イ・ミョンヒ

194…… あとがき座談会

198…… くろしおアートマップ

チャレンジする町

くろしおアートプロジェクト実行委員長

平川 浩

この本を制作するにあたり、今までご尽力いただいたジン先生をはじめとする多くのアーティストの方々、西之表市及び西之表市商工会をはじめとする様々な機関、ならびにご協力頂いてきたすべての住民の皆様に深い敬意と感謝を申し上げます。

まちづくりコミュニティアート事業「くろしおアートプロジェクト」が昨年10年目を迎えました。この事業に年々、市民の皆様が関心を持ってくださり、参加していただくことで、住民とアーティストが作り上げてきた200を超える作品が、少しずつ街に活気を与え、訪れるお客様を歓迎しています。

なぜ、私がまちづくりに取り組むようになったのか思い返してみると、22年前に家業を継ぐため帰島し、様々なコミュニティに誘っていただき、地域の歴史や継承事、地元産業・事業などいろいろなことを学ばせていただく中、寂しくもあり残念な印象を受けたのです。それは、私が暮している西（にし）町を住民でさえ“死に（しに）町”と呼んでいたことです。ここは、かつては商人の町として栄え、多くの商店が軒を連ね、隣町の職人の町・東町と西之表市の繁華街としてとても活気がありました。

その西町が、高齢化や近隣の商業施設の進出に押され、年々お店が減少し、元気をなくし、さびれてしまっていました。まさに“にし町”が“しに町”状態……ですが、私は自分の生まれ育った町を見下す呼び方にととても違和感を感じ、今生活している人たちはもとより、次世代の人たちにも自分の住んでいる町に誇りをもってほしい！！と思うようになり、商工会青年部部長という肩書を頂いた時に微力ながらまちづくりに取り組むようになりました。

くろしおアートプロジェクトに出会い、この事業を通して、いろいろな人たちとの出会いに恵まれ、特に、この事業の一番の功労者であるジン先生との出会いがとても大きかったと思います。ジン先生のご指導、助言の元、多くのことにチャレンジし、多様性が生まれ、少しずつですが町が元気を取り戻してきています。今はこの町を“しに町”と呼ぶ人はいません。いろいろな事が起こる楽しい町です。これからも良かった時の町を懐かしむのではなく、新しい町をみんなで創造していけたらと思っています。

最後に、影の功労者、田村君に感謝を申し上げ、あいさついたします。

住民中心の文化的地域活性化は持続可能か

くろしおアートプロジェクトアートディレクター
ジン・ヨンソブ / 秦 榮燮

2011 年から種子島の西之表市で実践されてきた「くろしおアートプロジェクト」は、住民と行政、そして日本と韓国のアーティストがともに参加したコミュニティアートプロジェクトです。住民たちの積極的な参加と創意的な活動は地域共同体を活気にあふれさせ、地域活性化に新しい可能性を見出すことができました。

この本は、これまで「くろしおアートプロジェクト」を通して何をしてきたのか、また、プロジェクトに参加した様々な利害関係者が互いにどのように考え、感じたかを記録し、未来に対するビジョンを提示して持続可能なまちづくりのために出版されるとになりました。

2009 年から韓国^{フサン}の釜山にあるレジデンス創作芸術空間、アートファクトリー・イン・ダデポ (Art Factory in Dadaepo) でアーティストとアートプランナーが協業しコミュニティアートとして文化的都市再生を行った経験があります。その頃、田村薫さんの紹介で 2009 年と 2010 年度に種子島の西之表市で行われた芸術イベントについて関心を持ちました。その後、2011 年から毎年「くろしおアートプロジェクト」のアートディレクターとして参加するようになりました。

「くろしおアートプロジェクト」は、2009 年からスタートした西之表市の文化芸術活動が基盤となり、2011 年からコミュニティアートの形を築いていきました。2015 年には西之表港口周辺がくろしおアートゾーンに指定され、アーティストや住民、児童たちが作った作品を町や商店街を越えて設置場所を拡大するきっかけとなりました。

地域再生は、文字通り地域の活力を再び生かすということを意味します。疲弊した地域の様々な環境的機能と要因を新たに活性化させることです。地域の懸案を行政組織とともに住民が中心となって進めることで、住民共同体の力量が向上し、見えない機能まで果たすこととなって、様々な地域で新たに脚光を浴びています。町には様々な種類の共同体があり、これらの共同体は各々の目標と利益のために機能しています。この共同体は、相互に有機的な関係を持つものの、町全体の問題解決や将来のビジョンを示す機能は、実際には実現しにくい構造的問題があり、その補完策が講じられなければなりません。

「くろしおアートプロジェクト」は、コミュニティアートの活動を基盤とし、文化的再生を通じて地域活性化の媒体になることを願い始まり

ました。最初は広報がうまくいかず、一部の住民だけが参加していましたが、今や西之表商店街の重要な文化イベントとなっています。

「くろしおアートプロジェクト」に初めて参加した時から悩みがありました。よくは知らない日本の離島で住民たちと言葉の疎通の限界を感じながら持続的に参加することは容易ではないと思いました。また、「年に1度、10日余りのプロジェクトをすることで、何を変化させ、魅力的で生き生きとした原動力を引き出すことができるだろうか」という疑問もありました。

しかし、住民の愛郷心から始まった積極的な参加と関心、町の未来に対する悩みを共に考えることが、プロジェクトを次第に拡散させるきっかけとなりました。多くの種子島出身の住民は、小さい頃からこの地を誰よりもよく知り、住民の間で良好な関係を築いていることからプロジェクトの進行にあたり多大な支援を受けており、次第に積極的な参加者を増やし、大きな力となって今まで活動してきました。

さらに、石川県から来た田村薫さんはコーディネーターとして参加し、大きな役割を果たしてくれました。プロジェクトの準備のために、1

か月も前に石川から種子島までやってきて住民代表と共に進行状況を点検し、アーティストたちが到着したらすぐに芸術活動ができるように作業現場と材料の手配をしてくれました。さらに実行委員会で選んだ作品のモデルとなる住民、そしてアートの看板が設置される商店街の店主へのインタビューや作品設置場所の確認までしてくれたことで効率的に進めることができました。また、毎年くろしおアートのアップグレードされていくアートマップとポスターをデザインし、商店街に広報用印刷物を配置できるよう、サポートを惜しみませんでした。

コミュニティアートは難しく理解しがたい概念芸術や形而上学的芸術ではありません。誰でも気軽に近づき、楽しく参加することで共同体の一員として作品の中に痕跡を残し、美的体験をもたらします。住民だけでなく観光客も参加できて、様々な階層が意見を交わし、自然に会話ができるコミュニケーションスペースが形成されいくていくのです。

「くろしおアートプロジェクト」はこのような脈絡で現在まで進行してきており、数多くの作品の中に住民たちの痕跡が残る美しい町に変貌していることは新しい可能性を示唆していま

す。また、住民の共同体で構成された実行委員会は少ない予算の中で材料の準備と作業を進める上で、すべての部分を効率的に運用して住民たちの支持を得ており、徐々に続く住民たちからの寄付のひろがりには良い事例といえるのではないのでしょうか。

日本の若いアーティストと韓国から参加したアーティストたちは、その多くがコミュニティアートについての経験豊かな作家たちで構成されており、種子島の美しく南国的な自然環境と住民たちの人間味あふれる暖かさに惹かれて毎年参加し、情熱を作品として表現しています。多くの地域で文化コンテンツ基盤の地域活性化を進めています。しかし、大半は少なくない予算で行政とアートプランナーらが中心となって推進しており、住民たちの疎外感は少なくないでしょう。「くろしおアートプロジェクト」は最初から住民中心のアートプロジェクトとして推進してきました。

これまで他地域で試みたことのない新しいタイプの地域活性化の事例もありますが、10年という時の中で試行錯誤と容易ではない過程もありました。しかし、少々緩やかな進行であっても、住民の直接的な参加によって文化の享受

が最小限でもできるのであれば、住みたくなる、かつ魅力的な種子島をつくることができるでしょう。

商店街の新しい魅力

西之表市長
八板 俊輔

くろしおアートプロジェクトの10年間にも及ぶ商店街の皆様の取り組みに心から敬意を表しますとともに、記念誌の発刊、心からお祝いを申し上げます。

黒潮の結節点であり、古くから交易の接点として重要な役割を果たしてきた種子島は、鉄砲伝来で知られ、また、多くの移住者等を受け入れるなど、さまざまな文化を吸収し、発展してきました。

さて、このような文化薫る種子島に新たなアートによるまちづくりが始まったのは2009年(平成21年)の皆既日食に合わせて行なわれた「時の芸術祭」がきっかけであったと伺っています。

西之表港から商店街を魅力的にするこのプロジェクトは、小さな子どもたちから大人まで、多くの地域の方々が参加し、自分たちのまちへの思いを作品として積み重ね、まちなかを彩っています。まちなかを楽しく歩き回まわる魅力が増えていくことは、私が港町の再生を図り、中心市街地の活性化を進めていく上でも非常に心強く感じているところです。

記念誌への寄稿にあたり、改めて作品を拝見しました。地域の方々が親しみやすく、参加されたアーティストと地域の皆様とのつながりが感じられる

素晴らしい作品たちに思わず見入ってしまいました。私自身が題材となっている壁ギャラリーは、実物よりも「よかにせ」にさせていただいています。

新たな元号「令和」には、「人々が美しく心を寄せ合う中で、文化が生まれ育つ」という意味が込められていると聞いています。

くろしおアートプロジェクトの10年間はまさに、アーティストと地域の方々の方によってアートという文化を通じて自分たちのまちを思う気持ちを育み、新たな文化を育ててきた取り組みであると思います。

市商工会や商店街とともに地域の方々が心をひとつにしてアートという文化によって魅力ある西之表市を作り上げる本プロジェクトが、今後もジン先生をはじめとするアーティストの皆様方にもご協力をいただきながら、まちを彩り続けることを期待しています。

末筆ながら、くろしおアートプロジェクトの一層のご発展と皆様方のご活躍を祈念いたしまして、ご挨拶とさせていただきます。

地域文化の発展に感謝

西之表市商工会会長

福井 清信

くろしおアートプロジェクトが 10 周年を迎えられましたこと、誠におめでとうございます。

平川実行委員長をはじめ韓国や国内のアーティストの皆様におかれましては、10 年もの長きにわたり、企画運営にボランティアで携わっていただいております、改めて深く敬意を表し、心より感謝申し上げます。

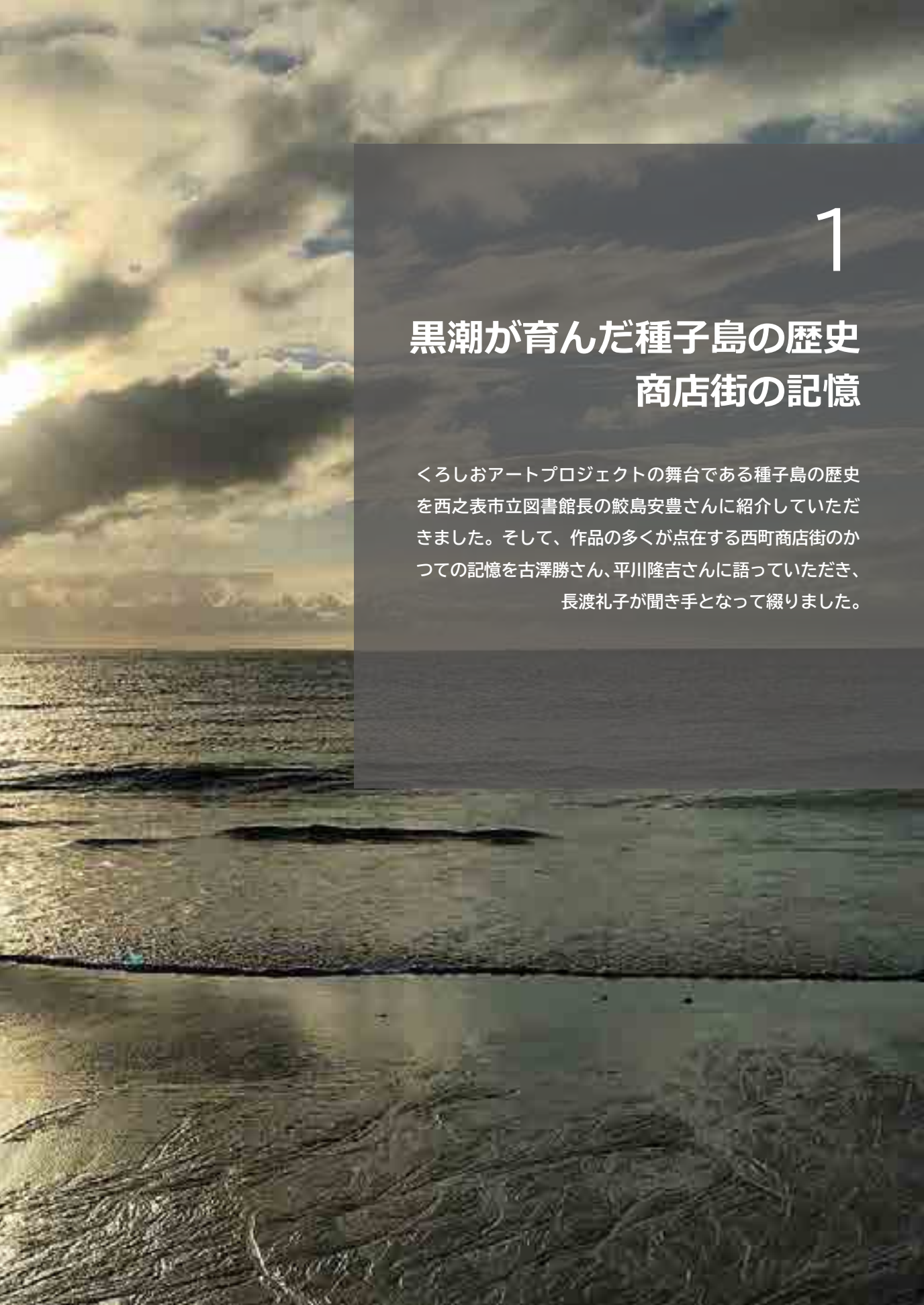
このくろしおアートプロジェクトは、まさに国境を越えた取り組みであるとともに、幼児から大人まで作品制作に携わなど、民間レベルでの日韓友好の一端を担う事業であると思います。

少子高齢化や過疎化が進む本市商店街において、これまで壁ギャラリーやアートベンチ、小学生による西之表港堤防等での魚のオブジェ制作など、観光の一役を担うとともに、韓国や国内のアーティストと多くの地元参加者による制作・交流が行われて地域文化の発展に寄与しているといえます。また、地元住民との意見交換会など芸術の域を超えた交流もあり、芸術祭が縁で国際結婚も生まれたと伺っております。

今後、本市で心豊かでいきいきと暮らせるよう、このくろしおアートプロジェクトが益々発展し継続されることを期待いたします。

実行委員会の皆様、並びに関係者の皆様のご健勝とご活躍を、心よりお祈り申し上げまして、本誌記念のお祝いの言葉といたします。





1

黒潮が育んだ種子島の歴史 商店街の記憶

くろしおアートプロジェクトの舞台である種子島の歴史を西之表市立図書館長の鮫島安豊さんに紹介いただきました。そして、作品の多くが点在する西町商店街のかつての記憶を古澤勝さん、平川隆吉さんに語っていただき、長渡礼子が聞き手となって綴りました。

種子島の歴史

西之表市立図書館長

鮫嶋 安豊

一、歴史の沿革とその交易

種子島の名前が、歴史上に現れるのは、今から1300年前の飛鳥時代、天武六年(677)のことです。薩摩国、日向国、大隅国と並んで多禰国(種子島)が置かれたが、天長元年(824)には大隅国に合併される。

鎌倉時代に入り、高野・野間・熊毛の三人の入道によって治められ、その後、鎌倉時代(1202年頃)、種子島氏が南海十二島(種子島・屋久島・永良部島・竹島・硫黄島・トカラ七島)を領有して来島以来、凡そ六百年間、種子島氏によって治められた。

その居城は住吉・本城・石之峯・屋久田・内城など転々とし、元和元年(1623)赤尾木城(上ノ城)が居城となる。東海岸を黒潮が洗う種子島は、古くから数多くの国内外の難破船や漂着者の歴史があるが、種子島の名を最も大きく高めた漂着事件は、天文十二年(1543)八月の鉄砲伝来であろう。種子島時堯は漂着者を手厚く救護する一方、赤尾木の鍛冶屋町(東町)で、火縄銃の国産化に成功し、火縄銃は戦国時代を終焉させる契機となる。ところで、唐や明(中国)から伝来した多くの貿易品(緞子・

べにばな 紅花・陶磁器)は、いち早く、京都本能寺を経由して将軍家へもたらされた。種子島・屋久島が日蓮宗(法華宗)南限の地で、本山である京都本能寺と密接に関係していたからである。上方文化も堺を通して茶道・歌道・民俗芸能などが種子島へ伝わった。その室町時代の芸能「堺きたのちよう 北町」は島内各地の願成就で今日、優雅に踊られている。

元禄十一年(1698)種子島久基は、台風常襲地帯の救荒作物として甘藷を琉球国王尚貞から取り寄せ、下西石寺の大瀬休左衛門に栽培させた。

甘藷も日本で栽培初地である。種子島は、このように優れた文化が、北上する黒潮によって運ばれ、育まれた豊かな島なのである。

二、明治時代の赤尾木町商人のくらし

明治時代に入り、身分制度が崩壊すると、都市から地方へ人々の大移動が始まり、種子島の赤尾木町（西町・東町）にも新しい技術や商品を携えた人々が押し寄せた。

西町には、生活用品が何でも揃そろう雑貨店が91軒も連ねていた。

販売商品は、①小間物 ②素麵 ③油類 ④線香 ⑤附け木（マッチの意）⑥筆 ⑦紙 ⑧墨 ⑨醤油 ⑩酒類 ⑪砂糖 ⑫酢 ⑬豆腐 ⑭昆布 ⑮ローソクなど。

「素麵」「麴」はどの店でも売られ、「うどん」「醤油」「味噌」は自家製、「素麵」は購入だった。町内には鮮魚店が14軒もあり、まさしく港町である。

秣米（タイ米）を売る店が一軒ある。米麴で甘酒が造られていたのか？附け木は今日のマッチである。古着屋の中に田上七之助（安城出身）の名前が見える。七之助は安城川脇港から大阪へ渡り、古着を仕入れ、赤尾木町で商売し、さらに絶滅しかけたウシウマを飼育し、その繁殖に成功したことで名高い。技術者の町（東町）

にも大きな変化が見られる。

江戸時代、黒山（東町）50軒といわれた鉄砲鍛冶町も鋳鍛冶22件に姿を変え、その替り、大工18件、木挽き11件、樟脳製造8件、畳屋6件、左官4件、瓦屋4件、鑄掛屋3件、樟脳小売り2件、ブリキ屋1件、薄鉄葉は細工屋1件など、東町は技術者たちで賑わった。種子島の明治・大正時代の特色は、やはり移住の歴史である。

明治18・19年鹿児島県の一大事業として、甑島から種子島へ4000人以上、桜島から2000人以上（大正の桜島爆発）の集団移住がなされた。

さらに明治20年代以降、奄美大島（本島・喜界島・徳之島・与論など）・沖縄（糸満）などからも多くの移住があった。その他、熊本、四国県内各地からも来島し、まさしく種子島は移住天国で湧いた。今日の繁栄はまさしくこれらの移住者たちの努力の結晶ともいえる。しかし、その移住地も今日、過疎地となりサーファーなど新たな移住者たちが訪れはじめている。

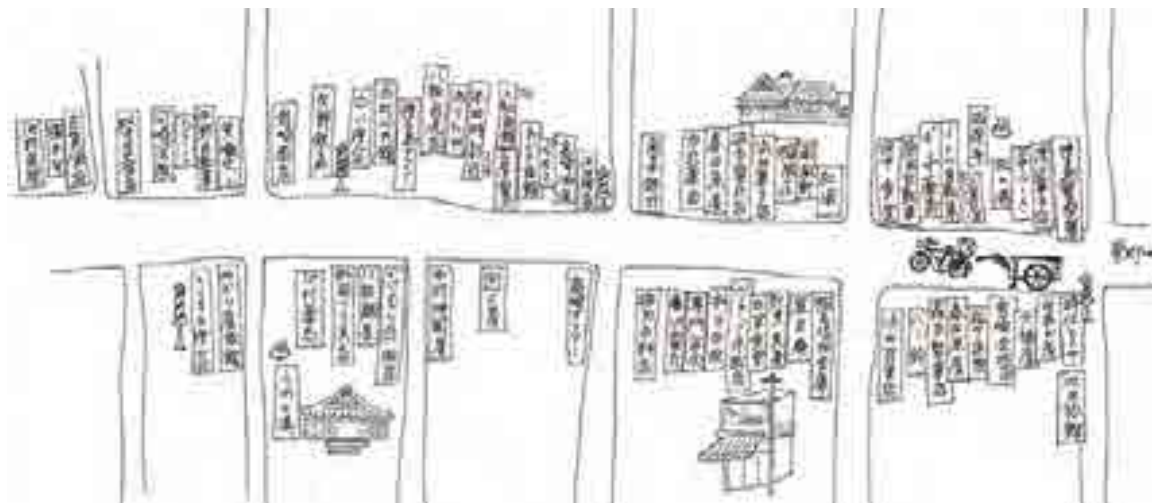
商店街の記憶

くろしおアートプロジェクトでは町の人から様々なお話を聞く機会があり、これまでも職種や年齢問わず多くの方がヒアリングにご協力くださいました。かつての町のことを思い出すその表情はとても楽しそうに見えます。子どものころ、お店をしていた頃、地域活動をしていた頃、とても楽しかったのだらうなあと心から伝わってきます。それぞれ人の記憶は違いますが、みんな昔を語ることがお好きようです。

今回、本書を制作するにあたり、改めて商店街をよく知る古澤勝さん、平川隆吉さんにお話を伺いました。

古澤勝さんは昭和 26 年小学校 3 年生の時に種子島へ。6 年後に種子島を出て各地を回り、昭和 36 年 22 歳の時に帰島。天気のいい日には西町を自転車で走っていらしゃり、昔話をよくしてくださる陽気な方。平川隆吉さんは昭和 19 年生まれ西町の商店街育ち。活気があった時代をよく知り、種子島最後の映画館の経営者でもありました。平成 2 年よりカラオケ店をオープン。現在は趣味の映画を観ながら毎日を過ごしています。

平川さんが現在の町から遡るように町の地図を書き出すと、古澤さんに声をかけ、かつての町を思い出しながらの記憶の語り合いが始まりました。



古澤さん、平川さんの記憶を辿りながら、昔の西之表商店街の地図

川口^{せっぽう}雪篷さん

西町の前までまちかどインフォメーションセンターがあったあたりやのご先祖様の川口雪篷さんという方がいます。沖永良部に流された西郷隆盛に書道や漢字や学問を教えた方として有名なのですが、西之表の納曽地区出身だということはあまり知られていません。子孫の方とお酒を酌み交わす機会がありましたが一升瓶を枕にするくらいの飲んべえでした。雪篷さんもそうだったようです。

流行り病

西之表では原因が不明の病気が流行っていたのですが、昭和 27 年頃、フィラリアが原因と突き止められ特効薬がすぐできて安心して暮らせるようになりました。昭和 30 年代には衛生管理が出来ていなかったので赤痢が流行り駆除に雇われとても忙しかったのを覚えています。南種子の島間に泊りがけで駆除に出かけたところ、旅館からは喜ばれ沢山の御馳走を頂いたのが懐かしいです。

とても寒い日に起きた大火事

私たちが生まれる前のお話です。大正 2 年 (1913 年) 2 月のとても寒い日のこと。あらき旅館 (現在のあらきホテル) の隣に豚小屋で、一斗缶で暖を取っていたところ、その火が飛んだことが原因で、西町で大きな火事がありました。とても有名な話で終戦の西町消失と同じくらい大変な出来事だったと長いこと語り継がれています。

かつて存在したお店の記憶

南種子出身の南国食堂の名越さんが、食堂でアイスクャンディーを作っていたのが懐かしいです。西町には病院がいくつかありインフォメーションセンター裏には遠藤さんという開業医がいたり、郵便局と松浦金物の間には榎原病院がありました。松浦金物店の前の空き地には浜田百貨店という衣料品店がありなんでも売っていました。今の相互信用金庫あたりには宮崎金物店があり、その主人は元軍人さんで、新聞屋も営んでいました。ほっともとの横には渡辺菓子店がありその峰ミチ子さんという方がいましたがとても美人で、西之表で初めて開催された美人コンテストでは準優勝でした。ちなみに優勝は最上さん。街中には旅館も沢山ありました。はなのや、みどりや、平和荘、やまと旅館、古賀旅館、村山旅館、大島旅館、野間旅館、丸屋旅館、吉野旅館など。

お風呂屋

お風呂屋も竹の湯 (東町) 松の湯 (西町) 梅の湯 (西町) などがありました。なかでも竹の湯では今村さんという三助さん (お風呂で背中を流す仕事) がいらっやいました。その娘さんは芸者歌手となって有名になりました。



2

プロジェクトの背景

くろしおアートプロジェクトが始まる前エピソードから
現在に至るこれまでの大きな流れを紹介します。



流れをつかみ巻き起こったくろしお

くろしおアートプロジェクトコーディネーター

田村 薫

「行きますよね、種子島」2009年の夏、ジン先生と出会ってしばらく経った頃でしたが、半ば強引にジン先生をお誘いし、その場で種子島の平川さんに電話をしました。ただその時はジン先生にアートプロジェクトを依頼するためではなく、純粋にジン先生と種子島を出会わせなかったという思いでした。実際、ジン先生がどのようなアートプロジェクトをされているか知ったのはお誘いした後のことで、それよりもジン先生の人柄と話しやすさからそのような思いが生まれたのです。

まずは島を案内しようという気でいたのですが、ジン先生からせっかくなら何かしましょうと提案を受け、ジン先生が普段韓国で実践されていることを詳しく知ることになったのです。私自

身が種子島と出会ったきっかけでもある2009年の時の芸術祭以降、アートによるまちづくりの可能性を種子島でも探っていた時期でもあったため迎えてくれる平川さんに相談すると「是非やりましょう！」とこの流れに乗ってくれました。

滞在日程はわずか数日でしたがその間におさかなアートの素材探しと加工、ワークショップの開催、町中への作品設置までが行われました。正直何が起きているのかわからないうちにプロジェクトがはじまっていたのです。それぞれの興味と直感とタイミングが合わさった結果がくろしおアートプロジェクトのはじまりでした。

2年目以降、回を重ねるごとにプロジェクトは



2011年 初来島時の住民との顔合わせとジン先生が手がけるまちづくりの紹介



街中に貼られた「木のおさかな」



住民との初めてのおさかな板制作

広がりを見せていきました。おさかなアートはより多くの住民と協力することで大きな作品にもなり、4年目からは榕城小学校の半生人式の記念制作として展開されるようにもなりました。プロジェクトの名前に「くろしお」と付けられたのもこの頃で、全体的に広く世界を見るジン先生の視点に気づかされました。ただ、プロジェクトが大きくなるにつれてジン先生とのコミュニケーションをより蜜にとる必要があったのですが思うようにジン先生の描くビジョンを読み取ることが出来ず苦戦した時期もありました。会議を重ね、アーティストの滞在期間をより充実させるためにできるだけ会期前に準備をしようと住民にも変化が生まれ前進できたのが2015年頃でした。



初めて西之表の街中に貼られた木のおさかな

以降、より多くの時間を住民とアーティストが過ごすような仕組みが生まれ、力を分散させるのではなく力を集中させることでプロジェクトとしての力もつけていきました。次第に島内のアーティストに参加してもらったり、住民からアイデアを募り作品化するなど地域に根付く形の広がりがみられました。

この頃から私の中にも変化がありました。町を知るためには人を知ろう、そんな思いからプロジェクトの活動の中心であった西町だけでなく東町、天神町、鴨女町へと足を運び住民の方へのヒアリングをはじめました。するとヒアリングをさせて頂いた人々は自然と私に会いにプロジェクトに顔を出してくれるようになり、何か



2014 年の榕城小学校の半成人式にて制作された、木のおさかなのモニュメント

できることはないかと声をかけてくださるようにもなり、ある年には島を去る時の見送りにも来てくださった方がいました。その時のことはプロジェクトをやっている中でとても嬉しかった記憶の一つです。くろしおの作品を紹介した街歩き map には「ニシヘヒガシヘテンまでカモメ」とちょっと変わったメッセージを載せました。西町、東町、天神町、鴨女町の町名を言葉遊びしたフレーズです。プロジェクトをきっかけに町同士の繋がりがうまれるといいなと常に願っています。

一方で長い付き合いの住民の方もたくさんいます。まず“まちづくり”について何も経験や知識もない私を彼らが受け入れてくれたことをいつも有り難く思っております。

そしてプロジェクトを進行する中で、私の話を聞いてくれて、的確で具体的なアドバイスをくださる方、住民同士の繋がりを生かして行動し解決してくださる方、また、頼もしい仲間となって道具や材料の調達に動いてくださる方もいます。現場で積極的にプロジェクトに関わり自ら

動いてくださる方なども私の大きな支えとなりました。どうにもならない大きな問題を抱えてしまった時には町の人々も一目置く先輩方に助言を頂くこともありました。他にも、誰も見ていないところで動いてくれたりしてプロジェクトを支えて下さっている方がいることを有り難く思っています。

助けて頂く一方で私自身がプロジェクトできることはといえば、住民同士で話すことが難しい話題や状況を当事者でない私が聞き取ったり記録したり伝えたりすることだと思っています。プロジェクトの中にある様々な過程、例えばリサーチに行く、買い出しをする、食事をとるといったあらゆることを人に会いに行く理由にして新たな接点を持つように心がけています。

そして私と同様に当事者以外の視点で町での時間を過ごしてくれるのはアーティストたちです。私自身がコーディネーターとして住民と作家をつなぐ場面も多いことからまずは作家との距離を縮めてどんな人なのか知ろうと意識を変えました。その人らしさを知ることで一緒にいると



きっかけを下さった平川浩さん / 2011 年撮影

心地よく家族のように感じることもあります。

「思い出にしか残らないイベントではなく、まちづくりに繋がるプロジェクト。」かつてジン先生がこんなふう言っていたように記憶しています。年に一度の芸術祭を終え日常に戻った後もプロジェクトが続くことが理想的だと私は考えています。その日常の中でもし、誰かがアイディアを思いついたとして、それを支えて動きだ出せる仕組みがあれば、どこかに負担が集中してしまうのではなく、みんなで協力すればなんとかできるという希望が生まれると思います。くろしおの芸術祭に繋がる何か、あるいは芸術祭に次ぐ新たな動きをみてみたいです。この10年で住民同士の関わりが広がりコミュニティの基盤が出来てきて、まちづくりに繋がる雰囲気徐徐にみえてきたように思います。

私はプロジェクトとしての様々な変化、動きを記録することを担ってきましたが、ここで起き



岩田とも子制作の壁ギャラリーと田村

ている全てを一人で記録し残すことはできません。映像や写真、ヒアリングといった手段で記録を試みてきましたが今でもその方法を模索中ではありますが、この本が完成することで単発的な発信ではなく時間的な繋がりを発信できることを期待しています。

田村 薫

石川県小松市にて、映像制作などをする傍ら、地域団体やまちづくりのコーディネーターとして活動している。映像では、PVやドキュメントなどを制作。2011年からくろしおアートプロジェクトを始めたのを機に、まちづくりに携わり、現在では団体の立ち上げや、コミュニティづくりなど各団体と一緒に考え実践している。

くろしおアートプロジェクト年表

くろしおアートプロジェクト

木のおさかなアートプログラム

榕城小学校半成人式
の記念制作開始

● モニュメント制作

●
モニュメント制作

2009 年

2010 年

2011 年

2012 年

2013 年

2014 年

くろしおの芸術祭 2011
(10/23～30)

※種子島水族館として開催

くろしおの芸術祭 2013
(9/21～28)

くろしおの芸術祭 2012
(10/9～14)

くろしおの芸術祭 2014
(10/19～29)

時の芸術祭 (10/23～30)

日本の陸地で 46 年ぶりに「皆既日食」が観察された年、鹿児島と種子島で開催されました。種子島の活性化、商店街の活性化を考えていた西之表市商工会青年部は「種の船」の制作と商店街の 20 件ほどの空き店舗をアーティストに提供し、作品展示に協力しました。

種子島流木動物園 (10/9～14)

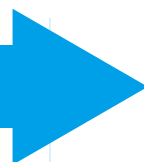
2009 年の秋、種子島へ大量の流木が海岸に打ち上げられました。2010 年には流木を使って、青年部とアーティストが力を合わせ、商店街の空き地に「種子島流木動物園」を作りました。

種子島 with kids (12/5～19)

商店街に沢山の子供たちが遊びに来てほしいとの願いから、「種子島 with kids」アートプロジェクトを開催、灯籠づくり、パラパラ漫画、駄菓子屋をオープンしました。

・アサヒビールPresents
九州情熱人＜鹿児島県＞
「くろしおアートプロジェクト」
実行委員長 鹿児島県 NO. 1 受賞

・社会福祉法人晩星会
あかつき園
おさかなワークショップ
開催



アートベンチ

壁ギャラリープログラム

アート看板

ファブリックコラージュ コミュニティプログラム

● 商店街アートプログラム

● モニュメント制作

● モニュメント制作

2015 年

2016 年

2017 年

2018 年

2019 年

2020 年

2021 年

くろしおの芸術祭 2015
(10/30~11/8)

くろしおの芸術祭 2017
(11/11~19)

くろしおの芸術祭 2019
(10/30~11/8)

くろしおの芸術祭 2016
(11/15~23)

くろしおの芸術祭 2018
(10/27~11/4)

- ・西之表市市民フェアにて
街歩き「くろしおウォークラリー」、
「おさかなワークショップ」開催

- ・国民文化祭
「黒潮文化交流の祭典」
アートベンチお披露目会開催

- ・鹿児島県熊毛支庁
「たねやくきらめき表彰」
くろしおアートプロジェクト
実行委員長受賞

- ・鹿児島県霧島アートの森トークイベント
「超藝術で覚醒する夢の鹿児島」
実行委員長出演

- ・MBC「テゲテゲ」種子島
～アートベンチ制覇の旅～
放送

- ・韓国釜山・甘川文化村視察

- ・くろしお MAPver.2016 配布

- ・NHK「島だより」
西之表市立榕城小学校 4 年生半成人式
「おさかなワークショップ」放送

- ・くろしお MAP ver.2 配布
(アート看板スタンプラリー)

- ・広報誌「市政の窓」くろしお特集

- ・くろしおの芸術祭 2020 開催見送り
※COVID-19 の世界的
パンデミックの為

- ・くろしおアートプロジェクト
10 年の記録
「みんなでつくるまちづくり」
発行

種子島流木動物園

2010年2月1日～14日 / 榕風亭敷地跡、松浦金物店現駐車場

主催：西之表市商工会

■参加アーティスト

岩田とも子、海老由佳子、喜多直人、木幡連、主侍知恵、杉原木三、田村薫、平井浩貴、Rezzy

2009年秋に種子島にたくさんの流木が漂着し、高速船が10日以上も運休するなど経済的にも大きな影響を及ぼしました。その流木を活用しアートで何かできないかと、流木で動物をつくろうと企画されたのが、「種子島流木動物園」。

2009年夏、皆既日食に合わせて開催された「時の芸術祭」に参加していたアーティスト9名と、商工会青年部が共同で開催しました。流木を組

み合わせて動物をかたどった作品が制作され、西之表市内の幼稚園、保育園に寄贈されました。

会期中には市民主催による種子島流木スポーツ大会が旧榕城中学校運動場にて開催され、参加者に贈呈されるトロフィーやメダルをアーティストたちが流木を用いて制作しました。メダルは事前に市内の幼保育園にて、園児と一緒にワークショップ形式にて制作しました。



岩田とも子制作「ライオンゲート」



商店街の空き地に種子島流木動物園会場



市内の園児と一緒にメダルづくりワークショップ



アーティストショップ「種子島アートセンター」

種子島アートプロジェクト～ with kids ～

2010年12月5日～19日 10:00-18:00 / 西之表市西町商店街

主催：西之表市商工会商店街イメージアップ事業実行委員会

■参加アーティスト

海老由佳子、喜多直人、杉原木三、平井浩貴、田村薫、Rezzy

西町商店街の空き店舗を利用して、ワークショップ、展示など、「時の芸術祭」の参加アーティスト5名が、西之表市商店街の方々と共同で企画、開催しました。開催時期が12月ということもあり、クリスマスに子どもたちへ贈るプレゼントというコンセプトで企画が練られました。

各アーティストがそれぞれワークショップ、公開制作、展示を西之表市商工会青年部、商店街など、地元の人々と共同で開催。期間中限定チャレンジショップとして、参加アーティストや、島内の作家の作品を販売する「たねあ〜と」、市民の方が運営する「駄菓子のおば屋」も同時開催されました。



アーティストショップ「たねあ〜と」



最終日夜の展示会場



平井浩貴制作、甘露焼酎をモデルにした巨大行灯など展示



3

コミュニケーションの芸術 コミュニティアート

1、木のおさかなアートプログラム

1) 住民参加の木のおさかなアートプログラム

2) 小学校の木のおさかなアートプログラム

2、ファブリックコラージュコミュニティプログラム

3、アート看板

4、壁ギャラリープログラム

5、アートベンチ

6、モニュメント

7、商店街アートプログラム



コミュニケーションの芸術、コミュニティアート

くろしおアートプロジェクトアートディレクター
ジン・ヨンソブ / 秦 榮燮

くろしおアートプロジェクトはコミュニティアートとして住民共同体で構成される実行委員会やアーティストたちが企画段階から協議して多くのことを進めてきました。10年前に始まった頃は、アーティストたちだけの作品が主流になっていましたが、次第に住民とアーティストたちのコミュニケーションが円滑になり、住民たちの多様なアイデアと才能が融合し、地域の情緒と特徴に合ったテーマになりました。アーティストたちは他の地域から島に来るため、ここの社会的環境と情緒をよく知らないため理解するのが困難です。

しかし、住民の積極的な意思表示と親切さでコミュニケーションを取るには、さほど時間はかかりませんでした。

コミュニティアートは会話の芸術であり、コミュニケーションの芸術です。したがって、芸術を媒体として関係を回復し、地域社会の 이슈と問題点を一緒に考え、個々人が共同体の構成員としての連帯感を持を生み出します。芸術に関するいかなる学説や規制、形式にとらわれず、また最善の実践方法を探せなくても、過程で生じるコミュニケーションがより価値を輝かせたりもします。

くろしおアートプロジェクトは島という孤立した環境と少ない予算、限られた材料や作業環境など参加したアーティストにとって良い環境ではありませんでした。だからこそ、住民とより一層密着してコミュニケーションを図り、効率的な方法を探さなければならなかったのです。

短い期間で与えられた作業をしなければならないアーティストたちにはいつも重圧感が伴いました。作品を完成せずには帰国することができないので夜遅くまで作業をすることになり、その度に住民たちはいつも応援してくれて、心理的にも多くの慰めを受けることになりました。

くろしおアートプロジェクトの作業現場は、町の商店街の中心にある駐車場を借りて、作業用テントを設置して使います。作業に必要な様々な道具は町の共同体や住民のものであり、電気や水道も現場の近くにあるお店から提供を受けて使います。基本的な必須資材は住民が事前に用意したりサイクル材料を使用し、購入する材料はインターネットで事前に注文して準備していますが、作業中に緊急に必要なとなった材料はほとんど住民が寄付してくださり解決しました。生きている共同体は町で起こる問題を解決するために、特定の機関や他の人々に依存する

のではなく、共同体自身に与えられた能力で積極的に解決します。こうして生きた共同体の連帯感と結束力をここで確認することができました。盲目的であったり、他意によって作業に参加すれば、長続きせず、成功する確率も落ちてくるでしょう。住民の意見を聞き、一緒に作業することで新しい方式を探することができるなら、アーティストだけでなく、住民一人ひとりが参加の意味と価値がわかるようになるでしょう。そして、町に設置された作品の中の自分たちの痕跡から自尊心を見つけることができるでしょう。

今やアーティストがいなくても、住民自らがコミュニティアートプログラムを進めることができるようになってきていると思います、それはくろしおの芸術祭の期間ではないときに、木のおさかな体験の要望が入ると、住民は木でおさかなを作り、絵の具を配色して遠く離れた学校や病院で直接体験プログラムを行っています。それも、とても洗練された腕の立つ専門家のように授業を進めています。

いつの間にか 10 年の歳月が過ぎました。これまで町にどのような変化があったかについて、定量的な測定はできませんが、住民と町のリー

ダーは町と町の共同体の新たな可能性を見出し、誰とでも協業できる自信がついたと思われます。

最初にプロジェクトを始めた時は、こんなに長く進行することになるとは思いませんでした。しかし持続可能であるならば、近い将来、住民だけで完全に運営される独立した町のアートプロジェクトになることを願っています。ここ数年、その可能性が少しずつ見えてきました。西之表市には、さまざまなジャンルの住民アーティストたちと才能あるアマチュアアーティストたちがいます。みんなで一緒に作業すればずっと効率的で独特なプロジェクトに生まれ変わることができると思われます。

くろしおアートプロジェクトの完成は種子島が近い将来、住民だけの自立したアートプロジェクトで黒潮海流の芸術の中心地となる創意的で魅力的な芸術島になることです。

1、木のおさかなアートプログラム

シンボルとしての魚は国ごとに少しずつ異なっても、古代から神話的で肯定的な意味を持っています。宗教的にも魚は特別な意味を持っており、普遍的に形状を見ただけでも誰でも容易に分かるのが特徴でもあります。種子島は地政学的に黒潮海流が通過する位置にあり、多様な海洋資源が豊富で古くから漁業が発達しており、住民と魚は切っても切れない密接な関係を持っています。

コミュニティアートプログラムで「木のおさかな」一匹は共同体に所属している自分を象徴し、木のおさかなで構成された大きな絵は共同体を隠喩的に表現します。「木のおさかなアートプログラム」はくろしおアートプロジェクトの代

表的なプログラムで、商店街では子どもから年配の方までお馴染みの体験プログラムとして定着しています。プログラムで使用される絵の具の色は、主に原色に近い色で用意し、遊びに近い体験を提供します。一つ一つに描かれた木のおさかなは、町内の各場所に新しい形で構成され、住民と一緒に設置されます。

木のおさかなの形状は、板材を最小限の加工で作ることができ、必ずしもアーティストが作らなくても住民が自ら作れるように簡単にデザインされました。体験プログラムは町や学校でも行いますが、町から離れた所にある分校や病院には訪問プログラムとしても行っています。



種子島漁協の壁に貼られたおさかな /2012 年

1) 住民参加の木のおさかなアートプログラム

木のおさかなアートプログラムは2011年のくろしおアートプロジェクトの開始時から実施された住民参加プログラムで、今までよく続けられています。ほとんどの材料は住民が直接回収したトロ箱（海産物を運ぶための木製の箱）や廃材をリサイクルして加工しました。

木を簡単に魚の形に切り、下地に色を付けた後、体験プログラムの進行も住民によって自律的に行われています。体験プログラムは主に町の作業現場で行われますが、住民や子どもたち、ここを訪れる観光客が芸術祭の期間中いつでも自分だけの独創的な才能を発揮できるように準備されています。

住民は木のおさかなに絵を描きながら町の様々な話やアーティストたちが制作している作品について話をします。このようなプログラムに参加することで、町の共同体の一員としての誇りを感じたりもします。

毎年このプログラムに必ず参加する特別なお客さんがいます。町の商店街にある西之表幼稚園の子どもたちですが、アーティストたちの作業の様子を近くで見学したり、体験プログラムで木のおさかなに自分の痕跡を残すことができます。子どもたちが描く純粋な魚の絵はかけがえない宝のような作品でもあります。



トロ箱を解体する



会場にておさかなを描く



力合わせおさかなを壁に貼る



毎年会場におさかなを描く西之表幼稚園の園児たち

2) 小学校の木のおさかなアートプログラム

榕城小学校の4年生と保護者が参加するプログラムが、くろしおアートプロジェクトの期間中に行われます。

校内の広い室内体育館で毎年行われているこの特別イベントでは、熟練した住民による木のおさかなプログラムを見ることができます。児童が到着する前にプログラムができるように広いブルーシートを敷いて、絵の具と筆、木のおさかなを準備しておきます。プログラムが始まると、住民代表はくろしおアートプロジェクトと町の共同体の重要性、そしてその前に設置された先輩たちの作品を映像で説明します。次に、住民たちはまるで魚屋で魚を販売するように、ボックスに入った木のおさかなを児童たちに一匹ずつ渡します。児童たちは両親と一緒に描い

たり、それぞれ描いて互いに見せながら自分が描いた魚に満足しています。複数の魚を楽しく描く姿から、子ども特有のエネルギーが発散されるのを感じたりもします。木のおさかなに描いた絵が乾いたら、児童たちは自分が描いたおさかなを持って高速船ターミナル近くにある設置現場まで行き、アーティストと住民が一緒に小さなおさかなを壁に貼りながら大型な魚の形を作り出す作業に参加します。

毎年児童の作品は、新しい形状に構成されて設置されますが、様々な意見を収集し、住民の雰囲気合ったデザインで形を作ります。いつかここを離れてまた戻ってくるときに、この作品を見ながら子ども頃の思い出をよみがえらせることを願っています。



住民代表による説明



板におさかなを描く



シリコンが塗られた板を渡す



港近くの防波堤に生徒と協力して板が貼られる

2、ファブリックコラージュコミュニティプログラム

コミュニティプログラムのうちファブリックコラージュ (fabriccollage) は弾性が良く、ホットメルト (HMA) 接着剤がコーティングされたスパンデックス (spandex) 繊維を、はさみやカッターで切り取ってエコバッグやTシャツなどに熱プレスで貼り付ける技法です。説明は多少複雑なようですが、材料さえしっかり準備できれば、とても簡単な方法と短い時間で誰でも簡単に体験できるプログラムです。

コラージュは、多様な色の繊維を多様な形状に切り抜く技法で、自分の内面を理解するのに有用です。参加者はペンや絵の具で表現するより、はさみやカッターで切り取って作った形態の中に、自分の感情を容易に表現することで無意識の世界の心象を発見したりもします。簡単なプロセスのこの技法は、プログラムを実施する際に住民間で最も多くの対話が交わされるので、コミュニケーションには非常に適切な方法でもあります。各自の作業をしながら共同体の同質性と密接な連帯感を見出すことができるためプログラムの成就度が大体高いものです。2018年と2019年にはエコバッグとTシャツでプログラムを行い、多くの住民が参加しており、普段は商店街のインフォメーションセンターでも体験することができます。



3、アート看板

アート看板は、お店それぞれの特別なストーリーを看板に盛り込み、文化的環境で商店街の活性化を期待して企画されました。商店街の中に作品を設置するスペースがないことからアート看板を住民に提案しましたが肯定的な反応があったので実行に移りました。アート看板は2016年からはじまって徐々に数を増やしていきましたが、商店街の反応がよかったため西町から東町、天神町、鴨女町へと広がり4年間で60点以上も制作されました。

くろしおの芸術祭が開始する前に、住民はアート看板の設置対象店舗を選定します。そしてコーディネーターである田村さんは、お店の主人や家族に会って人物の写真を撮り、お店の歴史と彼らが生きてきた人生の話を詳細に記録し

ます。アーティストたちは記録されたお店の話を見て、自分が上手く表現できる対象を選び、再び該当するお店に行って関係者のインタビューをした後、作品を構想します。材料はリサイクルの木材パレットで、住民が事前に準備して手入れをし、様々な色でペイントして作業しやすくしておきます。作品を作り始めると対象のお店のオーナーは、毎日立ち寄ってアーティストの作品を見ながら自分の意見を述べたり、アーティストと一緒に作業したりすることもあります。

遅れて始まったプログラムではありますが、住民とアーティストのコラボレーションにより、商店街で好評を得て持続的に拡散できる動力を得たプログラムでもあります。



居酒屋串まさに設置されたアート看板



エスパー電機に設置されたアート看板



各店舗にて事前にヒアリング



木製のパレットを再活用



来島直後の顔合わせで担当アーティストを決める



ヒアリングを元にアイディアスケッチ



店主も一緒に制作



クロージングにて完成披露の後に各店舗へ



経年劣化したアート看板のメンテナンスをする松浦さん

4、壁ギャラリープログラム

他所の土地から参加したアーティストと住民がより身近に感じられる方法として、2015年から住民の人物画壁ギャラリープログラムを開始しました。対象住民は老若男女の様々な階層を実行委員会で選定し、リストをアーティストたちに伝えます。アーティストは自分が描きたい人を選び、写真や住民を直接見てスケッチをしながら様々な対話を交わします。人の多い現場で、人物画を描くアーティストやモデルとなる住民の皆さんにとっては負担もありましたが、今では普通の風景となっています。

住民とアーティストたちが最初からうまく意思疎通ができたわけではありませんでした。住民が今まで行ってきた日常的な町のイベントが住民だけの努力と能力で行われていたとすれば、コミュニティアートプロジェクトは住民とアーティストが協力してコミュニケーションを取らなければ良い

成果を期待しにくいことなのです。お互いを見つめて近くの距離で視線を合わせ、対話もしながら関心を持つことがコミュニケーションを取るのに良い方法だと思いました。トロ箱を人物画の額縁として使うと、多少拒絶反応があると思いますが、ここではそんなことはありませんでした。むしろ、親しみのあるトロ箱の中の自分を見て、満足してプライドを持てたりもします。港から町への入口でもある通り沿いの長い壁には2015年から制作された80点余りのトロ箱に描かれた人物画が設置されていますが、住民はここを「壁ギャラリー」と言います。

コミュニティアートプログラムを企画する際には、地域の風情を考慮した材料や方法を選ぶなど慎重に決める必要があります。長い時間使用していたトロ箱が住民に親しまれている材料だったこともあり、特別なプログラムとなりました。



2016年に初めて壁ギャラリーを現和物産館に設置



トロ箱に防腐剤を塗る



トロ箱にベースの色を塗る



壁ギャラリーを制作するジョンミンさん



住民の方も一緒に制作



描いた作品をトロ箱にシリコンで貼る



壁ギャラリーを描いたアーティストと



現和物産館に壁ギャラリーを住民とアーティストと一緒に設置

5、アートベンチ

「あなたのアートベンチアイデア」これはアートベンチデザイン公募のタイトルです。個人でも団体でも誰でも参加でき、公募の出品作の中からアートベンチとして制作するアイデアをアーティストと住民代表が選定します。その中でアーティストたちは、自分が制作したいアートベンチのアイデアを選択し、元のイメージを活かして再構成してデザインします。アイデアが選ばれた住民は、アーティストと一緒に協力して作品を作り、完成したらアートベンチにはアーティストと住民の名前でサインをします。

アートベンチは、2015年から30点余りを制作し、町のバス停、商店前、学校、神社、高速船ターミナルなどに5年間で、30点余りを設置しました。一般的に、地域を基盤としたコミュニティアートプロジェクトが始まり、4～5年

後に最も活発な動きをし、それまで消極的だった住民までもが少しずつ参加するようになる時期でもあります。予算と寄付金も少しずつ増加し、プロジェクトに適した環境が整い、本格的に拡散する良い機会でもあります。

アートベンチのテーマは、主に種子島の自然と歴史、文化、ロケットなど地域の日常環境から生まれたものなので、地域住民から好評を得ています。主に道路沿いに設置されていますが、手入れが行き届いていて、常にきれいに管理されており住民の作品に対する関心がよくわかります。2015年はアートベンチの他にも壁ギャラリーが新しく試みられる時期で、それ以前より住民の参加と参加アーティストが増えてきたことで作品が大きく増加する年でした。



岩田とも子デザインのベンチを住民と共に色を塗る / 2015年



榕城小学校のアートベンチデザイン



住民によるアートベンチ下処理



デザインの相談をする平瀬さん



アートベンチのペイントをする東町のみなさん



2017 年制作のあこう楽習会デザインのアートベンチ

6、モニュメント

モニュメントは、設置場所や地域の風情によって、形、大きさ、材料などさまざまな要素が決まります。特に、与えられた時間がそれほどなく、加工する道具の準備が整っていない場所では、多くの制約が伴います。モニュメントを制作するには多少劣悪な環境であるここで、住民たちの積極的な支援と助けがなかったら、試みるのは難しいことでした。

2013年のキム・ドヒョンさんの「種子島の火縄銃」と篠原浩之さんの竹のオブジェを皮切りに、2014年のキム・ドヒョンさんの「ギャップハウス」、イ・ヨンギさんの「ハイビスカス

の魚」、キム・ジョンミンさんの「ゆめマグロ」を制作しました。2019年「小倉達弘さんを追悼するためのモニュメント」までに5点の作品を作って設置しました。ほとんどの住民が容易に理解できるテーマで構想しました。

キム・ドヒョンさんの「種子島の火縄銃」は町の重機整備工場である松田制作所のスペースを提供してもらい作業をしました。材料は住民が集めてくれたリサイクルの古鉄を使用しました。長い年月の痕跡である錆をはがした後、鉄片をつなぎ合わせて種子島の島の形をつくりました。島の形の中央には火縄銃の形がくり抜か



「種子島の火縄銃」に住民と共に三色のペンキを塗り完成

れ、そこに西之表港と町が見えるように制作して港の入口に設置しました。2014年に制作した「ギャップハウス」は、鉄板で制作した後にペインティングした作品で、元々は町の家と家の間に設置する計画でしたが、老朽化した家の壁に設置するのに多少無理があったため、甲女川（こうめがわ）の川岸に設置しました。作品の意味は町の古い家々に「世間話をし、楽しくコミュニケーションする」というアーティストの想像力を含んだ作品です。

篠原洋之さんの作品は、竹を細長く切って格子状に編んだ後、全体を螺旋状にして移動しやすくしたインスタレーション作品です。くろしおの芸術祭の期間中、さまざまなイベントに使われ、茶道やヨガのプログラムを作品の中で行いました。特に住民が参加していた浦田海岸での



話しかける家 / 2014年制作



ジョンミンさんの「ゆめマグロ」



篠原洋之の竹籬の茶室



ヨンギさんの「ハイビスカスの魚」制作中にたくさん子どもが集まる

ヨガプログラムは多くの人に深い感動を与えました。星の光が輝く暗い夜、竹の間から差し込むかすかな光の中のヨガ講師の姿と、穏やかに流れる音楽は、しばし日常を忘れさせるヒーリングプログラムでした。

イ・ヨンギさんの作品「ハイビスカスの魚」は、ここで育った杉の根で作られた木彫です。二匹の魚の形に赤いハイビスカスの花の模様を刻んだ作品で、南国情緒が漂う作品です。木の彫刻

作品を作る時は、作家の作業を初めて目にする好奇心旺盛な町の子どもたちが集まってきました。どんな形が出来上がるのだろうと気になっているのか、子どもたちは時々集まってきました。杉の香りいっぱいの作業現場は楽しい遊び場になっていました。

キム・ジョンミンさんの「ゆめマグロ」は鉄材作品で数多くの鉄片をつなぎ合わせて立体で作った作品です。漁師の夢である大型クロマグ



アーティストと住民で共同制作



モニュメントに文章を書く長渡さん



ターミナルに設置された小倉さんのモニュメント

口は、幸運が伴わなければ決して捕ることができないため、希望のメッセージを込めています。少々大きい形の作品を作るために、作家も昼夜苦勞しましたが、同僚のアーティストや住民たちの協力がなかったら、与えられた時間内に完成するのは難しいことでした。

小倉燃料の小倉達弘さんが亡くなられた2019年度のくろしおの芸術祭には小倉さんのご家族から心温まるご寄付を頂きました。生前、火縄銃保存会の事務局長でもあった小倉さんは、く

ろしおアートプロジェクトを始めた時から物心両面で多くのお力添えをしてくださいました。住民やアーティストに親しまれた方であったことから、皆の意を集めて記憶に残るものとして作品を制作しました。

形は小倉さんが火縄銃を発射する姿で火縄銃保存のために格別に尽力された小倉さんの姿を重ねています。作品は種子島高速船ターミナルに設置しましたが、みんなの記憶の中に末永く残ってほしいという思いで設置しました。

7、商店街アートプログラム

くろしおの芸術祭のメイン会場となっている西町を含め東町、天神町、鴨女町の4つの町が連なり西之表市商店街を形成しています。4町が並ぶ通りの長さはおおよそ2km。町と町をつなぎ東町、天神町、鴨女町でもコミュニティアートをより身近に感じてもらうと試みたプログラムです。個々のアーティストのワークショッ

プ会場や展示会場として商店街の空き店舗や店に隣接するフリースペースなどをお借りして4人のアーティストがそれぞれ活動をおこないました。島外から招聘したアーティスト岩田とも子さん、新里碧さん、そして2014に既に西町の空き店舗を利用した作品展を展開していた小野サボコさんが参加型の作品展をそれぞれ展



南国食堂跡での展示とワークショップ「ヒカリヲツナグ」



「ぜいたくお魚シールをつくろう」案内



「ぜいたくお魚シールをつくろう」ワークショップ



展示作品に貼られたぜいたくお魚シール



「自然の暗号代理店」会場設営を住民の方々と一緒に



近所の方々が会期中に訪れた「自然の暗号代理店」



岩田とも子さんによる「自然の暗号代理店」



「自然の暗号代理店」で展示された種子島の素材

開しました。また、島内の貼り絵アーティストとして活動する sakitobata さんの貼り絵展を含め4町で4つのスポットを点在させ、より多くの町の人たちにとって新しい発見やコミュニティアートを通じたまちづくりへの参加のきっかけとなることを願って展開されました。

西町では小野サボコさんによる参加型インスタレーション「ヒカリヲツナグ」が展開されました。会場は元々南国食堂という飲食店があった場所でその店内には小野さんが大きなアルミ板に金槌で叩き続けて制作ししガジュマルをモチーフにしたインスタレーションが展示されました。芸術祭の会期中にワークショップが開催され、参加者が同じアルミ板を叩いつくった魚

がそのインスタレーション空間を泳ぐように設置されていきました。アーティストが普段から制作に用いる素材と手法を間近にし、子どもたちも熱心に参加する光景がみられました。

東町では岩田ともさんが「自然の暗号代理店」という作品を空き店舗となっている元タカサキストア東町支店にて展開しました。会場作りからワークショップの素材の準備、そして作品までを町の人と一緒につくりました。ワークショップの素材となるのは島の自然が作り出す様々な模様。魚、貝殻、木の実、砂浜、空など約100種ほどが集まり、それらを紙に印刷して切ったり貼ったりできる素材としてワークショップ参加者に提供しました。途中から、参加者自らが



「宇宙船修理センター種子島支店」会場



ワークショップ「宇宙船修理情報」



「宇宙船修理センター種子島支店」展示風景



遊びに来た下校中の子どもたち

自然物から発想した模様をつくるデザイナーになったり、作品を記録するカメラマンになったり、参加者同士で協力して大きな作品をつくったりできる場へと進化していきました。

鴨女町では酒井酒店の店舗の一角を利用して新里碧さんが「宇宙船修理センター種子島支店」という作品を展開しました。この作品は作家が初めて訪れた種子島の海岸で拾った不思議な形の漂着プラスチック片の数々から発想を得たものです。店の外に作品名でもある店名が書かれたのぼりが設置され下校中の小中高生や散歩中の町の人々の目を引きました。店に立ち

寄った人々がアーティストとの交流を楽しみながら「宇宙船修理情報」といった少し空想的で種子島らしいお題に答えてもらうようなワークショップを開催しました。

天神町では商業施設サンシードの2階にある休憩スペースでは「sakitobata 貼り絵展 2015」が開催されました。種子島在住のsakitobataさんは雑誌やカタログなどの身近にある紙素材を使って日々貼り絵を制作しており、好きな本や植物をモチーフに制作をしています。この作品展では一年間で制作した貼り絵を展示し、sakiさん自身も改めて作品の多さ



sakitobata さん 商業施設サンシードでの展示



sakitobata さん 鉄砲館での展示

に圧倒されているようでした。その作品の多さからひとつの会場に収まらず、種子島の博物館である鉄砲館にも展示を行いました。sakiさんの作品展は町内でも好評を得て2016年以降も芸術祭期間中にインフォメーションセンターなどで開催を続けております。

これら4つのスポットでの試みは4町の人々にとってコミュニティアートに接するきっかけとなっただけでなく、アーティストたちにとっても制作やワークショップを通じて町の日常を感じながら町の人々と交流する貴重な機会となりました。



4

くろしおアート プロジェクトの運営

くろしおアートプロジェクトは実行委員会が西之表市、西之表市商工会、西之表商店街振興協同組合からの支援と多方面からの寄付を頂き、取り組んでいるまちづくりコミュニティアート事業です。はじめは町の有志ボランティア数名からスタートしました。現在では各種団体の協力のもとくろしおの芸術祭の会期前の準備から会期中の様々なイベントにいたるまで多くの方々が運営に関わっています。そんな町の人々の活動の一部をご紹介します。



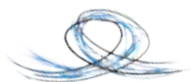
町の人たちの運営方法

アーティストたちが島にくる前に…



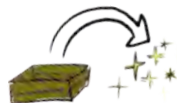
アーティストが到着後にすぐ作品制作に取り掛かれるよう町の人たちで数か月前からいろいろな準備に取り掛かります。

1 過去作品のメンテナンス



まず取り掛かることは、今まで制作された作品のメンテナンスです。種子島、特に港付近は風が強く台風の影響もあり、おさかなアートなどの作品が剥れることもあります。町中にある作品をチェックし、剥れてしまった作品、錆びたり劣化したりしている作品をみんなで可能な限りメンテナンスします。それぞれ店主が管理してしているアート看板は実行委員会と店主とで修繕しますが難しい修繕は、アーティストに相談します。

2 廃材を材料へ



事前に材木を扱う事業所に確保しておいていただくようお願いに上がります。商店街の中心に広場があり、徐々に廃材を集めていきます。廃材が集まってくると町の人達も自然と会話を楽しみに訪れてきます。準備の進行状況を互いに連絡しながら、それぞれが時間がある時に1時間でも10分でも、10枚でも1枚でもペンキを塗れる時間があったら現場に来て作業をします。無理のないようなスケジュールで参加できるよう心がけています。

3 プログラムごとの準備



作品制作場所となる広場を整備し、廃材以外の材料や道具を揃えます。材料の研磨、防腐剤塗り、下地塗りなどその年に予定されているプログラムや作品数に合わせて準備をします。おさかなアート用の木は約700~1,000枚ほど準備をします。

4 町の人々への呼びかけ



アートベンチのようにデザインを町の人から募集しアーティストと一緒につくる作品があります。そのデザインを募集したり様々な形で参加してくれる人を募るため、ポスターの配布や町内での声かけを各種団体と力をあわせてみんなで行います。

ジン先生との出会ったばかりの10年前、最初は何もわからず、意思疎通も難しく、身振り手振りでとにかく町の責任者の皆様に紹介しながら、今の町の様子などお話をしたことを思い出します。



くろしおの芸術祭スタート！

芸術祭がはじまったあともたやるのがたくさん！各種団体と連携し事前に企画準備したイベントやワークショップを開催します。



セレモニーや交流会の開催

各種団体との交流会準備。それぞれ日程を調整。少額の予算を補助し、おもてなしをお願いしています。

オープニング

おかえりなさいという感謝の気持ちを込めて懇親会。



休日の魚釣りの企画

毎年中秋みをとりにゆっくり種子島の楽しみ、魅力の一つである魚釣りを楽しまします。釣れたらその日の宴会の材料になります。

クロージング

作品のお披露目会です。行政、各種団体、作品に関わった人達を招待し、作品の紹介をします。その後交流会を行い来年の話も交えながら楽しい時間を過ごします。



展示、撤収



アーティストが帰って行ったあと、実行委員会で作品の展示に向かいます。ペンキのついた椅子、机を綺麗にし、返却します。空き地の整地をし、終了となります。

学校へ出張ワークショップ

小学校でまちづくりワークショップ毎年小学校から依頼があり、この事業に協力してくれます。ジンさんと共に学校へ。みんなで大きなモニュメントへと作り上げていきます。

君たちが描く魚たちが町を華やかにして町の人や種子島を訪れるお客様を楽しませてくれるよ！



町の人たちからの寄付、差入れ

たくさんの人達が毎日のように訪れ差入れをしてくれます。手作りのお菓子、果物、安納芋の焼き芋、天ぷら、刺身など、アーティストの皆さん種子島で太って帰ります。アーティストに寄付をしてくれます。アーティストの頑張りに町の人達が答えてくれています。

くろしおアートプロジェクト組織相関図

主 催

西之表市商工会

会 長 福井 清信

副会長 東 正行

副会長 酒井 通雄

プロジェクト運営実務

くろしおアート実行委員長

平川 浩

プロジェクト運営支援

西之表市商店街振興協同組合

代表理事 平川 浩

専務理事 仁禮 正章

商工会 まちづくり本委員会

(事業計画及び予算承認等議決機関)

委員長	丸山 一徳	商業対策委員長
副委員長	竹下 秀樹	商店街振興協同組合
委 員	福井 清信	商工会会長
	東 正行	商工会副会長
	河口 修	飲食店振興会長
	平川 浩	商店街振興協同組合理事長
	日高 義人	商店街振興協同組合
	伊達 昭博	商業対策委員
	濱島 英人	商業対策委員
	荒木 政臣	商工会青年部長
	横林 律子	商工会女性部長
	岩坪 英世	西町通り会代表
	和田 正治	東町通り会会長
事務局	神之田 雅弘	商工会

実行委員会メンバー

岩坪 英世	西町青壮年部
松浦 起也	西町通り会
竹下 秀樹	西町通り会
仁禮 正章	商店街振興協同組合
錨 忠宏	商工会
濱添 香	商工会
椎田 なほみ	商工会
仁禮 ひとみ	どんぐり倶楽部
平瀬 祐二	種子島元気ネットワーク
平川 久美子	西之表市消防団女性分団
佐藤 秋子	西之表市消防団女性分団
長渡 礼子	まちかどインフォメーションセンター
福元 亜里沙	まちかどインフォメーションセンター
石原 瑛子	
柳田 亜紀子	あこう楽習会

理 事	竹下 秀樹	西 町
	岩坪 英世	”
	若水 太司	”
	松浦 起也	”
	高崎 吉弘	”
	平 道人	東 町
	和田 正治	”
	徳永 正人	”
	松田 学	”
	長瀬 五男	天神町
	日高 義人	”
	河野 昌行	鴨女町
事務局	神之田 雅弘	商工会

後援団体 (過去実績)

西之表市
西之表市教育委員会
鹿児島県熊毛支庁
種子屋久農業協同組合
種子島漁業協同組合
種子島火縄銃保存会
西之表幼稚園
MBC 南日本放送
KTS 鹿児島テレビ
南日本新聞
南日本新聞西之表販売所

協力団体 (過去実績)

種子島元気ネットワーク
西之表市商工会女性部
西之表市消防団女性分団
西之表市連合青年団
西之表市立榕城小学校
西之表市立種子島中学校
あかつき学園
西町町内会
西町青壮年部
西町通り会
西町子供会
東町通り会
鴨女町青壮年会
どんぐり倶楽部
種子島レオクラブ

アートディレクター	秦 榮燮 (ジン・ヨンソプ)	韓国
コーディネーター	田村 薫	石川
アーティスト	岩田 とも子	東京
	杉原 木三	宮崎
	新里 碧	東京
	小野 サボコ	大阪
	和田 幸三	兵庫
	村井 ひとみ	福岡
	篠原 洋之	福岡
	川越 れい子	種子島
	金 度衡 (キム・ドヒョン)	韓国
	李 龍氣 (イ・ヨンギ)	〃
	金 成起 (キム・ソンギ)	〃
	金 錠珉 (キム・ジョンミン)	〃
	梁 玗順 (ヤン・ヒョンジュン)	〃
	李 昶濤 (イ・チャンウン)	〃
	鄭 文植 (チョン・ムンシク)	〃
	金 鐘先 (キム・ジョンソン)	〃
	徐 同完 (ソ・ドンワン)	〃
	金 裕新 (キム・ユシン)	〃
	孔 旻智 (コン・ミンジ)	〃
	鄭 憲七 (チョン・ホンチル)	〃

通 訳

日黒 映美
コウ・ヒョンジン
秦 光燮 (ジン・グァンソプ)
申 承植
申 里美





5

町の人々の物語

黒潮に乗っていろいろな物、いろいろな事が流れ着くこの種子島、海の玄関口にあるこの町、そこに住む人たちは、昔から新しい出会いと交流が大事であると自ずと感じながら暮らしています。暖かく迎え入れてくれる町、懸命に楽しく取り組む町、話をして楽しい町、そんなやさしさ、愛情にあふれた町とアーティストの関係が、まちづくりに大きな効果をもたらしています。この章は、アーティストの一人、岩田とも子が聞き手となり、このプロジェクトに参加した町の人々 26 名がそれぞれの歴史、想い、そしてプロジェクトのこれからの可能性を、楽しく、真剣に考え語ったこと物語として綴りました。



ジン先生・平川浩・田村薫の 出会いからすべては始まった

(有) 南光種苗 / 西町通り会会員

竹下 秀樹



竹下さんの壁ギャラリー

40歳の時に家業を継ぐため島に帰ってきて、それから20年が過ぎました。当時、帰島間もない私を街の人たちが、暖かく迎え入れてくれたことを覚えています。町内会や商店街の人たちは仕事も忙しい中、恒例行事等の様々なイベントにも懸命にまた楽し気に取り組んでいて、そういう諸先輩や友人の姿に私もまた感化されました。地域コミュニティはそういった方々の地域への思いとそこからくる献身的行動で維持されており、現在、くろしおアートプロジェクトが継続できているのもジン先生、平川委員長、田村さんの献身性も然ることながら、そういう文化と人的ネットワークがこの地域にあったからだと思います。

2011年第1回のくろしおアートプロジェクトが始まる時に、商店街振興協同組合の役員をしており、同じく役員の平川浩さんから一緒にくろしおアートを、と協力要請を受け、できることをしたい、という気持ちになりました。はじめは確かアーティストが滞在する民宿の紹介などのやりとりがあって、そのあと予算面に関することを担当しはじめたのだと記憶しています。まちづくりの下絵は浩さんがやって、私は予算、スケジュールなど運営側に立ってサポートをしています。

数ある作品の中でわたしにとって印象深いのは、種子島を形取った、キム・ドヒョンさんがつくった鉄砲でしょうか。材料探しから始まって、いろんな人から廃材を集めました。はじめはどんな材料を集めていいのかわからず、岩坪さんと安城へ支柱になる素材を取りに行き、仁禮さんのところで廃材を取りに行き、あっちに行って、こっちに行って・・・それがアーティストの手によっ

て廃材が作品になって感動しました。もともと廃材なので、錆が多いのでメンテナンスが必要な作品でもあります。それを定期的に有志が錆止めをしていると、そのことが特に印象深いです。

アーティストたちの作品はそれぞれに個性がありますがアーティスト自身も同様です。わたしの似顔絵をトロ箱に描いてくれたキム・ソングさんもとてもフレンドリーな方です。親しみや情、温かみを感じます。だからこそ感情の交流が生まれるのだと思います。言葉は通じない中でも、笑いあって、和やかに宴を楽しめます。

街の人の中にも変化があります。経年やる中で、差し入れが増えてきている、事業の中にコミットしている人が増えるとともに、何かしらフォローをしたいといろんな人から聞くようになりました。浩さんの寝食忘れて動き回っている姿に感化されコミットする人が増えていると思います。継続する過程で小さくなっていく事業が多い中、くろしおアートは、徐々に事業が大きくなっています。参加するアーティストと交流を重ねて、人とのつながりができている、素晴らしいと思います。今後は地域の裾野をいかにひろげるかが課題です。地域でのアートプロジェクトの核はコミュニティ。地域の良さに気づくこと、住みやすさをつくるための手法がアートプロジェクトだと考えています。そういう意識を共有し、その手法を教えてくれたのがくろしおアートプロジェクトです。もしも、アーティストたちが来れなくなったとしても、教えてもらったことを糧にして自分たちで楽しんでやっていけることがある、そんな思いがあります。

住民が主役のアートと 活動観光資源としての可能性

西之表市役所経済観光課課長
岩下 栄一



岩下さんの壁ギャラリー

毎年ジン先生との再会がうれしいです。オープニングイベントの講演でお話しいただく、くろしおアートへの想いは、国を超えて、人と人のつながり、心の温かさを感じます。

私は大学を卒業後、故郷に戻り現在、市役所経済観光課にて勤務しています。くろしおアートに関してはただ、作品を見て楽しむ、制作現場を時々訪ねる程度で、実際に参加した年は数えるほどかもしれませんがおさかなアートで板にペイントしたこと、壁ギャラリーのトロ箱アートでモデルになったこと、子どもがマイバックづくりにチャレンジしたことがあります。トロ箱アートの制作中に、その場でモデルのひとりとなり、韓国人の若くイケメンのアーティストに制作してもらいました。初めは写真を写され恥ずかしかったのですが、後日作品のお披露目で多くの作品の中に自分の姿を発見した時には、うれしく思いました。展示された現和物産館の横を通る際は、時々ちらっと見えています。作品の中で一番気に入っているのもトロ箱アートです。プロジェクトの特色である、地元の人が主役のアート活動を象徴するものだと思います。

商店街について言えば、人口減少や郊外への大型店舗出などにより、くろしおアートが始まる数年前から、閉店する店舗が増え、空き地化が進むようになっていました。そうした空き地や空店舗に、アート作品が置かれたり、壁にオブジェが飾られたりすることで、失われていく記憶の中にそれに代わる新しい彩り、息吹が、活動の積み重ねによって、新たな商店街の景観として徐々に生まれていくような変化を感じてき

ました。ある日、商店街を歩いていると、観光客と思われる若い女性が数人、店の壁にあるおさかなアートの前で、記念写真を撮っているのを見かけました。その時、このアート活動が、町の魅力だけでなく観光資源としても可能性があるかもしれないと思うようになりました。

今後も、くろしおアートの活動が持続してほしいと思っています。その理由としては、多くの方々が、アート活動に加わることで、商店街との関りを買い物以外でも持つことができること、また参加した作品がまちなかに残ることで、地元への親しみや愛着に繋がっていくこと。そしてその輪の広がりや継続が、商店街の持続性に関与していくと思うからです。

そうした意味では、小学校とも連携し、教育の一環で児童の作品を制作する活動もとてもいいことだと思います。今後の課題は、この素晴らしいアート活動を如何に持続させていくかだと思います。それは、この活動を支えている地元の商店街の方々だったり、行政をはじめとする財政的な支援の面があります。種子島の自慢は、新しいものや人を受け入れ、時代を変えていくこと、そして寛容性と共創力のある風土があることでしょうか。くろしおアート自体の発展のためにできることは多くあると思います。

例えば、芸術祭の会期中では金銭的な支援のために協力金として寄付を募る、くろしおアートのグッズをつくって販売する。芸術祭会期以外では観光客向けにおさかなアート体験の場を設け、芸術祭で公開する。その他飲食店などとコラボしたメニューの開発なども面白いかもしれません。

くろしおアートが創造性豊かな活動であると同じように、商店街で若い方などが、夢を持って新しい事業にチャレンジできる環境が増えていければと思います。そうした意味では、まちなかの空間を上手く活用できるように、貸し手と借り手のマッチング、ニーズ・シーズの情報などきめ細かな共有や関係団体の連携が必要だと思います。

輪が広がる先を見据えて

(有) 岩坪鮮魚精肉店 / 西町青壮年部会長
岩坪 英世



岩坪さんの壁ギャラリー

西之表市の東海岸側の安城地区に生まれ、大学進学のため島外へ。就職をした後に、家業を継ぐために種子島に帰ってきました。子どもの頃は、海に潜って魚を捕まえたり、山中の道なき道を探検したり、種子島の自然で遊んでいました。今は体を維持するため種子島の自然を活用したトレーニングをしています。西町青壮年に入って2年目、2009年に「時の芸術祭」の協力を平川浩さんから打診されました。高校の時に図工が好きで美術専攻するほどだったこともあり、すんなり協力したい気持ちが湧いたこと、そして、浩さんのお願いだったから、ということもあり参加しました。この年から現在のくろしおアートプロジェクトに至るまで継続して関わっています。



自身の店舗の壁ギャラリーの材料カットをする岩坪さん

くろしおアートプロジェクトでは、いろんな人との出会いがありました。アートプロジェクトの影響で自身の店の売り上げが上がることはないけど、いろんな意味でよかったと感じています。ベンチの第一号を作ってもらったこともありますし、そのベンチにお客さんや観光客が座しているとうれしくなります。

何年か前から始まったアート看板についてはいくつか改善点があるように感じています。アーティストにただ看板をつくってもらうのではなく、店とアーティストの両方が協力してつくる、という当初の意味に立ち戻り互いに意識したほうがよいのではないかと思います。看板が完成するに至るまでの流れを一度見直すべきではないでしょうか。例えば店側へ



店舗の壁に貼られたおさかなとアートベンチが始まる前年につくられたリサイクルベンチ

の参加呼びかけについても「話の持って行き方」というのがあるし、作ってもらいたい人の募集広告を出してアプローチするなどしつつ、はじめから「一緒に作ってもらうのが目的です」ときちんと伝えるのが良いのではないのでしょうか。

くろしおアートプロジェクトに限らず、地域活動には限られたグループ、個人が参加しており、メンバーも重なっていきます。くろしおアートプロジェクトは、その輪をもっと広げていかないと今のままでは詰まってしまうのではないかと思います。また、西之表市だけではもったいない。できるかわからないけれど、屋久島まで広げていきたいです。年ごとに範囲を広げていけば、持続していくのではないかと、意識も変わってくるのではないかと考えています。個人単位では協力してくれるけど、そこをどうやって団体まで引き上げられるかが肝心です。

屋久島へジン先生たちと行き、登山などを案内したことがとても思い出になっています。また、ジン先生たち、そして若手のアーティストと一緒にまた、屋久島登山に行きたいです。

けなあの精神

社会医療法人義順顕彰会種子島医療センター

高山 千史



高山さんの壁ギャラリー

2005 年から麻酔科医として医局から派遣されて以来今の病院に常勤しています。それ以前の 1990 年頃、病院の手術室の立ち上げと設計にも関わっていたということもあるのですが、その関わりも当時の医局長が、私が幼少期を種子島で過ごしていたというのを知っていたからということでした。種子島で常勤するまでは熊本、宮崎、そして関東含め各地で勤務してきましたが種子島での勤務が決まったときは“ずっとこの島にいることになるだろう”と覚悟を決めていました。少年時代を共に過ごした友人達の中には今でも島で活躍している人も多いです。中でもえのもと歯科の榎本孝先生は顔が広く、医師として島に戻ってきた私と町内の様々な集まりとを繋いでいただいたりもしました。サッカーチームやライオンズクラブなどもそうです。そんな集まりとの関係も強くなっていった頃、2010 年の流木スポーツ大会や種子島流木動物園をやるという話が挙がっており私も作戦会議に参加したのを覚えています。あの時は、本当に色んな人が協力してくれましたね。商店街の人から消防署や警察まで色々。種子島の特徴を言葉にすると“けなあの精神”でしょうね。みんな仲間。そうゆう意識が残っている島が種子島です。熱狂的な強さはないものの、誰かが何かをしていたら周りに興味をもって動き出す。その興味を引き出せれば段々形として残っていく、という感じでしょうか。くろしおアートプロジェクトのいいところも人間関係が繋がったまま切れずに続いているということでしょう。それはスロー&ステディ、共通の話題性をつくることをじっくりと確実にやっているからです。おさか



ジン先生と談笑する高山さん



懇親会にてアーティストと会話する高山さん

なアートがまさにそれを体現していると思います。これは元々、ジン先生が釜山の町で行っていた試みだと聞いています。今ではその町は芸術の町として有名になっているのですが、それは決して簡単なことではなかったはずです。興味を持ってもらえる内容、参加のしやすさから、社会との接点を広める一つの手段としてアートが存在していたのだと思います。種子島でも今では商店街からどんどん広がっています。今後、市や町という括りを超えていけると面白いだろうなと思っています。町の人におさかなアートについて聞けば「みたことあるよ」とみんな言いますね。それほど浸透している。それが大事だと思います。アーティストとの思い出に残っているのはやはり楽しい飲み会です。飲みながら話している間に彼らが元々専攻しているアートにも興味が湧いてきました。聞けば、島での創作スタイルは本業ではない、得意分野ではないという人もいます。本来の実力が発揮できずいる部分もあるのではないかと思います。それでも頑張っている彼らの姿を間近で見るのは素晴らしいこととも思いますが本来の作品を見たいですね。そういった作品を見られる場所があればと奮闘したこともありますが高かった……。しかし今でも彼らの作品をもっとみてみたいという思いは残っています。町は今ターニングポイントを迎えています。先日あった市長選などもそうです。みんなが自分のこととして将来というのを現実的な形で考えるところにきています。様々な議論に対して賛成、反対というのが混沌としているようです。多くの人にとって100%どちらか、ということなくて様々な事情や思いが混ざっているはずです。そこで必要なのは対話。みんなで話すことです。コロナ禍で半ば強制的にオンラインのツールを使わなくてはならない状況になったことで、みんなオンラインの使い方がだんだん上手になっていくはずです。状況が悪くとも盛んに意見交換ができるようになればいいですね。くろしおアートプロジェクト、今後も私は市民の一人として自由な見方で無理なく関係を続けて行きたいです。今度、友達つれてくろしおの芸術祭いきますよ。

(※) けなあは種子島の方言で“親戚や家族という意味”。周辺の仲間も同じように親しい関係であることを表す。

関わりとともに ひろがるアイデア

商店街まちかどインフォメーションセンター
長渡 礼子



長渡さんの壁ギャラリー

くろしおアートプロジェクトのお友達がいっぱいできて、くろしおのつながりは仕事にもつながっていきました。でもこれは私にとってはまだまだスタートラインだと思っています。

父親の仕事関係で幼少期は種子島南部の南種子在住、小学生の頃から図工が好き、勉強より図工が好きでした。鹿児島の高校へ進学した以外は、種子島に住んでおります。結婚後の鹿児島県熊毛支庁に勤務時に、ポスターデザインなど、絵を描くなどこの時の様子を見てくださっていた職員から後に、西之表市運営であるインフォメーションセンター勤務を勧められました。

インフォメーションセンターは西町商店街にある公民館のような案内所です。観光客や住民のフリースペースとしての役割の他、街に積極的に関わり、必要な場所となるよう試行錯誤繰り返しています。2016年にここでの勤務がはじまったと同時期にくろしおアートプロジェクトに関わるようになりました。それまでこのプロジェクトについては西之表市在住ながら中心部に来ることがあまりなく、知る機会がありませんでした。出来たばかりの施設で、何をしたらいいか分からなかったこともあって商店街同士のつながりについて考えていました。所属していたまちづくりの為の活性化委員会のメンバーはくろしおアートに参加している人がほとんどで話題にのぼることも多かったこともプロジェクトへの参加理由の一つです。インフォメーションセンターの運営とも結び付けたいとの想いもあり、まずはおさかなの板のペンキ塗りから手伝うよになりました。徐々にインフォメーションセンターではくろしお関連の展



市役所のバスのりばに設置された長渡さん制作のアートベンチ

示や、実行委員会の運営を共にするなど、その立場を超えて中心になって関わるようになっていきました。そうする中で私自身の交友関係と、街を見る印象に変化がありました。また、日常の中でも町中でおさかなアートなどを見てなんだかオシャレに見えてきたり、いろんなところに目が行くようになったり、ここにもあったんだって気づいたりと変化がありました。もしペンキが剥げたおさかながいたら気になりますし新しくした方がいいんじゃないか、となります。そんな「おさかなの板」を再利用してセンターに訪れた人と新たに描いて貼りたいとアイデアも出ています。この島で好きなところはやはり「人」です。人が優しい島でみんな世話好きです。私自身も見ず知らずの島外からきた、汗だくで働いている建築現場の作業員に、クーラーボックスに氷を入れて差し入れるなど、見返りを求めずに助けたくなります。誰かから受けた優しさは自分も誰かに返そう、そんな思いがあります。くろしおアートにちょっとずつ関わるようになって4年が経ちましたが、これからももっともっと人とつなげて、街と全体がつながればいいと思っています。この流れを利用してまちづくりもしていきたいし、持続すべき事だと思います。まだはじまったばかりです。これからの街について、今よりもっと人と商店街だけではない街とのつながりをつくり、みんな楽しめる空間にしたいと思っています。

思いがつなぐ恩返し

くろしおの芸術祭世話役 / キム・ジョンミンの妻
石原 瑛子



瑛子さんの壁ギャラリーとジョンミンさんと

元々あまり家からでるのが好きではありませんでした。友達も決して多くはなく島外へ出て一人でタクシーに乗ることも出来なかった私が変わるきっかけとなったのはくろしおアートプロジェクトでした。

2016年の秋、高校時代の恩師だった平川久美子さんから合わせた人がいると電話をもらいました。引っ込み思案だった私を先生が心配していたのかもしれません。それが夫キム・ジョンミンとの出会いでした。彼はくろしおアートプロジェクトに参加して2年目の作家で平川夫妻をはじめ島の人にも親しまれてたこともありご縁を頂きました。初めて会った日の翌日、現場へ見学にちょっとだけ行ってみようと顔をだしたのですが作品の多くは完成間近の状態だったので、少しだけベンチの色塗りをさせてもらいました。その時「あまり参加できなかった…」という思いが残りました。夫とは会期中は積極的に話をすることも出来ぬまま会期を終えてしまいましたが、その年の終わりに改めて島で再会することになりました。その後は3ヶ月おきに種子島へ通ってくれるようになってお付き合いが始まりました。

2017年、前年の心残りもあって今度は準備段階から参加しました。準備をしていると西町の人「頑張ってるね」とか「ご苦労様」とか、優しく声をかけてくれるのが本当に嬉しかったです。西町の住民じゃないのに、でしゃばり過ぎかなーとか、押し掛けて迷惑じゃないかなーと、最初は色々考えてたのですが、いつも優しく声をかけてもらうことで楽しく作業続けることが出



おさなか板の準備をする瑛子さん



アート看板の防腐剤を塗る瑛子さん

来ました。また、単純作業が多くて自分に合っていたのかもしれませんが。会期が始まるとジン先生やアーティストが声をかけてくれて、一緒に作業させてもらえて、徐々に町の知り合いも増えていきました。アーティストの岩田とも子さんとはこの頃からよく話をするようになったのですが自分自身の地元に対する考えが少し変わり、島のいいところを探すように視点を変えるようになりました。途中から親友の福元亜里沙さんも参加してくれるようになりました。長い付き合いの私でさえ、彼女の機転の良さやコミュニケーション能力の高さに新たに学ぶことも多く、互いに仕事で現場に來れない時間を補ったりすることでより一層充実した関わりを持つことができました。参加年数を重ねるごとに周りの方々のプロジェクトに対する思いを感じるようになりました。会期前から島にきてくれる田村薫さんやアーティストたちが遠くから町のために來て制作に力を入れてくれているのを間近で感じ、彼らを手伝うことで自分がいつもお世話になっている人たちへの恩返しになるのではないかと思います。アート全般についてはよく知らないのですが、夫の作品は好きですし、みんなに見てもらえる作品を作れるってすごい！いつも思ってます。島ではアート看板やベンチなどを手掛け、絵は苦手だと本人は言っているけど温かい作品になると思います。出会ってから4年目、私たちは2019年に結婚しました。結婚の報告や出会いについて周りの人に話をすると「あのおさかなのだね」とわかってくれるようになっていました。プロジェクトが町に浸透しているためか「さかな」、「看板」といえば伝わるのが嬉しいです。

アーティストとつくった 大好評のアート看板

あ〜と工房吉心 / 種子島元気ネットワーク
平瀬 祐二



平瀬さん撮影の種子島の風景



ドヒョンさんと一緒に制作したアート看板

種子島の自然や、特に水平線に沈む夕陽を写真撮影しています。高校生の時に、写真に興味湧き部活でフィルムカメラを触って以来、今ではサークルをつくり活動しています。仕事では、印刷会社勤務を経たのち、自営にて印刷物、ガラスエッチングを生業とするなど、ものづくりを専門としています。「種子島元気ネットワーク」という、島でものものづくりされている方々の団体があり、そこで代表もしています。主な活動はマーケット開催などです。くろしおアートプロジェクトに参加したのも、この団体がきっかけになります。当時はメンバーの一人でした。

始めの年は忙しくて参加できず、翌年に初参加。次の年はちょくちょくお手伝いだけでしたが、何年か経つころには、アート看板用の土台となるパレットの集め出しなどもしていました。ものづくりが好きなこともあり、作品制作にも積極的に関わっています。キム・ドヒョンさんとつくった作品、わたしの看板も大好評でやっと最近家の入口にたてました。入口は自分の土地じゃないから、許可を取るのに時間がかかってしまっ。地主に立ち話ではしてたけど、正式に最近ちゃんとたてて大好評です。

関わることで、くろしおアートの作品に喜んでいる人たちをみたり、会話のきっかけにもなっていることに関心が湧いてきます。アートベンチにじいちゃんばあちゃんが座っていたり、現和物産館の壁ギャラリーをみている人がいたり。そんなある日、住んでいる集落で仲良くしている、作業療法士の



種子島元気ネットワークのみなさん制作のアートベンチ



平瀬さんにお声がけした作業療法士の田中さん

方から相談があり、デイサービスでおさかなを描くワークショップを体験させてあげたいとお声をいただきました。みんなに喜ばれているくろしおアートですが、年間を通じて何かできれば良いと思いますが予算がない。お金を稼ぐ仕組みがあればと感じています。一年通じてやってればもっとくろしおアートプロジェクトを意識してもらえるのではと、それでもっと輪が広がって欲しいです。

町を彩る桜と花火

松浦金物店 / 西町通り会

松浦 起也



仕事の合間を見つけて加勢する松浦さん

くろしおアートプロジェクトには発足当時から関わっております。くろしおの芸術祭の会期前には必要な木材の研磨、塗料や必要な材料の在庫確認及び補充、木材加工時の防塵、作業に必要な道具の確認や貸与、夜間用の電球設置など、そして会期後には残材処理や分別、会期中に借り上げた道具の返却、材料及び道具の片付けなどを関係者及び西町通り会会長以下会員で行っています。

松浦金物店は芸術祭期間中に使用されている広場と道を挟んだ向かい側にあることもあって、作品を制作する上で必要になった材料や道具の入手の可否および納期について現場から聞かれたことに対応するなどしています。また、普段からお店に来るお客さんがプロジェクトの様子を目にすることも多いのですが、当初はあまり理解をされている感じではありませんでしたが、回を重ねるごとに年々アーティストの技術等に感心する方も出てきたという印象です。来店する大工等の職人から作品の設置についてのアドバイスを受けたこともありました。芸術祭の会期中、キム・ソングさんがお店の壁に桜の絵を描いてくださったのですがその絵を写真に撮ってくださいる方もいます。稀に、本物の桜と勘違いする方もおります。

お店の前のアート看板は2016年にアーティストの杉原木三さんに担当していただきました。松浦金物店が花火の打ち上げ業務を行っていることもあり、花火の絵柄を提案しました。花火の絵には私が好きな花火、ということで通常オープニングやエンディングに使用している種類の花火をイメージして



杉原木三制作の松浦金物店のアート看板



松浦金物店の壁面にソングさんが描く桜

描いてもらいました。作品に含まれる私の絵は他の作品とは違う試みをして欲しかったこともあり、遊び心で寝っ転がっているポーズを描いてもらいました。体を種子島の山々に見立て、山の上から花火が打ち上がっているような感じになっています。

私は種子島で生まれ育ちましたが、ここは鉄砲伝来やロケット打ち上げ、という時代における最先端と自然が共存する島。町の各地に作品が展示されていることで、より町が明るくなったと感じています。

人を巻き込む場として

(有)種子島クリーン産業 / 西之表市商店街振興協同組合
仁禮 正章



仁禮さんのアート看板

小さい頃から海が好きで、魚釣りを友人たちとよくしていました。高校卒業後、名古屋の大学に行き就職をした後に26歳の時に種子島へ家業を継ぐために戻ってきました。

結婚を機に西町で住むようになり、それまであまり参加していなかった地域の活動をするようになり、西町青壮年にも入りました。

くろしおアートには、西町青壮年が当初から参加していたので、自ずと参加することになりました。それまで同じ町に住んでいても、一つのことに思入れを持って活動をするのはなかったのですが、くろしおアートでは協力体制が生まれて、色んな人を巻き込んできたのでコミュニケーションの場となり、またいろんなところにつながる可能性を感じます。

実際住人のコミュニケーションが増えています。なかなかこのような活動はすぐに経済的な影響につながっていくわけではないけれど、10年続いたことを考えれば少しずつでも続けていくことが重要だと思います。また、これからもぜひ、と思ってもらえる作品がもっと増えてほしいです。

町については、観光に力を入れないといけないだろうし、色々ありすぎて、ほとんど同じ人が同じような話をしていて出尽くしているという状況です。別角度、視点からみれる人が必要だと思いますし、いろんな意見を聞いてみたいです。



さかな板を貼る壁面を洗浄する仁禮さん



西町青壮年のみなさんと、芸術祭会期中に商店街に飾り付けるフラッグの準備



仁禮さんのアート看板を制作中のドンワンさん

住民同士の関係性のひろがり

(有) 西之表清掃社 / 種子島火縄銃保存会事務局長
錨 忠宏



モニュメントのメンテナンスをする錨さん



韓国のアーティストと勘違いされた錨さん

くろしおアートは度々取材を受けることがあり何度か新聞でも紹介されているのですが、ある時、私のことを韓国から来たアーティストの一人と勘違いされたまま新聞に掲載されてしまったことがありました。それもいい思い出です。

大学卒業後に会社の経営を継ぐため帰島して以来、種子島で暮らしています。

くろしおアートプロジェクト発足時より商工会の理事、西町青壮年会員として参加していました。くろしおアートで好きな作品はおさかなアートとアート看板です。毎年おさかなアートの素材準備やアーティストの方との懇談会の会場を提供するなどしています。

懇談会ではその日の作業を終えた作家たちと色んな話が交わせることもあって毎年印象に残る時間となっています。また、同じ島の住民でありながら普段あまり接点のない人とも話す機会も増えて関係性がひろがりました。くろしおアートを通したひとつの変化だと思います。

芸術関係のイベントは地元には根づくにしても、観光資源として活用するにしても時間がかかると思います。もう暫く持続して様子を見るべきだと思います。これからのことに関しても、他の芸術祭とのコラボレーションであったり SNS をうまく活用した情報発信が必要ではなでしょうか。また、事業を継続していくための組織作りをしっかりと行う必要があると考えています。



西町青壮年主催の懇親会



錨さんのアート看板制作中の岩田とも子

世界観と交流のひろがり

商店街まちかどインフォメーションセンター

福元 亜里沙



福元さんの壁ギャラリー

去年、プロジェクトが10年を迎えるときいて驚いたほど、参加する前のプロジェクトについてはほとんど知りませんでした。私は2017年に親友の石原瑛子さんに誘われてくろしおアートプロジェクトに参加しはじめました。彼女と共にくろしおの芸術祭の会期が始まる前の準備の段階から関わるようにしています。木材のカット、下地塗り、ワークショップで使う道具の整理、過去の作品の状況チェックなどなど、芸術祭が始まる前にできること、アーティストが来る前にできることはたくさんあります。参加の形としてはそんな裏方の作業が多いです。

準備が一番大変ですが平川さん、松浦さん、そして瑛子さんと少人数にも関わらず大量の材料を準備するのはなかなかの達成感があるし、アーティストたちが来る前に終わらせた！と思っているところにジン先生が来て「大変だったね」と声をかけてくれて増々やったぞ、と思えるのです。

そういった裏方作業をしていると、よりアーティストの近くで交流できることもあって友人のように仲良くなったアーティストもたくさんいます。2019年には初めて韓国人の女性アーティストのコン・ミンジさんが来てくれたこともあり、日本人アーティストの岩田とも子さん、そして瑛子さんの4人で休日に島内を旅行しました。岩田さんはちょっと地面をみている視点が違って自然物採取をよくしています。集めたものでリースを作ってくれたりしたこともありました。アーティストのソ・ドンワンさんにはトロ箱に私の絵を描いてもらいました。ただ描いてもらうのではなくて色塗りを一緒にさせてもらったり、



インフォメーションセンターで働く福元さん



小倉さんモニュメントに色を塗る福元さん

制作が終わったあとも夜一緒に飲みにいったりもしました。韓国に遊びに行ったときには色々案内してくれたり素晴らしい釜山の夜景を見せてもらうなど大切な思い出となりました。種子島は元々海外からの観光客も少ないため島から出ない限りは違う国の人と話すこともなかったと思います。彼らとの交流を通して知ることも多く、外国に興味が湧いてきました。韓国語の勉強も始めています。芸術祭は僅かな期間ですが制作の時間、そしてオフの時間通して楽しく貴重な時を過ごしています。はじめはプロジェクトについて全く知らなかったものの参加し始めると楽しくて交流もひろがり、世界観も広がっていきました。また、仲良くなったのはアーティストだけではなく。プロジェクトを通じて出会った長渡礼子さんの紹介でインフォメーションセンターで働くことになりました。ここでは観光客の人と話すことも多いのですが町中の作品に興味を持ちはじめてくれているのがわかります。大阪からきたという女性から質問されたことがあって韓国からアーティストが来るんですよと伝えると驚いていました。また、コロナの影響でイベントが減ってしまった一方で島内の他の地域からやってきて町中を散策する人が多くなり、おさかなアートに気づいてくれる人も自ずと増えました。個人的にはみんなで協力して完成させる作品が好きです。大掛かりな作品をつくると地域の人の手が多く必要になります。みんなが来て手伝いたくなるような、意欲を掻き立てられるものがあっていいなと思っています。下準備なども楽しんでくれる方や SNS での情報発信など広めるためのアイデアのある方、いろんな方が一緒になって取り組めると良いなと思います。

くろしおアートプロジェクトはまちおこしの一つ。消えてほしくないし是非続けていきたいです。

海と時代を越えた出会い

西町 / くろしおの芸術祭世話役
井元 いち子



いち子さんの壁ギャラリー

私は中心街の東町で生まれ育ちました。プロジェクトの参加には、街に対する思いと自身の歴史的背景がありました。

私が幼い頃の街の姿は、人通りも多く、昔ながらの勢いがありました。専門店がいくつも入ったビルがあり、昔の街を象徴するような場所でした。小学生の時には商店街に力道山が来たこともあります。その後も北島三郎や水前寺清子といった有名人が来たこともありました。また西町にも“国上屋(くにがみや)”という専門店街がありました。7月25日には『チョッサー』という神社お祭り(太鼓山)があり、島内から人が集まってきてました。人も少なくなっていました。が『チョッサー』の時の胸が躍る感覚は今も残っています。

私がくろしおアートプロジェクトについて知ったのは「南国みやげ品ひげさんの店」でチラシを見た時でした。韓国の人たちが来ると知り、心打たれ胸騒ぎがしていました。というのも、私がかかっている家系図には450年前もご先祖様が、使節団として現在の韓国から日本に来日してきたとの歴史的背景が記されており、韓国には時代を越えた想いがあったからです。そんな想いもあって参加に至りました。会期中、通訳をくださった映美さんのおかげもあり、韓国からの作家たちと多くのことを語り合うことができました。今では、アーティストが来た時は「おかえり」、帰る時は「いってらっしゃい」と言うくらい、家族のように思っています。目に見えなかった種子島の姿が、韓国の目に映り、それが種子島の繁栄にもつながる、そのように期待しています。私自身の参



2018 年参加のアーティストたちと一緒に



西之表市のお祭り、太鼓山の様子 /2014 年撮影

加への経緯とプロジェクトとの出会いから、街のため、そして子どもたちのため、国際交流の必要性を感じます。子どもたちの目線になってやることも大事だと思います。人は上からの目線になりがちですが子どもたちが何をしたいのかを知るべきだと思います。大人とは違う感覚から学べることも多いかと思います。

作品を前にして思い出す父の手

(有)小倉燃料 (故小倉達弘さんの娘さん)

小倉 枝里



枝里さんが小さい頃の達弘さん

何も考えたくない時に一人の時間をつくりに行く場所があって、その屋上から海と夜空がよく見えます。そんな場所が徒歩圏内にあることが種子島の良いところでもあります。

実家の仕事の為に 2019 年に種子島へ帰ってきました。元々帰ってきたいとは全く思っていませんでした。

大学卒業を経て鹿児島で仕事をしておりましたが、10 年ほど前に鹿児島で一人のアーティストを、父から紹介され一緒に食事をしました。父がプロジェクトの前進であったイベントに携わっていた際に自宅にそのアーティストを宿泊させていたようでした。父が関わっているそのイベントが続いて観光客が来たらいいなと思っていましたが、父から島での取り組みを聞いたのは、その一度きりで、“くろしおアートプロジェクト”として知ったのは帰島してからのことでした。

はじめて参加したのは、芸術祭の期間中にアーティストや島の人たちと一緒にご飯を食べている時でした。一番最初に、ジン先生が父の話をしはじめて、なんだと思いびっくりしたのを覚えています。

ジン先生の他にも街の人々から父にまつわる溢れんばかりの思い出話がはじまって盛り上がっていました。父はそれほど町の人、そしてプロジェクトとの関わりが強かった、ということなのかなと思いました。知らない父の一面を知ることのできた時間でした。それがプロジェクトに対する最初の印象です。その年、火縄銃を撃つ父をモチーフにしたモニュメン



火縄銃を撃つ小倉さんをモチーフにしたモニュメントと



恒例のジン先生振る舞いの焼肉パーティー



枝里さんの父小倉達弘さん / 2016 年撮影



種子島の夕陽 (撮影 : 平瀬)

ト制作をすることになりました。それはジン先生の強い要望でした。制作のために多くの写真資料が必要になり、平川浩さんから何度も様々な姿の父の写真を探すようお願いされました。完成した作品を目にして「構えている時の手がすごいごつく作ってある。お父さんは昔ごつかった。年をとってそのイメージがなくなっていたけど、他の人から見たらごつかったのかな。」そんな風に感じました。改めて、昔の父を知る機会にもなりました。

気持ちを伝える通訳

2018、19 年 通訳

コウ・ヒョンジン

くろしおアートプロジェクトには 2018 年に通訳の依頼を受けたことがきっかけ参加しました。種子島の美しい自然に魅了されて 2017 年の秋から夫婦で住むことになり暮らしていたのですが、島での楽しみの一つであるカラオケをしに立ち寄ったアミーゴで平川久美子さんから声をかけてもらったことがご縁でした。

普段の仕事でも通訳をする場面はあったのですが、くろしおアートプロジェクトの現場では専門用語の難しさだけでなく深い感情を通訳するのに苦戦したのを覚えています。アーティストと住民が共同作業を行うことも多いため、相手の気持ちや伝えたいポイントをしっかりと伝えることに集中しました。通訳をしながらアーティストと一緒に色んな人々に出会いました。アーティストたちが韓国と日本の文化交流と種子島の発展に貢献したいという気持ちで参加しているのをみて、私もそれに少しでも力になりたいと思いました。そのうち、どん



コウさんの壁ギャラリーと作者の岩田とも子



2019 年くろしおの芸術祭オープニングで通訳をするコウさん



芸術祭会場での通訳

どん種子島と人々に愛着が湧いてきました。その経験を通じて人と人との付き合いの新しい形を学んだと思います。

町にとってくろしおアートプロジェクトは日本国内はもちろん、海外の方にも種子島の魅力を伝えるきっかけになったと思います。これからも種子島の更なる繁栄につながると確信しています。プロジェクトの継続は種子島が外と繋がる一つの手段になると思います。まずは西之表市、中種子町、南種子町まで繋がるような島全体の大きなプロジェクトへ。そして、広報と支援に力を入れ、もっと多くのアーティストと参加者を呼び込めば世界的なイベントとして発展することも可能だと思います。ただ、大切なのはプロジェクトが大きくなっても自分たちの損得を考えるのではなく、今と同じようにみんなの為に行動することが結局は自分たち、そして未来の子どもたちにとってもいいのだ、ということを忘れない事だと思います。

作業場のお隣から

鈴鹿 / 西町町内会会長

濱田 雅昭



居酒屋鈴鹿のアート看板

生まれてからずっと島で暮らしています。飲食店を営んでおりますがくろしおアートプロジェクトが作業場として使用している広場がお隣だったのでちょこちょこお手伝いするようになりました。最初の年から参加しています。アーティストを交えての夜の懇談会や昼間の作業の合間のおしゃべりが楽しかったです。

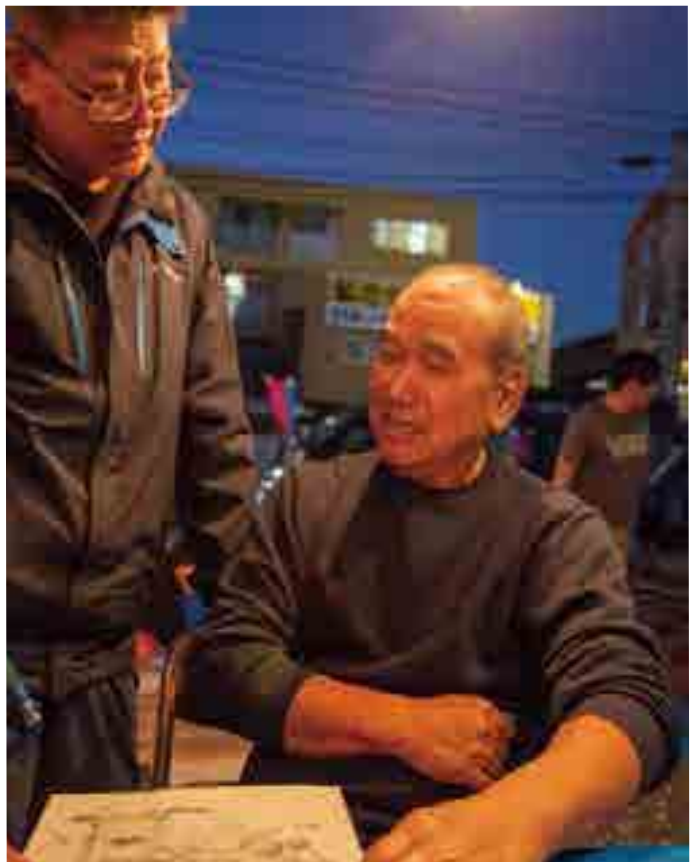
島の自慢は宇宙ロケット基地や平穏で自然豊かなところ、そして住民が一生懸命生きているところではないでしょうか。そんな中、おさかなアートが町中にあることで島内外で話題の元になっています。今後もプロジェクトを持続していくべきだと思いますし、時が経つにつれて修繕が必要なおさかな



濱田さん経営の居酒屋「鈴鹿」(左)と隣接するくろしおの芸術祭会場で使用している広場(右)/撮影:平瀬



開始当初からのおつきあい / 2011 年撮影



アート看板制作のヒアリングをするソングさん(左)

アートやアートベンチなどの作品の見回りも必要だと感じています。今後、商店街活性化のためにも市をあげての動きが必要だと思います。プロジェクト発展のために個人としては食の部分でも韓国と日本をつなげるような試みに興味があります。アートと食、プロジェクトの発展のためにも挑戦してみたいです。

思い浮かぶアートの森

西之表幼稚園園長

野田 久教



野田さんの壁ギャラリー



西之表幼稚園のアート看板

2009年に開催された時の芸術祭ではアーティストたちの様々なパフォーマンスが衝撃的だったのを覚えています。その翌年の流木を使った芸術祭で作られた作品は今でも幼稚園にあります。その後に始まったくろしおアートプロジェクトでは芸術祭の会期中、毎年園児たちがおさかなアートに参加してジン先生たちと交流をしています。

くろしおアートプロジェクトによって作られるものの一つが市民の交流の場です。またアーティストたちとの出会いや語りそのものが楽しいです。そして作品をつくることによって確実に関心と呼ぶことになったと思います。

関係者の皆様のご苦勞に敬意を表しつつプロジェクトの持続を望んでいます。作品もどんどん増えて、プロジェクトが今ようやく根付いてきて町の風物詩のようになっていていると思います。辞めてしまえばせっかくの作品も風化してしまうでしょう。

町全体にとっては島外からの定住者を増やすことは大事なことの一つです。新たな発想から少欲知足へ繋がるのではないのでしょうか。

今後、くろしおアートプロジェクトが発展していくことを想像してみるとアートの森のような大掛かりな作品を展示できる広場や国道沿いにずっと展示されていくような様子が思い浮かんできます。



くろしおの芸術祭会場にやってくる西之表幼稚園の園児の皆さん



木のおさかなに描く西之表幼稚園の園児の皆さん

互いに料理を振る舞う交流のかたち

(有)川原通信 / どんぐり倶楽部会長
仁禮 ひとみ



仁禮ひとみさんの壁ギャラリー

くろしおの芸術祭で毎年アーティストたちにも親しんでもらっている「どんぐり倶楽部」の結成は2013年。アーティストの皆さんと一体となり毎年楽しんでいます。毎回思うんです。会える喜びと作る楽しみ、そして達成感。去年は芸術祭を開催できずみなさんとお会いできませんでしたが、「みんな元気かな～。会いたいね」とメンバーでも話をしています。

どんぐり倶楽部は元々、仲の良い友達同士の集まりで「暮らしの中のちょっとひと息、自分の時間や親子の時間、友人との時間」をつくり、周りの人たちとのひとときの助けけができるような集まりとしてはじまりました。定期的に商店街のスペースをつかったワークショップの開催や地域のお祭りへの出店などをしていました。子どもの成長とともに活動は縮小してしまいましたが、くろしおアートプロジェクトではいつもメンバーと一緒に参加しています。プロジェクトの存在は初期から知っていましたが、参加しはじめたのは7年ほど前からです。我が子と一緒にやさしいペイントを楽しむことから始まり今に至ります。

アーティストとの時間は作品をつくる時間も楽しいですが料理を振る舞う、食事やお酒を共に楽しむ時も大切な交流の場になっています。アーティストのキム・ドヒョンさんから「うどんが食べたい」というリクエストに答えてうどんを振る舞うこともありましたが、みなさん何を作っても「美味しい美味しい」と喜んでくださるので作るのも楽しかったです。逆にジン先生が企画して調理や準備をしてくださる焼き肉を美



どんぐり倶楽部の皆さんとジン先生

美味しく頂くこともありました。作ったり作ってもらったりという交わし合いに感謝しています。

私自身、小さい頃から生まれ育った自然豊かな種子島で家庭を築くのが夢でした。両親が種子島で仕事をしていたので高校卒業までは種子島。島を離れての社会経験を積んだ後、種子島に帰ってまいりました。種子島にはきれいな海そしてなにより人が温かいこと、人と人との繋がりに海より深いものを感じます。くろしおアートプロジェクトへの参加者も年々増えてきたことで、商店街にもアート作品が増え明るくなりました。地域の中でも会話の種にもなっています。アーティスト達たちとの交流も商店街にとって国際交流の面でも影響を与えたと思います。この変化を、小さいことからこつこつと関わって下さった方々や未来ある子どもたちの為に大事にすべきだと思います。これからももっともっと幅広く継続すべきものです。種子島の老若男女小さい子からお年寄りまで参加できてどんな状況でも何かできることがあればいいなと思います。

大変な時期ではありますが、会える日までそれぞれの場所ががんばりましょう。例えば言葉がわからなくても片言の日本語とジェスチャーでどうにか会話になって楽しく笑って通じあえる、またそんな時間を過ごせますように、どんぐり倶楽部一同、皆様に会える日を楽しみにしています！

ベンチになった島の星空

西之表市役所職員

橋元 玲二



橋元さんの壁ギャラリー

大学時代の四年間福岡にいた以外は種子島に住んでおり、現在は西之表市役所の職員をしています。家族と天女ヶ倉の流星群を見に行けるのが種子島のいいところです。

島でのアートプロジェクトについては、くろしおの前身、種子島流木動物園から知っています。翌年の2011年に経済観光課で係になり、仕事としてアートプロジェクトに関わり始めました。仕事でなければ、現場に入るには勇気がいりました。おさかなアートは誰でも参加できるので私も何か描こうかなとは思っていたのですが、子どもがいたことで入りやすくもありました。

娘の祐奈は、西之表幼稚園に通っていたので通園途中に広場の近くを一緒に歩くこともあって気になっていました。幼稚園年長さんの時に、デザインを募集していた「アートベンチ」で娘の案が採用されてつくることになりました。島でよく星を見ていた記憶から、星空のデザインにしたようです。娘が言うには「ベンチ描くときの気持ちは、お絵かきの気持ち、一緒につくったアーティストは覚えていなくて、絵を描けたことが楽しかった。」「おさかなワークショップは榕城小学校だけなので、他の小学校への広がりができればいい。友達にお父さんの似顔絵があるねと言われるよ。」とのこと。自分の似顔絵が壁ギャラリーに飾られて、恥ずかしい思いもあるが、いい感じで嬉しいです。市役所の係だった4年間を中心に特にまちづくりに関わったという気持ちになり、今も一緒に取り組むことができたという想いがあります。また、く



アートベンチのベース色塗りを息子さんと一緒に



星空デザインのアートベンチに貝の模様を描く



完成した星空のアートベンチ

ろしおアートプロジェクトを通じて、松浦さん、平川さんと仕事以外で関われたから、仲良くなれたというのはあります。参加する人が段々と集まってきており、小規模でもいいので続けて欲しいです。

くろしおアートのおさかなのキーホルダーなど、プロジェクトから生まれた作品をグッズにして観光客に買ってもらえるようにするなどして資金源をつくったり、商店街を歩いてもらえるような仕組みをつくったりすることで、いままでの作品もつながってくると思います。

楽しかったよ、また来てね

(株) 横林自動車 / 西之表市商工会女性部部长
横林 律子



旦那さんの壁ギャラリー

大阪で看護師として働き、そこで出会った種子島出身の今の旦那さんと戻って、横林自動車を営んでいます。そんな、旦那さんと仕事終わりの一杯が日々の楽しみです。

6年ぐらい前から、買い物途中に通りすぎる商店街の空き地広場で、何か描いているのを見て、何しているのかなと、当時はくろしおアートプロジェクトとは知らずに横目で見ていました。ただ、知らない人が多かったから入りづらい雰囲気でした。そんな風に感じていたくろしおアートですが、3年前に商工会女性部長になったのを機に、平川浩さんから協力してもらえませんかと言われ参加することになりました。

横林自動車のアート看板をアーティストにつくってもらい設置したところ、「そっくりやなあ」と言う人と、「あんまり似てないと」と言う人もいて誰が描いたのとか、興味を持ってもらったのがいいと思います。看板の絵を描いてくれたキム・ソングさん、一緒に飲んだりとか、楽しかったですよ。何年のことだったかソングさんが来れない年もあったけど、体調が良くなってまたきてくれました。来年も体調が良かったら来てほしいです。

市から補助とか出してくれればいいけど、それだけでは大変だから、市民の人にも声をかけて、募金みたいなのをしてもいいと思います。長く続けてほしいけど、するにはお金がいるし、市の財政も大変だし、みんなで盛り上げるには、市民のみなさんお善意があってもいいかなと思います。



横林自動車のアート看板を制作中のソングさん



ワークショップにて横林さんデザインのTシャツ

絵をかいてもらうのも特定の人だけではなくて、他の人も募集して抽選にするのもいいのかなと思います。わたしも描いてもらったけど、お手伝いして、絵を描いてもらいませんかと言う趣旨、これが何十年も続けば意味合いが変わってくる。

コロナで10周年できなかったけど、15年、20年つづけて、節目でおおきなイベントをしてみたいです。

プロジェクトの目的が 広がることを願って

西之表市消防団女性分団団員

佐藤 秋子



佐藤さんの壁ギャラリー

現和物産館の壁に設置してある壁ギャラリーの中にジン先生が私の顔を描いてくださった作品があります。それを見た知り合いに「あれはあなたでしょう」と言われることもあります。

私には幼い頃から南の島への憧れがありました。東京の仕事で定年まで勤め、2ヶ月後に知人が縁となって種子島への移住を決めました。決断のきっかけは「40年間働いたので、何もしないでぼーっとしよう」という思いからでした。マラソン、トライアスロン、山登りを東京時代の頃から趣味でしており、その仲間も多いのですが種子島でもマラソン大会に毎回参加しています。島の地形は上り下りがあるのできついコースの訓練になります。

私がプロジェクトに参加したのは3年前、入隊している消防団の方に「時間があったら手伝って」と誘われたのがきっかけでした。それまでは芸術祭開催中の会場である広場を見て、何をやっているんだろうと疑問を抱いていました。参加するようになってからは周りの人から、なんの目的でやっているか尋ねられることも多々あり、プロジェクトに関して知らない人の方が多いと感じています。私自身も関係性がなければ、何をやっているか分からぬままで積極的に聞いてみようとは思わなかったと思います。作品の認知は広がっていても、やはりプロジェクトの目的を広げ、プロジェクト自体の認知を広げる必要があると思います。目的を周りの人に伝える、それで同意してくれる人が多ければ多いほどよいのではないかと思います。



一緒に木のおさかなを堤防に貼る佐藤さん



壁ギャラリーの枠になるト口箱の色塗りをする佐藤さん

観光客や地元の人との話の種

ホテルニュー種子島 / 鹿児島県立種子島高等学校PTA会長
松田 学



ホテルニュー種子島のアート看板

私は子どもの頃から大阪に住んでおり、24歳のときに種子島へ。ホテルニュー種子島ができて2年目のことでした。種子島は元々母の故郷でした。島外で過ごした時間が長いこともあってか、島の自然も新鮮に見えて底まで透き通った海の美しさに改めて感動することもあります。また町の人に関し言えば純粋さを感じますし頼れる先輩方も多くいろんな相談をみんな聞いてくれる、そんな人たちがいます。くろしおアートプロジェクトへは3年前に娘が半成人式を迎えた4年生だったときに学校のPTA会長として参加しました。その時にはじめておさかなに絵をかきました。

仕事柄、島に観光にきたお客さんたちと話をすることが多いのですが年々、町中にある作品について訪ねられることが多くなってきました。会話のきっかけにもなります。また高速船の利用客が港で必ず写真を撮っています。

ニュー種子島のアート看板では私をモデルにして描いてもらった作品がやはり一番気に入っています。初めて来るお客さんにも「表にある絵はあなたですよ、すごい似てる」とよく言われます。

お客さんだけでなく地元の人からも声をかけられることもあり話の種になるなど日常に変化が起きています。参加アーティストたちとはあまり交流を持てずにいるのですが、ホテルに宿泊してもらっていることもありフロントで彼らが朝出かけていくとき、帰ってくる時の笑顔をみて、異国の地では疲れているだろうに種子島のために来てくれているんだなと感心しています。



榕城小学校の生徒と一緒に防波堤におさかなの板を貼る



ホテルニュー種子島に設置されたアート看板

今後もプロジェクトが継続していくといいなと思っています。市の広報誌に載ることもあるのでPTAの会議でもくろしおアートプロジェクトのことが話題にのぼります。小さな学校の子たちも参加してみたいと声が上がっています。何かあれば喜んで協力してくれると思います。町の未来のためにも子どもたちが行き来できる町になりますように。

ささやかな変化の風

(有) 羽生電気商会
羽生 なつみ



なつみさんの壁ギャラリー

一体、何をするんだろう…そう思いながらも手伝っているうちに何をするのかがわかってきた、それが最初にプロジェクトに参加したときの印象です。

くろしおアートプロジェクト参加のきっかけはうちの店の2軒隣の空き店舗にアーティストがやってきたことでした。そのことを知らせに来てもらったこともあって、試しにその様子を見に行ってみることにしました。「店番をしながらでもできるようなことがあれば手伝いますよ」そんなことをアーティストに伝え妹や友人を連れて時々顔を出すようにしていました。その空き店舗には『自然の暗号代理店』とアーティストによって書かれており廃材を使った店作りが印象的でちょっと薄暗い空間の中にほどよい照明が合っているような不思議な雰囲気が好きでした。店といっても実際に商売をしているのではなく、島から集められた様々な自然物の模様を店に来た人たちに紹介したり、その模様がプリントされた写真を切ったり貼ったりして工作できる場が設けられていました。模様を元にあらたな柄をデザインすることもありました。その一連のことを店に来た人が体験できるようになっていたのも、私もいくつか柄をデザインしたりするなどしに通っていました。手伝っているような参加しているような不思議な関わりをしていました。

この空き店舗での作品との出会いが縁でくろしおアートの拠点となっていた広場にも行ってみることにしました。町中にあるおさかなの作品などは見かけたことがあっても、一体誰



羽生電気商会のアート看板



自身のお店のアート看板の下描き

が作っているのか、どんな経緯で展示しているのかをそれまで知らずにいたのですがここにきてようやく知ることになりました。その年は新たにベンチ作りが始まっていました。一人のアーティストに声をかけられ、島らしいベンチのデザインを相談されたので試しにスケッチして見せると共感してくれたようでした。その後も空き店舗での創作に関わっていたのでベンチ作りに参加はできなかったのですが、最後のお披露目の会場に足を運ぶと、なんとスケッチを元にしたベンチが完成していたのには驚きました。普段、なかなか完成しない絵やらくがきのようなものを個人的に描くことがあるのですが、思い描いたものがこうやって形になるってすごいことだなと感心しました。その時作られたハイビスカスのベンチは町の中に残されている作品の中にも気に入っています。そのベンチが置かれたところにある大きな壁のおさかなアートも大胆に壁を使っている感じが好きです。

その年以降も仕事の合間を縫って時々プロジェクトに参加しています。うちの店のアート看板のデザインも私が担当させてもらうことになりました。完成した看板は店の横に設置してもらったのですが、それをみた他店の方が「うちも作ってほしいんだけど…」と声をかけてもらったことがあり翌年その店舗のアート看板が作られることになりました。プロジェクトとお店の方々との思いをつなぐことができました。

種子島について、度々島にやってくる大風以外に何が特徴かと言われると正直なところわかりません。生まれた時から過ごしている商店街を見ていて「知っている顔、おなじみの人」が減ってしまったとふと思うこともあります。ただ、今まで商店街の中でも少し距離が離れているとお店の名前とそこで働く人の顔が一致しないこともよくありましたが、プロジェクト参加をきっかけに初めて喋る人がいたり、度々顔を合わせることによって、町の中に知っている顔が少しずつ増えました。ささやかなことかもしれませんがそれが私にとっての変化です。

作品たちがくれた子どもとの時間

種子島開発総合センター / あこう楽習会

柳田 亜紀子



2011 年当時の柳田さん

種子島は両親の故郷であったこともあり、父の転勤をきっかけに小学4年生ときに越してきました。一度高校進学タイミングで島を離れ23歳のときに島に戻ってきました。昔から歴史が好きで種子島の歴史にも興味をもち現在の仕事についています。

くろしおアートプロジェクトの初年度、当時まだ幼稚園に通っていた子どもたちと一緒に参加したのがきっかけでした。それ以来作品が増えるたびに町をみてまわることで子どもたちと過ごす時間が増えたように思います。また、観光で島を訪れた人をはじめ多くの人に作品のことや、くろしおアートについて伝えると、何気なく通り過ぎていたところも立ち止まって見てくれたりして私も心が暖まります。町に点在する作品の中でも一番素敵だなと思うのは港の防波堤にある小学生の作品です。我が子も携わっていると想うと見るたびに嬉しくなります。今後、高校生や青年団などの若い年齢層の人たちを巻き込んでいくとより面白くなっていくのではないのでしょうか。毎年芸術祭の開催が楽しみで気づけば10年の月日が経っていました。毎年一緒に参加している子どもたちは韓国からきてくれたアーティストとの出会いをきっかけに韓国に興味をもちハングルを覚えるようになりました。

国は違っても心を通じた交流ができると思っています。今後も小さなことでも交流を続けていきたいです。



アートベンチの下地塗りをする柳田さん



2019 年柳田さん家族と共に

ずっとアート仲間でいてください

西之表市商工会

濱添 香



濱添さんの壁ギャラリー

くろしおアートプロジェクトには商工会に入社した年から参加しています。事務的な用もあって広場に出向いていたのがきっかけでしたが、休日にも自ら参加するようになっていきました。

2年目となったアートベンチの制作はデザイン案を募集したり、いろんなチームにデザインを委ねたりして創作されるようになっていたのですが、そのなかでデザインのないベンチが一つ余ってしまったことがありました。現場にいた私に平川さんが「デザイン描く？」と声をかけてくれたこともあって自分のスケッチブックにデザイン案を描きジン先生に見せたところ作る許可を頂いて私が担当することになりました。デザイン案は羽のベンチだったので分厚い木材を羽の形に切り出す必要がありました。木材の切り出しはキム・ジョンソンさんにしてもらいました。ジン先生とジョンソンさんで板をどう使ってデザインに合う形を切り出すかを検討してください、板を4枚ではなく3枚で済む良いアイディアを提案いただいたのを今もはっきり覚えています。木材を切って形を作ってもらった後にペンキで絵を描き仕上げるところまで担当しました。元々制作期間が短い上に、事務の仕事をしながらだったので遅れながらもギリギリで作品が完成しました。自分の作品を作らせてもらったことにとっても感謝しています。自分の作品が町にあるって、嬉しいですね。

その後も参加を重ねていくなかでトロ箱に私の似顔絵をアーティストに描いてもらったこともあります。アーティストか



自身がデザインしたベンチを制作する濱添さん



西村メガネのアート看板制作中のヒョンジュンさん



濱添さんの壁ギャラリーを描くヒョンジュンさん

ら「描くね!」と言ってくれたので彼が持つ私のイメージで描いてもらいました。あの絵は宝物です。くろしおアートプロジェクトから生まれた作品は全て好きです。その中で縁のある作品で好きなのが西村メガネさんの作品です。私のトロ箱同様にヤン・ヒョンジュンさんが担当してくれました。店主の西村さんとは親戚なのでおじさんの店に行くたびにじっくりその作品をみています。おじさんもその看板を毎日外に飾ってくれています。また花屋のキタルさんの看板も好きです。私は10歳の頃から油絵を習っていて特に花の絵をよく描きます。絵のタッチや雰囲気が私の絵と似ていて、自然にこの作品好きだなと思いました。今後は、プロジェクトの中で町(建物、階段など)に直接絵を描けたらもっと町が華やかになるのではないかと思います。

くろしおで出会ったみんなといれる時間が、ただただ好きでした。私にとって貴重な時間でした。

町に点在する作品から 思い出される記憶

西之表市商工会 / 西之表市消防団女性分団副分団長
椎田 なほみ



椎田さんの壁ギャラリー

私がくろしおアートプロジェクトに参加したのは女性消防団でお食事のお手伝いをしたのがきっかけでした。アーティストのみなさん和食が好きでなんでも美味しく気持ちよく食べてくれました。そのようなご縁のはじまりから、アーティストの一人、ムンシクさんがトロ箱に消防団の制服を着た姿の私を描いてくれました。私の横顔を二重顎まで忠実に描いてくださったのですが・・・そこは削ってもいいのではないかと提案しました。「乙女心がわかっていない」と言うと笑って少しだけ削ってくれました。

アーティストたちの制作が終わりいよいよ島から去る前夜、最後のお別れ会では初めて種子島に来てくれた韓国の女性アーティストのミンジさんに、亜里沙さん、瑛子さんと一緒に着物を着てもらったことがあります。日本の和装文化にも触れてもらうことができうれしかったです。その年、2019年の作品に小倉達弘さんのモニュメントがあります。

数ある作品の中、そのモニュメントを初めて見たときは心が震えたのを覚えています。小倉さんの優しい眼差しそのまま作品に表現されていて思わず涙がこぼれました。周りの人たちも同じような様子だったと記憶しています。ジン先生たちの小倉さんを思う気持ちが伝わる素晴らしい作品だと思います。アーティストたちとのコミュニケーションはお互いに簡単な日本語や韓国語、英語や身振り手振りしながらですが、特に子どもや年配の方には優しく親切に接しているのが印象的です。町に点在するたくさんの作品からそんな彼らのこと



椎田さんの壁ギャラリーを制作するムンシクさん



2019年のクロージングにて

や共に過ごした記憶が思い出されます。私は生まれも育ちも種子島ですが、島の自慢はやはり豊かな自然、海的美しさと人柄の良さだと思います。アーティストたちのサポートをする中で町に一体感が生まれたと感じられました。より多くの人、企業を巻き込んでいくことができればこれからも発展していくのではないかと思います。また、活動や作品を発信していくことも必要だと思います。ぜひ、継続してほしいです。

歩くのが楽しくなった町

西之表市立種子島中学校

平川 幸歩



おかさを描く幸歩さん

両親の影響で小さい頃からくろしおアートプロジェクトに参加しています。違う国の人たちと一緒にプロジェクトを進行していて頑張っているなあ、すごいなあ、と思いながら両親を見ていました。お魚の形に切った木材に絵を描いたり壁に絵を描いたりベンチをつくったりするのに私も参加しました。

色の塗り方やどこをどんなふう塗るといいのかアーティストさんにアドバイスをもらいながら一緒に絵を描いたりすることが思い出として残っています。制作中の他にも一緒にご飯を食べたりしながらたくさんお話するのも楽しいです。

中学生になってからも芸術祭が始まると制作が行われている広場に時々行っています。くろしおに参加したことがある友達もいるので誘って一緒に行くこともあります。友達の多くは小学4年生の時に半成人式の記念制作として一緒におさかなアートで作品を作りました。この記念制作は年によっておさかなで描かれる絵が変わります。どんな絵にするのかは、種子島にまつわるものをテーマにアイデアを出し合ってみんなで決めたのだったと思います。種子島は自然が豊かなところですが夜中に近くで見るロケットも神秘的でおすすめです。みんなが選んだ絵も種子島から打ち上げられるロケットでした。みんなで力を合わせて一つのアート作品を作ることができたことで団結力の向上や達成感につながりとても楽しかったです。完成してから何年か経った今、改めて作品を見ると「よくこんなすごい作品をみんなで作ることができたな」と驚きを感じます。



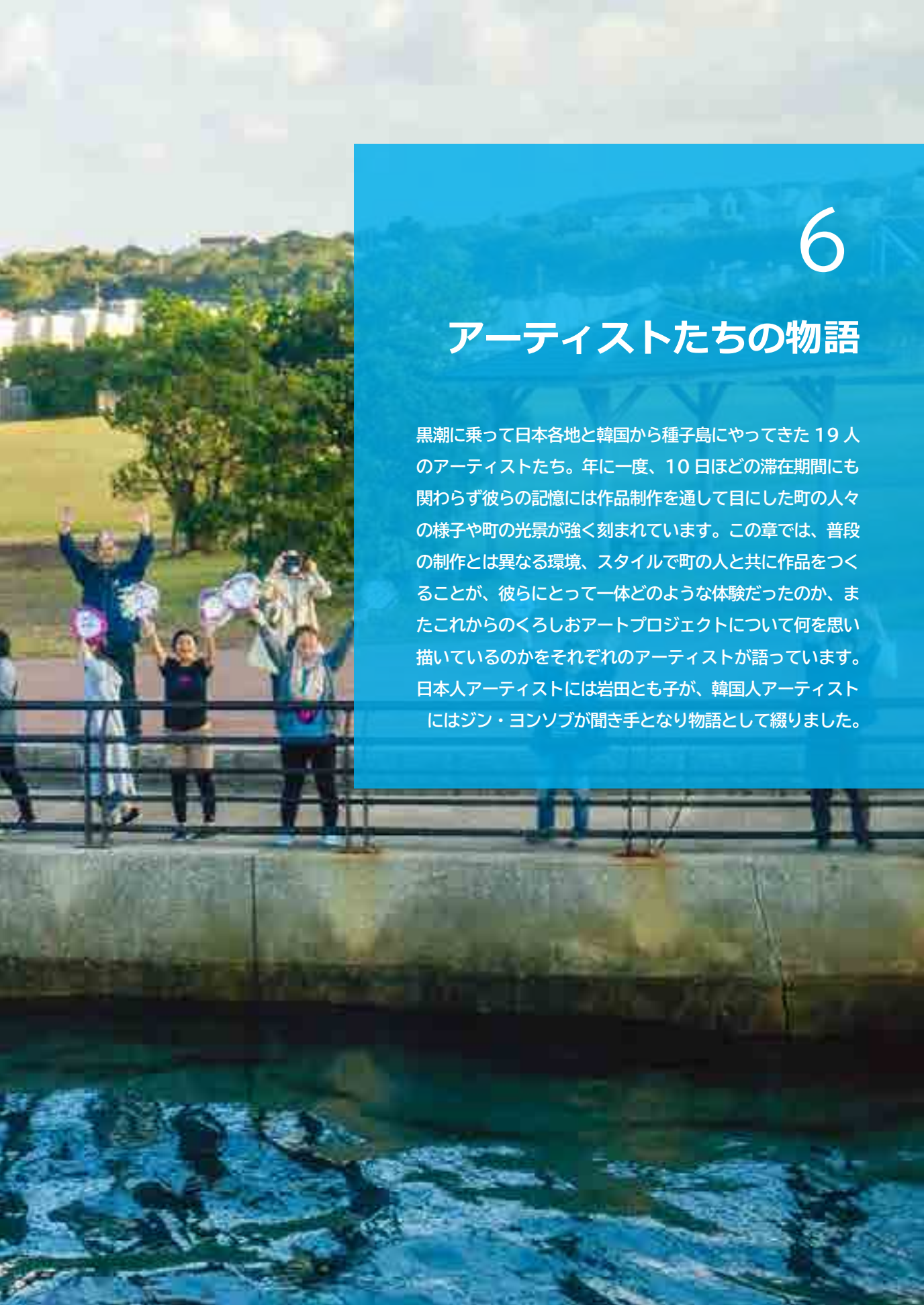
ソングさんのペイントを手伝う幸歩さん/2014年



くろしおアートプロジェクトが始まってから町を歩くのが楽しくなりました。友達の家遊びに行くときや買い物に行くときに「あ、ここにも作品があったんだ」と作品に出会うことがあります。町がカラフルになってにぎやかになった気がします。たくさんある作品の中でも港の近くにある地域の人たちを描いた壁ギャラリーが好きです。はじめて島にやってくる人が港から入ってきた時にこの作品を目にして「温かそうな人たちだな、この人たちがこの町にいるんだなあ」と感じてくれるかもしれません。種子島の自慢は地域の人たちの距離が近いことです。それが伝わるいいなと思います。

これからまた芸術祭が始まったらもっとたくさんの人に参加してもらえるように呼びかけができたらいいいのかなと思います。私も学校の美術部の子たちを誘ってみるのもいいかなと考えていますが、みんなが興味をもてるような広報のアイデアがあればいいなと思います。これからの作品はおさかなアート、ベンチ、トロ箱作品に加えて他にも色々できそうなことがあると思います。多くなってしまった空き家を使った作品もいいんじゃないかと思ったりしています。何かできることをたくさん見つけて色んな作品に出会いたいです。





6

アーティストたちの物語

黒潮に乗って日本各地と韓国から種子島にやってきた19人のアーティストたち。年に一度、10日ほどの滞在期間にも関わらず彼らの記憶には作品制作を通して目にした町の人々の様子や町の光景が強く刻まれています。この章では、普段の制作とは異なる環境、スタイルで町の人と共に作品をつくること、彼らにとって一体どのような体験だったのか、またこれからのくろしおアートプロジェクトについて何を思い描いているのかをそれぞれのアーティストが語っています。日本人アーティストには岩田とも子が、韓国人アーティストにはジン・ヨンソブが聞き手となり物語として綴りました。



杉原 木三

Sugihara Mokuzo

2011-16 年 参加

東京藝術大学大学院美術研究科鑄金専攻修了

宮崎県立美術館実技講座「鑄造」講師（宮崎県立美術館）、2014

「わがまち」いきいきアートプロジェクト『たこらさるく』（西米良村竹原地区）、2015

杉原木三・三上想～三三鑄金工房いもの展・春～（宮崎県日向市・CAFE さんく）、2017

杉原木三「出吹き」プロジェクト鐘と山々～霧島連山に響く「高原・誕生の鐘」をつくる～（宮崎県高原町・皇子原公園）、2018

宮崎市美術展運営委員（立体・工芸部門）委嘱、2019

みやざき総合美術展企画委員（工芸部門）委嘱、2020

「子どもたちに残せるものを」という想い

種子島は第二の故郷のような感じです。本当に濃い思い出がたくさんなので、よく夢に種子島のことが出てきます。何かあると、島で出会ったアーティストたちや地元の方々のことを思い出します。

種子島との縁は2009年から続いています。2009年の「時の芸術祭」、2010年2月「流木編」、2010年7月「ボックスアート編」、2010年12月「withkids」、2011年10月「種子島水族館」と続き、くろしおアートとしては2012

年からの5回参加しました。最も思い出のある作品は、高速船乗り場前に設置して頂いている安納芋の焼き芋アートベンチ。地元の小学生のデザインを選び、制作しました。そして2014年の開催時に作った、金属流し絵の大きなお魚。「一条」さんに飾られることになりましたが、今はどうなっているのでしょうか？

くろしおアートを通じてのたくさんの出会いがあり全ては語り切れませんが、特に浩さんが言っていた、「子どもたちに残せるものを」という話



安納芋の焼き芋がモチーフのアートベンチを制作する杉原さん



安納芋の焼き芋がモチーフのアートベンチ



2011 年の第 1 回くろしおの芸術祭で描いたおさかな

が印象深いです。その言葉があったから続けてこれたと思います。他にもたくさんの思い出があり、話し出したらきりがありませんが、毎回楽しかったです。作家たちや地元の方々との魚釣りや食事やカラオケなどなどの思い出もいっぱいです。

地元住民の方とふれあいながら作り上げていくことが大変良いです。2009 年の時の芸術祭から今まで続けてきたのが素晴らしいことだと思います。地元にとってはこのアートイベントは財産になっていると思います。これからも何らかの形でイベントが続いていくことを願います。



杉原さんデザインのアートベンチ / 2015 年



金属流し絵の大きなお魚 / 2014 年



新里 碧

Nissato Midori

2015 年 参加

東京藝術大学美術学部先端芸術表現科卒業

信楽まちなか芸術祭 (滋賀)、2010

あいちの離島 80 日間チャレンジ (愛知)、2011

墨東まち見世 100 日プロジェクト (東京)、2012

生活と表現 (東京)、2016

中之条ビエンナーレ (群馬)、2017

西の丸デードリーム (岡山)、2017

アートと日常生活の距離感

「島への集客を目的としているわけではなくて、地元に住んでいる方々とアートとの関わりを大切にしている」という話がとても心に刺さりました。すごく明確で、すごく本質的な事だと思います、いたく共感したことを覚えています。

くろしおアートプロジェクトは、いままで関わったどのアートプロジェクトよりもローカルで、地元の方々の生活と近い場所にあるアートプロジェクトという印象でした。参加する3年前に、愛知県の佐久島という島に4か月間住み込みで観光大使のような仕事をしていたのですが、その時以来の「島」との関わりでした。種子島は、思っていたよりも5倍くらい大きく、初めて1人で島を訪れた時にはうっかり南種子

に宿を取ってしまい、移動に時間がかかって焦ってしまったというのが最初の記憶です。

私はその初めての種子島で2015年に空き店舗のプロジェクトの一環で『宇宙船修理センター種子島支店』という作品を展開しました。海岸に漂着した、無数のカラフルで不思議な私たちのプラスチック片を宇宙船の破片に見立てて、修理という名の下に制作した立体作品の展示と破片から宇宙船を想像してもらうワークショップをおこないました。展示期間中は、下校中の小中学生やお散歩中のおじいさんおばあさんなどたくさん地域の方に展示に寄っていただきました。「宇宙船修理センター」という、普段の生活に突然現れた異質なものの、お話し



海岸でプラスチック片を集める新里さん



西之表幼稚園で行ったワークショップ

すると思っていたよりもすんなり受け入れてくださって懐の広さを感じました。ご自分でカスタムした自転車を見せてくださったおじいさんと、「お前やれよ〜」「お前は何て書いたんだよ？」と、恥ずかしがりながら参加してくれた男子中学生2人組が特に印象的で、「宇宙って知ってる？」と聞いたら「うん、知ってる！鹿児島だよね！」って答えてくれた小学生の女の子も素敵だなと思いました。展示が始まる前日の夜に準備をしていたら、猫が入ってきて、一通り作品を眺めて出て行ったなんていうこともありました。どこの馬の骨ともわからない私にも、皆さん優しくしていただき、とてもありがたかったです。地元の方やアーティストが集まった飲み会で、ヤカンに入った焼酎の水割りがドンと置かれていたのが印象的です。くろしおアートプロジェクトに参加して以来、焼酎が好きになり、ベンチに甘露の絵を描いたこともあり、甘露ファンになってしまったのでお店で見かけた時は必ず買っています。

新しく始めることも大変だと思いますが、10年という長い期間、続けるということは途方も無く大変なことだと思います。10年続けてきたということが、このプロジェクトのアートプロジェクトとしての成功の証明だと感じます。おそらく、アーティストを支える為に地元の方々はたくさんの時間を割いて、たくさんのことをご尽力してくださったのだと思います。そんな中で、それまでに無かった方々とのつながり、協力、協業が生まれたり、新しい視点や無理難題などたくさんの「新しいこと」を乗り越えてくださったんだろうと想像します。日常生活にふわっとアートが入っていくような感覚です。アートという言葉よりも、もっとごく自然な姿で人と作品が接することが出来る貴重な場所だと思います。地域に住んでいる人の為のアートプロジェクトって、本当に素敵だと思います。



プラスチック片でつくられた宇宙船の部品



酒井酒店店主と



アートベンチの描かれた甘露焼酎のラベルに文字入れする高崎酒造の社長



新里さん制作の甘露モチーフのアートベンチ



岩田 とも子

Iwata Tomoko

2015-19 年 参加

東京藝術大学大学院先端芸術表現専攻修了

キューパのびじゅつかん (東京都美術館)、2015

瀬戸内国際芸術祭 (香川県栗島)、2016

TURNinBIENALSUR アルゼンチン・ブエノスアイレスに5週間の交流と制作、2017

ブナの森の道具屋さん - お客は森の生きものたち - (福島)、2018

TURN フェス 5(東京)、2019

TURNONTHEEARTH 展 ~わたしはちきゅうのこだま~ (東京藝術大学大学美術館)、2020

島生まれ島育ちの作品たち

「くろしお」という自然現象に人々や文化の交流を重ねているところも非常に魅力的なこのプロジェクト。以前より縁のあった種子島に海外から来ているアーティストたちがアートプロジェクトを展開しているのを知り、ジン先生をはじめとする韓国の作家や島の人々に会いたいという想いで2015年からの5回参加しています。滞在時間は10日前後と多くないにも関わらず、数ヶ月いるかのような色濃く鮮やかな日々が種子島にあります。

それは、島での時間が色鮮やかな魚や植物たち、濃厚な安納芋、個性豊かな島の人々とあいまって記憶に刻まれているからかもしれません。5回の参加を通して空き店舗のプロジェクト、アート看板、ベンチ、トロ箱…様々な形態の作品に携わってきました。まずは2015年に商店街の空き店舗を利用した『自然の暗号代理店』というプロジェクトです。これはメインプロジェクトであるおさかな作り、アートベンチ作りやアート看板作りと平行して行われたも



自然の暗号代理店



再会できないあの子とのお別れ / 2015 年

のでした。商店街が舞台ということで、私自身も店を出すような感覚でプロジェクトの名前にも「店」とつけました。種子島には自然が作り出す様々な模様がたくさんあります。例えば身近なところに生える熱帯植物の大きな葉の模様、浜辺に行けば砂鉄が作り出す砂浜の模様、他にも鳥や魚や貝殻の模様など様々。島の方々にも協力してもらい探した模様は写真に撮って印刷し、島の人々に素材として委ねました。印刷してみると切ったり貼ったりして好きに組み合わせることができるようになります。島生まれの素材を島の人の手で形にする、そのような状況を目指していたので、店内にアトリエを設けました。創作のテーマは「身につけたいもの」としました。いろいろな方が入れ替わり立ち替わり店に来てくれましたが、その中に度々通ってくれた小学生の女の子がいました。彼女は、もはやプロジェクトの相方なのではないかというくらい頼もしく一緒に準備をしたり作品を増やしたり、アイデアを考えたり、撮影係までもこなしてくれました。プロジェクト最終日に彼女から「帰ったらお手紙ちょうだいね!」と言われ約束したのですが手紙が苦手な私は出せぬまま。毎年「あの子はいないかな」とキョロキョロと探しているのですが未だに彼女と再会できていません。もし、会うことがあればいつ

かあの時のことを改めて話してみたいです。

アート看板では東天紅さんの作品が印象的です。はじめは写真や資料を見ながら何度も描き直しましたが、なにか違う…、ということでお店に向いて実際にお店のご主人にお会いしてみると自然とお顔が描けました。それ以来、その人らしさがどこに宿っているのかを観察するのが楽しくなりました。翌年のお正月に東天紅さんから看板の写真をあしらった年賀状が届き、作品が町の一部になったのだなぁと嬉しく思いました。

アートベンチは大型の作品なので一人で作るよりは、どうしても多くの方に手を入れてもらえるだろうかと考えるのが面白かったです。小学生の女の子がデザインした「川の景色」というベンチを担当したことがあります。“カラフルな石”というのがポイントだったのでいろんな方に「種子島にあったらいいなと思う石を描いて」というお題を出して一つ一つの石に色や模様を入れてもらったところ、とても素敵なベンチに仕上がりました。



アートベンチ「川の景色」

トロ箱はベンチや看板等の大型作品制作の合間
に少し思考を緩ませて作ることが多かったで
す。私は普段、廃材を使う作品やコラージュ作
品を作ることがあるのですが、作業場からでた
木っ端に興味がわきました。きれいに磨いてト
ロ箱の中にパズルのように組み立て作った作品
がとても気に入っています。モデルは仲良く
なった電気屋さん姉妹。彼女たちとは共に過
す時間が多かったので迷わず手を動かして作る
ことができました。どの作品も島生まれ。これ
からも島の中で育ってくれるといいなと楽しみ
にしています。

そして、このプロジェクトでなにより興味深い
のは、参加者がそれぞれの参加方法を自身で開
拓できる可能性がある、というところです。参
加する＝作品のために木を切ったり、色を塗っ
たりすることのみ、と思っている人もいるかも
しれませんが実際にはもっと多様でアーティスト
に島の話をしてくれること、現場の誰かを気
遣って見に来てくれること、差し入れを持って
来てくれること、プロジェクトについて他の人
に語ってくれることも一つの参加の形のように
も思えます。長くプロジェクトに携わっている
人々は会期前から会場作り、材木を切って下地

塗りなどもお手の物。そういった関わり方の変
化も面白いです。そんな町の変化をみていてこ
の島の子どもたちのことをとても羨ましく思う
ようになりました。10年も続くプロジェクト
なので小さな子どもたちには当たり前前の光景と
なっているかもしれませんが町の多くの人が手
掛けたものが町の各所に存在している、自分も
作ってみたいと思ったら毎年そんな場所が広場に
現れる、それがどれだけ不思議で楽しいことな
んだろうかと感じるようになりました。モノや
コトにストーリーがあるということに自然と触
れ、吸収しながら大人になれるということが羨
ましいです。

人々を迎える港、砂鉄が作り出す独特な模様を
描く砂浜、町の人々の人柄を通じて、古くから
の歴史的背景を辿る、もしくは感じ取ることが
できる種子島はとっても魅力的です。同様にもし、
ずっと先の未来の町の人々にくろしおアート
プロジェクトのはじまりを語ることができたら
それがどんなに面白いことか。くろしおアート
プロジェクトは未来の彼らが今と同じように
町の風や光、音を感じながら時空を超えて今の
町の人々と繋がれる可能性を秘めていると思い
ます。



種子島の砂鉄が多い海岸



小野 サボコ

Ono Saboko

2014-15 年 参加

MU 東心斎橋画廊 (大阪)、2018

PRAYERANDALTER/ROONEY247FINEARTS(東京)、2019

SILENTLIGHT/GEKILIN.(大阪)、2020

FOCUSARTFAIR/PORTONEWNIQUEL/ H ONGLEE(ポルトガル)、2020

ギャラリー勇斎(奈良)、2021-6 月

コロンビア・イタリア・フランス等で開催予定、2021-

アルミニウムと島の時間

私は 2007 年からアルミニウムの素材で仕事をしています。様々な民族や文明、遺跡、そしてアニミズム、自然界と宇宙、私たちの持つ遠い正命の記憶を繋げる様な仕事をして行きたいと思い活動を続ける作家です。初めてプロジェクトに参加したのは夫、和田幸三が以前から参加していたのがご縁でした。2014 年と 2015 年の 2 回参加させて頂きました。

2015 年に商店街で行われた空き店舗プロジェクトの一環で参加した際に、港からも近い通りの元南国食堂跡地を使わせて頂きました。場所の感覚が掴めずはじめはとても困ってしまいましたが、急な変更でガジュマルの樹の根をモチーフに展示を行うことにしました。その後、島の方から種子島にガジュマルが生育していることを教えて頂きました。そうとは知らず



空き店舗での参加型プロジェクトの準備をする、サボコさんと和田さん



2014年の商店街空き店舗での展示

モチーフとしていたためびっくりしました！そんな出来事もありましたが、島の方々との出会いで特に記憶に残っていることは子どもたちとワークショップです。2014年に展示を行った銀行跡地でのこと、ふらりとやって来た少年と一緒に作品の素材であるアルミニウムを長時間叩いていて止まらなくなり途中で心配になって止めたのを憶えています。作品と同様の素材で作成したパッチを会場に置いていたら地域の女性に購入して頂きそのお友達の間で流行ってしまったといったこともありました。また、はじめて参加した年のことになりますが、私が作った絵本を幼稚園で読ませて頂いたことがありました。交流を重ねていた島の女性たちが絵本を広めてくださったことがきっかけでした。今でもこのことに感謝しています。

種子島といえば、火縄銃やはさみ、包丁などを作る特別な技術を持つ歴史ある地域であること、静かな自然が残っている優しい島、日本の宇宙ロケットが飛び立つ特別な場所、キビナゴと安納芋といった美味しい食材とご馳走！そして、くろしおアートプロジェクトでたくさんお世話になった方々。参加させて頂き私はたくさんの出会いと友人を持てた事に深く感謝しています。くろしおアートプロジェクト最大の特徴は種子島に住む地域の方々と作家がとても熱く触れ合えること！皆さんが笑顔で協力してくださる島をあげてのアートプロジェクトであること。これからの町の未来のため、先のことを見据えながら、島外との交流を軸に種子島のより良いアピールを深めて頂ければ幸いです。くろしおアートプロジェクトと西之表市の皆さんの益々のご発展をお祈りします。



南国食堂跡地にて展示 /2015 年



サボコさん制作のアートベンチ



和田 幸三

Wada Kouzo

2013-15 年 参加

～風に吹かれて～ 野外展 (神戸アートスペースかおる)、2020
生野ルートダルジャン芸術祭 (生野鉾山)、2020
宝塚現代美術てん・てん (宝塚ソリオテラス)、2020
写真展 (石垣石垣市民ホール展示場)、2019
～飛来もの・その時によって～ (姫路ギャラリーランズエンド)、2019
アート無人販売 (神戸アートスペースかおる)、2019
宝塚現代美術てん・てん (宝塚ソリオテラス)、2019

経験したことのない大きな歓迎

初めて参加したのは2013年のことです。種子島は行ったことのない離島で大変魅力を感じました。実際に島へ訪れた際は大変な歓迎で今までにない経験をしました。

住民の方が大変親切で私達を受け入れてくれました。その年はジン先生のおさかなプロジェクトに加えて7名の作家がそれぞれ島内で創作活動を行いました私は「ソフトな気持ちで見てクリーム」という作品を展開し砂浜でかき氷を振る舞うパフォーマンスを行いました。子どもたちが行列をつくるほど沢山参加してくれたことが嬉しかったです。

2014年と2015年は小野サボコ氏の制作助手として参加し、再び来島しました。2015年に

はこの年からアートベンチに携わり「雲」という作品を島に残しました。

種子島で過ごした日々からしばらく時間がたちましたが楽しく制作できたこと、制作以外にも、島の方々との釣りやカラオケ、お酒、火縄銃を間近で見せて頂いたり、差し入れて頂いた安納芋など、かなり楽しませて頂いたことが記憶に残っています。

10年続くこのプロジェクトを通して町にはどのような変化があったのか、その変化は住民の人々が良く理解しているのではないのでしょうか。くろしおアートプロジェクトにかぎらず小さなイベントでも長くつづけられることをやっていくとよいのではないかと思います。



パフォーマンス「ソフトな気持ちで見てクリーム」



海岸でのパフォーマンス



パフォーマンスでのかき氷



和田幸三さんデザインのベンチに色を塗る



2013 年芸術祭でのクロージングパフォーマンス



村井 ひとみ

Murai Hitomi

2017 年 参加

東京造形大学造形学部美術学科卒業

1980 年より個展とグループ展で絵画・インスタレーション・立体作品を発表

韓国・アメリカ・オーストラリア・コスタリカ・台湾・中国で交流展に参加

九州制作会議展（北九州市立美術館）、1984～2020

村井ひとみ WORKS2019（方舟 UPSIDEDOWN 何有荘ギャラリー）、2019

島時間のわたし

2017年11月10日トッピーに乗って、生まれて初めて種子島西之表市に上陸！ジン先生が種子島でアートプロジェクトを手がけていると聞き、いつか必ず参加したいと思っていたところ、その願いが叶ったのです。「くろしおアートプロジェクト」は私にとって全てが新鮮で刺激的なプロジェクトでした。町を歩き、そこで生活する人と出会い、お話を伺い、広場で絵を描く…島特産の美味しいものを食べて、作家全員で協力しながら、また制作する…夢のような穏やかで豊かな毎日でした。わずか11日間の滞在でしたが、買い物や散策途中の何気ない会話、次々と届く差し入れ、心のこもった宴会…

その中で種子島のことがどんどん身近になり大好きになっていきました。特にアート看板の制作で関わらせていただいた方々とは、人生に触れるお話ができたことが深く印象に残っています。楽しい時間はあっという間に過ぎ、はしゃぎすぎて制作が最も「島時間」だった私は作品の締め切りに間に合わず、最終日の夜まで時間を延長して制作し、忙しい平川さんに見守っていただいて完成させたことは今でも忘れることができません。西之表の皆さま、ジン先生をはじめ韓国と日本の作家の皆さま、素晴らしい時間と経験をありがとうございました！！またゆっくりと種子島に行きたいと思っています。



西之表港に到着した高速船トッピー



壁ギャラリー制作中の村井さん



村井さん制作の壁ギャラリー



フジカメラのアート看板のスケッチをする村井さん



フジカメラのアート看板



ダスキンの店主和田さんのお母さんのヒアリング



ダスキンのアート看板のスケッチをする村井さん



ダスキンのアート看板



篠原 洋之

Shinohara Hiroyuki

2013-14 年 参加

ピョンチャン (平昌) 冬季オリンピック公式イベントファイヤーアートフェスタ 2018

献花歌 (京浦海辺、江陵)、2018

『三国美鑑』韓日中現代美術祭 (サムタンアートマイン現代美術館、旌善)、2018

SEAARTFESTIVAL2017(釜山 / 韓国)

UPONATUREARTFESTIVAL2017(昌寧 / 韓国)

ARTOFBUSANCITIZENSPARK2014(釜山 / 韓国)

KUROSHIOARTPROJECT2013(種子島)



種子島という灯台

私にとってプロジェクトの中で起きた一番興味深いこと、それは僅かな滞在期間だったにも関わらず密な関係を築いた結果、自分が島に住み始めた、ということでしょう。私は素材として主に竹を使い、これまで伝統的に蓄積された技術を用いて職人の手をもって創作者として表現していきたいと考えていました。

ちょうど、くろしおアートプロジェクトは工芸職人を独立して次のステップであるアート表現をするための良い時と場でもありました。はじめて竹を使った大きなアート作品に取り組んだことで、私自身が不慣れなこともあり、どの程度の作業量なのかを読めない上に、芸術祭の期間

も短い。島の人も初めて関わる制作に不慣れさを感じていたと思います。その結果、超ハードワークとなってしまったことから否応なしに住民との関係が深まりました。

ひとみちゃんは深夜の作業に夜食を持ってきてくれるのが日課になりました。ひとみちゃんこと仁禮ひとみさんがメンバーとなっているどんぐり倶楽部ができたのはちょうどその頃でしょう。どんぐり倶楽部の皆さんは私と世代も近くパワフルで、まるで町工場の従業員のように働いてくれました。また、制作に取り組む私の姿をみて「そこまでする事はないよ」と労いの声をかけてくれる人もいました。のちに島の兄





真竹を加工する篠原さん

貴となる英世さんです。種子島に来て、まず作品を作る真竹を探しはじめました。私と英世さんそして英世さんの同級生の錨さんの3人で調査隊を結成し島内に良い竹がないか搜索しました。竹の世界では日本の真竹の北限は岩手県南部というのは有名ですが、南限についてはあまり言及されていません。幸運にも我々は甲女川流域で良い真竹を発見することができました。そしてここでわかってきたことは、種子島は鹿児島など九州の竹製品の色彩が強く、似たようなものを種子島で見ることができるということです。一方、隣の島の屋久島、口永良部島とは竹自体も竹製品も様式に相違がみられます。さらに種子島と屋久島、口永良部島より南の奄美諸島は沖縄の様式の強い竹製品となるので、実質的な真竹の南限は種子島といえるでしょう。

こうして3人で探し出した竹を使い、今度は更に手伝ってくれる住民も加わり竹を編んでいく

作業に入りました。元来、東アジアでは竹を新年を迎える為に用いるなど、竹は時間を内包しています。そしてこの作品はその時間軸に種子島でのそれぞれの人、思い、その瞬間などを込めて編むことで、作家と住民、また住民同士のコミュニケーションの物語となります。編まれたものは、フィルター状であり、物語でもあります。人は経験した事をもとに外の世界を見ます。その経験とは物語です。物語を通して世界を見るという事、それはこの作品では竹のフィルターを通して世界をみていることになります。作品は巻物のように収めることもできますがひろげると物語がはじまります。

芸術祭のメイン会場では螺旋状に自立して種子島のタペストリーとなりました。防波堤では円形に自立させ、さらにその中に空けられた円はにじり口となり茶会となりました。この物語は私の中で灯台を想起させました。竹は竹取物語の影響が強いのか月のイメージを持っています。

月明かりの下、お寺で開催した夜の茶会、浦田の砂浜での瞑想は、宇宙にいちばん近い種子島らしく幻想的で月面にいるようでした。更に、作品の中からライトを灯したことで、竹の中では竹に反射した光が身体を包み、身体に光が染み込むような感覚がありました。かぐや姫が月の光に包まれて月にかえってしまうようでした。このコンセプトとして、物語を通して光がその中にいる人同士を照らす事は物語を共有する事になります。物語とはそれを共有する人同士を同じ属性たらしめること、まさにそれです。この新たな竹の物語を共有した人たちは新たなグループとなります。これは芸術祭が意図する新



竹籐の茶室 / 2013 年制作

たなコミュニティの創出をシンボライズしたものといえるでしょう。

これらの考察が、その後の作品制作の大きな指針となっていきました。くろしおアートプロジェクトの後、ここで出会った韓国の作家が2017年に釜山で開催された SeaArtfestival に招待してくれたのですが、ここでも種子島からはじまった“物語のしくみ”の考察は続きました。種子島で考えはじめた“光の方向性”について、さらに“言語”においてもそれぞれ方向性があるという事に着想をへと繋がりました。

私が作家として考える1つのキーワードがフラクタルです。日本を船に例え日本丸と総称する事がありますが、それはどんな船かと問われた時、種子島丸はそれを端的に凝縮しているといえます。船といえば、種子島では出会いの時も

別れの時も船であります。そう簡単に出会って、再会できるものではありません。私は2年近く種子島に暮らしましたが、最後に島を離れる際、島の兄貴とその息子が防波堤の先端から見えなくなるまで手を振ってくれたシーンは恐らく今後の私の人生においてもベストシーンです。種子島では人の人生と人生の出逢いの刹那を否応なく感じさせられました。みんな運命共同体という感覚を感じました。これが長くはない、くろしおアートプロジェクトの期間を過ごして、住民とも作家とも強い絆が生まれた理由だと思います。島国ニッポンを純粹凝縮したようなイメージが印象深いです。島で過ごしたひと時を思い返すと、それは人生を濃縮したような濃密で特別なものです。その後も種子島での経験は私の方向性を示す灯台となっています。



キム・ドヒョン

金 度衡 / Kim Do-hyoung

2013-15, 18-19 年 参加

東亜大学芸術学部彫塑科及び同教育大学院美術教育学科卒業

ちよっと止まろう、風と踊ろう (後浦ギャラリー、楸子島)、2020

火の隠しアートプロジェクト - 火の記憶 (コモンオルム、済州島)、2020

四道芸術祭 (海南、中国)、2019

くろしお芸術祭 (種子島、日本)、2019

CHEMICALREACTION (PACE31、神戸、日本)、2019

キム・ドヒョン彫刻個展 (オム・テイクギャラリー、釜山)

種子島の中に火縄銃を入れる

西之表市ターミナルに到着して西町に歩いていくと、港を背景に立つ種子島型のモニュメントがあります。2013年に制作した作品で、種子島の地図に火縄銃の形がくり抜かれており、その中から港の風景が見える作品です。種子島の歴史と文化を背景に含ませて作品を作りました。

初めて種子島に着いたとき、鉄砲館でこの歴史と文化からインスピレーションを得て、その場で作品のスケッチをしました。あの日の記憶は今も生々しく残っています。大航海時代に黒潮海流に沿って伝わった文化を受け入れ、栄えた種子島についてはよく知らなかったのです。他の地域のアートプロジェクトとは異なり、住民が率先して参加し、その作品が住民が住む町に設置されることが感動でした。

火縄銃のモニュメントを作る時、町から離れている松田制作所で作業をしました。そこは重機を整備する工場で作業空間的にも良い上、必要な道具がよく揃っていて作業が容易にでき、工場のオーナーの親切さに今も感謝しています。作品の制作に使われた材料は住民たちが集めた錆びついた鉄板で、それを切り分けてさらに形に合わせて切断し溶接して形を作りました。グラインダーで整えるのが大変でしたが、一緒に

参加したアーティストと住民の協力によって完成することができました。昼夜9日間の作業で辛うじて作業は終わりましたが、設置するところまで完了できずに韓国に戻るになってしまい申し訳なく残念でした。その数日後、松浦さんら住民たちが作品を現場に設置し、その前で記念写真を撮って送ってくれたことに感謝の気持ちを抱きました。

種子島に行くたびにわくわくします。到着するとき綺麗な空気と歓迎してくれる住民、港に寄り添って待っている自分の作品があるからです。作品の材料は再生した鉄材を使って塗色しているため、錆はよくつきますが、時おり手入れをして補修してくれる住民たちに感謝のみですし、もしきれません。

2018年には御馳走処平八のアート看板を作りました。田村さんが店主の平大輔さんに対して事前にインタビューした内容の文章を読んで、直接会って人物スケッチをしながらもっと多くの話を交わしました。平さんは魚が好きで、象徴的な魚を看板に必ず入れてほしいと頼まれました。そこで彼が魚に乗っている姿を作品として制作しました。平さんはアート看板が描かれていく様子を見て、作業中のすべてのアーティ



ドヒョンさんデザインのロケットのアートベンチ制作

ストたちを自分の店に招待し、メニューにもない特別な料理を直々に作ってくれました。それもなんと3回も。その後、作品の中には、店で迎えてくれた夫人と生まれて間もない赤ちゃんの姿を追加しました。

私が制作した作品の中でロケットのアートベンチがあります。作業中のある日、種子島宇宙センターでロケットを打ち上げるという話を聞き、みんな作業を中断して、急いで宇宙センター近くの山裾に辿り着きました。到着した時、すでに多くの人々が望遠鏡を設置していて、まるでスポーツ中継をしているようでした。緊張の中でしばらく待っても何の気配もなく、住民たちが用意してくれたおにぎりを口に入れた瞬間、「ドン」という音で空を眺めると、すでに白い軌跡が青い空を覆っていました。嘆声とともに消えていく姿を惜しみながら帰り、その瞬間の残像をアートベンチとして残しました。私の記憶の中での種子島の一番強い印象は、ロケット打

ち上げでした。くろしおアートプロジェクトには5回も参加したため、住民とはいつも気兼ねなく過ごし、固い関係を結んでいます。商店街のアート看板は通りすぎる人々を迎え、アートベンチは誰かが使った跡でペイントが少し剥がれていますが、きれいに保存されています。商店街の店内にはくろしおアートマップが備えられており、町を訪れる人々に町のあちこちで作品の位置を教えてください。一年に一度訪れるところですが、住民たちが作品にどれだけ愛着を持っているか分かるので、作業をする時に心を込めて作らなければならないと思います。そして去る時はいつも名残惜しさがあります。もっとうまく作れたら、次回は住民たちともっと多くの話を交わして、作品の中で人々が生きていく日常の姿を記録として残したいです。

これまで立体造形作品ばかり手掛けてきたのですが、種子島に来ると自分だけの作業方法にこだわらず与えられた材料と状況に順応するよう



モニュメントの錆止めのための準備をする住民たち



御馳走処平八のアート看板の店主と家族と

になります。おそらく、参加した全てのアーティストがそうだと思いますが、自分だけの作品スタイルとは関係なく、今までやってこなかったことをやらなければならない、という状況の中、今はペインティングを楽しんでいます。自分が

やりたいこと、うまくできることだけができる場ではないなので、避けては通れないのならあとは楽しむのみです。



キム・ソング

金 成起 / KIm Sung-ki

2014-16, 18-19 年 参加

個展：トゥドウルギャラリー（ソウル）、2013 東西画廊（ソウル）、1995
ソデムン（西大門）刑務所歴史文化公園進入路銅板、2019
黒潮アートプロジェクト（種子島）、2014～2018
文化ソウル駅 284 コーヒーと社会展（映像アーカイブ）、2018
英国オリエンタルミュージアム国際交換展、2011
文化観光部村美術プロジェクト（槐山）、2010
「ク・ボンジュ、キム・ソング、ハ・ハンソンの3人によるオープン」展（ソウル）、1988

種子島の特別なお別れ式

毎年西之表港ターミナルでは特別なお別れ式があります。アートプロジェクトが終わり、高速旅客船に乗って旅立つ時、埠頭に沿って走りながら手を振る島民の姿は、まるで映画の一場面のようにドラマチックで、韓国に戻ってから長らく記憶に残ります。

この姿を見ると、大変な作業で積もった疲れをすべて振り払って帰国できる、ここだけの特別なお別れ式です。どの言語より強力な住民のパフォーマンスは何を表現しようとするメッセージなのか明確で、次を期しながら私も人々が見えなくなるまで手を振ることになります。

くろしおアートプロジェクトに参加している間、多くの住民と知り合いになりました。ほとんどの人が彼らの家族や周りの友達まで知ようになったのは普遍的な都市とは少し違って人々の関係が分かるようになる所であります。

住民たちは家族と一緒に来る時もありますが、お互いに違う時間に来て気楽に作品づくりを手伝って帰ります。また、学校のサークルや町の団体、行政の方が時間を作って助けにきては、何やら楽しい時間を過ごしているのが感じられます。芸術祭では毎年少しずつ新しい人々を見かけるようになり、他の地区の人々も、自ら参



高速船搭乗のアーティストを見送る住民たち

加してくれていることから肯定的にプロジェクトが進んでいるように思われます。

時には計画になかった作品を作ったり、描いたりすることがあります。例えば「若狭姫と桜」の壁画は、身近で力をかしてくれた住民たちへの感謝のしるしとして作業の途中で壁に描いた作品です。ミュージックスタジオアミーゴの建物の壁には若狭姫の絵でここの歴史物語を描き、バス停で待つ住民や観光客のフォトゾーンになることを願いました。松浦商店の隣の駐車場には松浦さんが桜が好きだと言っていたのを耳にし満開の桜が風に舞う場面を描きました。ちょっといたずらですぐ隣に駐車している井元イチ子さんの自動車のタイヤに花びら1枚を描きました。彼女は子どものように喜びました。そして車が走る時に少しピンク色が回る感じは私だけが分かることなので面白い思い出として残っています。

井元さんとの出会いは特別な縁です。先祖が文禄の役の時、ここに移住してきた朝鮮人の子孫

なのだそうです。彼女の家が作業現場の前にあって、おやつやキムチをくれたり、寒い日に暖かい飲み物とカイロを持ってきてくれる優しいおばあさんのような方です。韓国のアーティストたちと話をしたがるし、先祖たちが生きてきた話を遅くまでしてくれながら家系図を見せてくれたりもします。韓国の歴史の記憶の中に消え、漠然と伝わる話の中の実存の人物に出会うというのは意外なことでしたし、熱い同質感が感じられた方なのです。



いち子さんの車のタイヤに描かれた花弁



商店街の壁面に描かれたソングさんの絵



横林自動車のアート看板と横林さん

6年間、種子島西表市商店街の壁に多くの人々の顔と商店のアート看板を描きました。住民をモデルにスケッチする際には彼らの様々な人生史を聞く機会となり、種子島を理解する上で価値のあるものでした。その中でも強い印象を与えたのは横林さんの自動車整備工場のアート看板を制作した時でした。彼女はいつも年齢に見合わずエネルギッシュな方です。夫婦の人生ストーリーを聞いて、彼らの熱いエネルギーを描くためにわざと荒い筆のタッチと強い色で絵に

描きました。機会があれば、その夫婦と町の住民の話をそれぞれ自分の作品として残したいですし、その考えが必ず叶うことを願っています。住民のコミュニティアートに対するマインドは本当に最高だと思います。住民の皆様が関心を持って、参加し、愛情を持って協力しようとしてくれました。世の中にこんな町も珍しいでしょう。すべての過程が良かったし、大変でしたが、とても楽しく作業できたプロジェクトだと記憶しています。町の人々に感謝しています。



キム・ジョンミン

金 錠珉 / KIm Jung-min

2014-17 年 参加

新羅大学校美術学科彫塑専攻卒業及び同大学院卒業

SUPERNATURE(MUSEUMDAH.), 2020

友達と一緒に WITHMYFRIENDS(63 アート美術館、ソウル)、2019

HEINSTINCTONLETITBE(インレ湖、ミャンマー)、2019

達城大邱現代美術祭 (ディアク文化館周辺、大邱)、2019

ビョンチャン (平昌) 冬季オリンピック公式イベントファイヤーアートフェスタ 2018 献花歌 (キョンポ (京浦) 海辺、カンヌン (江陵))、2018

『三国美鑑』韓日中現代美術祭 (サムタンアートマイン現代美術館、旌善)、2018

玄海灘を越えた恋物語

種子島に行く前は、日本についてあまり知りませんでした。その前に何度か展示会や旅行で日本に行ったことはありましたが実際に町の中に入って人々と会って作業をしながら人が暮らす姿に触れるのは初めてでした。アートプロジェクトへの参加の打診を受けた時、未知への好奇心で快く承諾しました。ちょうど作家として新しい環境で違う形式の作品をやりたいと思っていたところで、与えられた材料と環境で地元住民たちと一緒に作業するという事は新しい挑戦だったので小さな期待がありました。

「くろしおアートプロジェクト」の最初の作品は、種子島沖の広い海のどこかを通り過ぎるような巨大なクロマグロの造形作品です。この作品の制作は松田制作所で行いましたが、竹で制作をする篠原洋之さんと一緒に参加した作家たちの助けが大きな力となりました。あの時は種子島をよく知らない状態で到着するやいなや作業を始めたのですが、ひたすら作家精神で制作に打ち込み作品を作りました。早朝から深夜まで数多くの鉄板の破片を切り出しては溶接しているうちに、いつの間にか少しずつ形が見えてきて、



瑛子さんと出会った翌日一緒にベンチにペイント / 2015 年



ゆめまぐるモニュメント制作で溶接をするジョンミンさん

少し安心してほっとしました。実際、短い日程で作るには少し無理な大きさだったので、完成しなければならぬというプレッシャーで苦労しましたが、ペイントまで塗ってから町の中に移してみると、初めて心配は消えました。

制作を終えると、それまで町で作業場として使っていた空間をきれいに整理し、アーティストたちが作った作品を展示して閉幕式を準備します。

その閉幕式で、アートプロジェクトに参加した住民や行政の方々、アーティストらがクロマガロの作品に各々のメッセージとサインを残してもらいイベントを開催し、彼らが喜ぶ姿を見て作品を作ったアーティストとしてやりがいを感じました。一つ残念なのは、時間が経つにつれて作品の鉄材が朽ちて、住民のメッセージが消えてしまうことです。

2016年2回目の参加の時、今は亡き小倉達弘さんのアート看板を制作しました。小倉さんは、プロパンガスや石油を扱う店を運営していましたが、看板には炭を担いでいる姿が描かれています。彼の昔の友達はすぐに達弘さんだと分かるととても喜び、友達が「うん、昔は炭屋をやっていたんだ」と言いながら彼らだけが知る昔の思い出話を語らせる作品となりました。古い町は、長い歳月の中で、多くの人々の物語が伝えられてきた宝物倉庫のような場所です。小倉さんはユーモアとウィットにあふれた方でした。町の若い人とも親しく接して愉快な方でした。そして火縄銃保存会の会長をなさっていましたが、お店の裏通りにある家に招いてくださり、古い火縄銃を構える姿と使い方も教えてくださいました。おそらく小倉さんの人生で火縄銃は彼自身の存在と同じくらい重要だったのではないかと思います。



小倉燃料のアート看板 / 2016 年撮影

そして、私にとって種子島はさらに特別な所です。ここで自分の人生のパートナーに出会ったからでもあります。2回目の参加である2015年、平川久美子さんの紹介で瑛子さんの誕生日に初めて出会いました。それは作業を終え、現場でアーティストたちとその日の作業について討論している途中の自然な出会いでした。お互い好感は持っていましたが、プロジェクト期間中は会う機会が少なく大変残念でした。島を離れるときにクリスマスに訪ねてくると伝え、その約束を守るためにまた島に行きました。その後4年間の熱愛の末、2019年に結婚し釜山で暮らし始めました。久美子さんは瑛子さんが高校時代の先生で、誰よりもよく大切にしている教え子だったので、私と多くの話をした後、二人の縁を結ぶことになったそうです。2020年2月に釜山で甘い新婚生活を送っていましたが、瑛子さんが一時的に種子島の実家に戻っている

間に世界的に新型コロナウイルスのパンデミックが起こり、1年近く行き来できなくなっていました。その間の、9月13日、二人の間にかわいい赤ちゃんのルナちゃんが種子島で生まれました。行けない現実を言葉で表現できないほどお互いに会いたい気持ちと不安を募らせる中、久美子さんがいつも瑛子さんの近くにくてくれて本当に感謝していますし、安心しました。うちの夫婦はお互いに相手の言語を完璧に表現することができません。韓国にいる時は韓国語で、日本にいる時は日本語で話し、愛で包み、互いに理解しながら暮らす「くろしおアートプロジェクト」が結んだ夫婦なのです。今、父親になった私は寝る間も惜しみ以前よりもっと懸命に生きていかねばならないという重い責任感を感じながら暮らしつつ、一日も早く種子島へ行けることを願っています。



ソ・ドンワン

徐 同完 / Seo Dong-wan

2016-18 年 参加

新羅大学校芸術学部美術学科修士卒業

個展 3 回

新羅彫刻会、チュンジャアートギャラリー、釜山
釜山彫刻家協会展、ホンティアートセンター、釜山
ムドゥセラ展、金井文化会館、釜山

THE INSTINCTION LET IT BE, MYANMAR

10月の涼しい風のように 美しい人々が住む島

種子島はくろしおアートプロジェクトの間、慌ただしい日程で島をきちんと見る事ができず、休日に改めて訪ねたことが二度ありました。事前に知らせもせずに出発したので島の人たちが気づかなかっただろうかと心配して行きましたが、平川浩さんをはじめ多くの人たちが喜んで迎えてくれました。あの時のありがたさは今考えても胸にジーンとします。釜山を離れ、何も考えずに何日間も気楽に休める場所はどこだろうかと思うと、ふと種子島を思い浮かべました。もう一度会いたい人たちと時間がゆっくり流れるようなゆとり、汚れていない自然が恋しかったのかもしれませんが。しばらく忘れてしまった日常の余裕を種子島に求めているのです。

くろしおアートプロジェクトに参加したのは、日々過ごす自分の作業場を抜け出して新しい環境で作業したいという思いからでした。3回参加しましたが、普段はあまり使わない木製パレットやトロ箱などリサイクル材料を主に使用しました。資源を節約する環境親和の意味と材料費を節約して効率的に活用しようというメッセージをもらいました。パレットはリサイクリング会社をやっている仁禮さんが、トロ箱は店をやっている岩坪さんが主に用意してくれました。材料が揃えば住民がきれいに手入れをし、作家たちが色付けしやすいように白い下地を塗ってくれます。作家たちの作業時間をその分短縮させることになります。住民は作家たちがどんな状態で作業するかをよく知っており、熟



種子島クリーン産業にてリサイクル材料を集める、竹下さんと、仁禮さん



壁ギャラリーに使用するトロ箱の下準備

練した助力者として最上のサービスを提供してくれます。また、ほとんどの方が自営業や会社員で忙しい時間を割いて作業することもあります。プロジェクト期間中には積極的に参加したり休暇を取ったりする姿は、他では見られない光景でもありました。

プロジェクトが始まったばかりの時とは違い、時間が経つにつれて住民たちの関心と参加率が高まり、まるで自分の家の仕事のように力になっているのが目に見えてきました。つまり、共同体は人と人の関係にしていけるのが、最も理想的で平凡な真理だと思いました。

2016年のプロジェクトに初めて参加したときは、高崎酒造のアート看板を作りました。その時、焼酎の甘露を初めて味わいましたが、さつまいも独特の香りと深いコクの魅力にほれ込んで、高崎酒造のアート看板を描くことにしました。そのときは、焼酎がどのような過程を経て造られるのか知りませんでしたが、種子島に個人で旅行した際に、高崎酒造の社長の案内で工場を見学する機会がありました。

新しく建てられた工場は、現代的な設備で綺麗ですが、製造方式は代々受け継がれている伝統

的な方式で作ることにこだわっているそうで驚きました。甘露は地元の特産品であるサツマイモを主に使用し、ここの住民はもちろん全国的に甘露の愛酒家が多いそうです。たまたに韓国で種子島を思い出すとサツマイモの香りがほのかにする甘露が恋しくなります。

そして次は2017年、2回目に参加した時の話です。前年までは毎朝、作業現場前へ愛犬を連れて散歩していた銀座薬局のおじさんが見当たらず、町の人に聞いてみると、「亡くなった」ということでした。まるで家の親戚の方が亡くなったようでした。何もおっしゃらなかったのですが、作業現場の前を通りながら、アーティストたちをいつも応援の目で見ていた記憶が思い出され、銀座薬局のアート看板を作ることにしたのです。



高崎酒造のアート看板



南日本新聞販売所のアート看板と長渡さんの義理のお父さんと

田村さんがあらかじめ用意した奥さんとお嬢さんのインタビュー内容を見てスケッチをしました。お嬢さんの話しに、家族同様の愛犬と父が鯨捕りのために種子島に来るようになったという話があり、この話を背景に作品化しました。アートの看板を描く間、家族は毎日のように訪れ、看板が描かれる姿を見ていました。家族がお父さんをどんなに愛したのか知ることができました。誰かにそれほど愛されていた人の姿を描くのは初めてで、特別な経験として記憶されています。

私は彫刻を専攻したので人物画が上手ではありません。そして特に大勢の人々の前で絵を描くことは適応できず上手に描くことはできなかったのですがその時の胸の高鳴りは心の奥深くに美しい記憶として残っています。

2018年にはコミュニティセンターの長渡さんの義父が運営している南日本新聞西之表販売のアート看板を作りました。作業をしていたとき、通りかかった方が自分の友達が看板の主人公だと分って「若い頃の二人の夢は船に乗って全世界を旅行することだった」と話してくれました。作品を完成した後、二人の友人は未だ叶えられずにいる夢の前で記念写真を撮って、若い頃を回想しているようでした。二人はもうすっかり白髪を生やす歳になりましたが、まだ若い日の夢を持っているのはそれだけ熱情的に生きていたからかと思いました。

私だけの考えでしょうか。種子島は第2の故郷だと思います、会いたい人がいて、心苦しいときは泊まりたい、心の故郷のようなところです。



ヤン・ヒョンジュン

梁 珉準 / Yang hyun-jun

2016-18 年 参加

新羅大学校（釜山）芸術大学美術学科卒業

ADULTCHILD 「I AM YOUR MOTHER」 招待展（ギャラリー展、大邱）、2020

ADULTCHILD 「ACCOMPANY」 招待展（じそギャラリー、大田）、2019

ADULTCHILD 招待展（ARTJB ギャラリーソウル）、2018

ADULTCHILD 招待展（ギャラリー展、大邱）、2018

ADULTCHILD 個展（テヒョンギャラリー釜山）、2017

「私はまだ大人になるにはまだまだ」 個展（モンマルトルギャラリー、釜山）、2014

余裕と温かさがある島、種子島

朝、町の真ん中にある作業現場に出て作業の準備をする時、通り過ぎる住民たちと明るく挨拶をしながら新しい一日を始める。散歩するおじいさん、自転車に乗って出勤するお母さん、子どもたちの学校に行く姿から都市では感じられなかった余裕が感じられます。

2019年には個展があったため参加できず、その前年の17、18年に2度参加しました。忙しい日常に追われる中、種子島に行けば、人生の活気と余裕が生まれます。会って間もない住民が気兼ねなく近づいてきて、話ができる雰囲気は都市にないでしょう。それゆえ、2019年に参加できなかったことを残念に思いました。

数年前、中国海南で進めていたコミュニティアートプロジェクトに初めて参加しました。アーティストとして社会的な参加の価値を実現するために企画されたプロジェクトで、韓国と中国のアーティストと海南省の美術大学の学生が住民と共に行うものでした。あの時の特別な経験がアーティストとしての自分の作品に多くのインスピレーションと影響を与えたので、また別の挑戦をしたかったのです。

釜山からフェリーで向かい福岡を経て新幹線で鹿児島に到着すると、桜島が噴火して黒い火山灰の粒が道に降り積もった姿が不思議でした。鹿児島フェリーターミナルからトッピーで1



高速線のりばで出迎える住民と到着したアーティストたち / 2017 年



スーパーマンの娘さん谷山真琴さん

時間ちょっと経つと、遠く青い空と青黒い海の上にぽつんと浮かんでいる離島「種子島」が見えます。位置的には近いと思っていたのに、長い道のりで疲れを感じていたのですが到着するとすでに多くの住民が集まり出迎えてくれました。今までに参加した作家たちから、住民たちは親切で優しいと事前に聞いてはいましたが、みな長年の友達に会ったように喜ぶ姿がとても印象的でした。

大学でペインティングを専攻していたため二度の参加でたくさんの作品を残しましたが、その中で食堂を営む店主をモデルとしたスーパーマンお父さんのアート看板が一番記憶に残ります。町でフランスレストランを営む彼の娘さんの話の中で、父はスーパーマンだったと語りました。幼い頃の父親の姿は、強靱で広い肩で重い荷物を持ち、どんなに困難なことも気にせずに解決するスーパーマンだったということでした。彼女が留学を終えて記者として働き、帰郷して見た父の姿は小さく、弱く寂しく感じたそうですが、今も彼女にとってはスーパーマンのような父の姿が記憶に残っています。このことは現在、私の作品で表現している内容と一脈相通

ずるところがあります。私は私自身のお母さんの姿を新しい人生のお母さんの姿として作品に反映して描きます。お母さんは若い頃、子育てをしなければならない中で、やりたいことがたくさんあったが叶わなかった、そんな母の記憶を作品で表現しています。そういった経緯もあり、アート看板では弱くない強い内面を持った父親スーパーマンの姿を描きました。現場で作業中にモデルのお父さんが来てスーパーマンになった自分を見てにっこり笑いながら背を向ける姿は私たちみんなのスーパーマンになったお父さんの姿を見るようでした。

ほとんどの公共美術がそうであるように、アーティストが主導し、住民が参加するといったコミュニケーションを試みても共同制作には限界があります。種子島は住民とともに絵の具を混ぜ、一緒に描く中でモデルになる住民がその現場を尋ねてきて自分の人生の話をためらわず聞かせてくれます。住民とのやりとりを通じて彼らの暮らしが投影されて徐々に共感できるようになり、はじめは何も知らなかった島で連帯感が形成されて、前には感じられなかった温かさを感じながら作業ができました。



串まさ店主河内時正さんとヒョンジュンさん制作のアート看板

特に種子島の子どもたちがアーティストたちの作業に関心を持って参加するのはとても良かったです。子どもたちが成長して他の地域に旅立つときに、幼い頃から共同体の一員として活動するという文化と芸術のある町として地元を記憶し、愛郷心を持つようになることは何よりも価値のあることです。

「くろしおアートプロジェクト」は、私に公共美術の概念を変えさせる意味のあるプロジェクトでした。自発的な住民の参加で作家と住民がコミュニケーションをとり、作品の内容を豊か

にする芸術的インスピレーションを与える良いモデルです。

しかし、このプロジェクトの発展のためには、現在までより町に対して、プロジェクトに対してもう少し関心を傾けなければなりません。住民や行政、アーティストはそれぞれの役割について考えなければなりません。遠くない未来に驚くべき結果が待っているでしょう。種子島がより元気いっぱい美しい場所になるために役に立つなら、私はいつでもまた行けます。



チョン・ムンシク

鄭 文植 / Jung Moon-sik

2018-19 年 参加

東義大学（釜山）芸術大学美術学科洋画専攻卒業

鄭文植個展「ニュートウン」展、ギャラリーミゴ、釜山、2016

鄭文植個展、栄光図書ギャラリー、釜山、2013

「認識的地図を描く」展、釜山市立美術館、2017

「蓄積された風景」展、清州市立大清湖美術館、2016

インターローカル 2015" パラダ " イス建設」展、大田市立美術館創作センター、2016

「若い視覚の新しい視線」展、釜山市立美術館、2014

強烈な太陽ときれいな空気が作り出す 美しいサンセット

種子島で記憶に残るのは、夕方、町を一周して出会った種子島の特産物である甘露焼酎のお店や美しい自然環境です。お店の前には、以前作って設置した作家徐同完（ソ・ドンワン）のアート看板が迎えてくれました。かなり年季の入った店の中には、数年前に日本でグランプリに評価された焼酎など様々な商品がずらりと並べられていて、宅配で送る焼酎を2、3本ずつセットに結ぶ方法も独特だったと覚えています。

お店を見て回った後、小さな港が見える路地の間から強烈な夕日が目に入りました。赤黒く染まった太陽の光は、路地の壁面まで照らし詰め、

視界を赤に支配してしまいました。これまで自然では感じられなかった強烈な夕日に、しばし興奮を覚えるようになりました。都会では感じられないきれいな空気と熱い熱帯性気候がつくりだした夕日は、種子島の象徴であり資産だと思いました。

2018年と2019年の2回参加し、10点以上の作品を制作しましたが、その際には住民の物語の中に彼らの人生とつらかった記憶を夢と希望を込めて再解釈し、作品の中に表現しようと努力しました。落花生を使った和菓子店のアート看板を作る際には、お店の店主が落花生菓子



西之表市の夕陽



壁ギャラリーを制作するムンシクさん

を持ってきてくれたので、お菓子のパッケージデザインを看板の背景絵に描いて、落花生菓子をおいしく食べた覚えがあります。

女性消防団員として活動している椎田なほみさんの壁ギャラリーのトロ箱の絵を描くときは消防団員の制服を着た姿でモデルになっていただき彼女の仕事に対する誇りを感じることができ強い印象を受けました。なほみさんはプロジェクト期間中、作業現場で作家たちを色々と気遣い手伝ってくれたので、恩返しの気持ちを絵にしようと努力しました。また、錨さんのトロ箱の絵は錨さんと一緒に描いたのですが、絵の描き方がとても良かったので、お互い満足のいく作品が出来たと思います。錨さんがアーティスト

トたちのために用意してくれたバーベキューパーティーは記憶に残っています。

これまで他のコミュニティアートプロジェクトに何度も参加したことがありますが、種子島住民のように自ら参加してプロジェクトと作品に対して情熱的な態度を見せるところは多くありませんでした。

2020年はコロナウイルスの影響で中断しましたが、今後もこのプロジェクトが続けば、住民共同体の文化芸術の享受だけでなく、韓国と日本のアーティストたちが互いに協力し、発展できる重要な拠点になると思います。



サーフィンショップオリジンのアート看板を制作するムンシクさん



美春荘のアート看板と、店主酒井勝也さんと



チョン・ホンチル

鄭 憲七 / Jung heon-chil

2018-19 年 参加

新羅大学校（釜山）美術学科卒業、2006

個展「同行」（リビンギャラリー、釜山）、2018

個展するすす展（舞鶴ギャラリー、大邱地方警察庁）、2018

個展「同行」（幸せな膳、ソウル）、2018

個展「同行」（チャンウンソンギャラリー、ソウル）、2013

個展「さぶさり夢で遊ぶ」（インサアートセンター、ソウル）、2011

団体展利川市立おるじょん美術館（2018 年の十二支戌絵画展）、2018

芸術は町に何を残したのか

くろしおアートプロジェクトは、住民主導で行政の方やアーティストが共同でつくりあげるアートプロジェクトという話を聞いて参加することになりました。私は韓国画を専攻し、筆で静的な作品にだけ没頭していましたが、アーティストとして地域社会への関心が必要だと考えていました。くろしおアートプロジェクトについては参加した経験のあるアーティストに話を聞いて少しは知っていましたが島に入っていくうちにいくつかの好奇心が湧いてきました。

果たして、共同体を構成する様々な人々が一緒になって成し遂げるコミュニティアートプロジェクトで、共同体の活性化や公共芸術プロ

ジェクトの成功が可能なのか？アーティストたちは自分自身に満足する作品を作ることができるだろうか？また、住民たちは作品に対して満足しているだろうか？など多くのことを考えるようになりました。参加した最初のプロジェクトを終えて韓国に戻った後も、その考えは依然として頭から離れませんでした。その疑問は、2019年に2回目に参加した私の姿と、町の人々、町に作られた作品の中から少しずつ見つけることができました。遠い道のりを厭わず訪れたアーティストたちと埠頭に出迎えに来た住民たちの姿から、またよく管理された作品から疑問が解けました。



初来島時の住民による出迎えと見守るホンチルさん



ト口箱の下地塗りをするレオクラブのみなさん



OA プロジェクトのアート看板の制作をするホンチルさん

村人たちはアーティストたちが作業するのに最適な環境を作るために率先垂範する有機的な共同体だという気がしました。このような雰囲気は初めて参加して適応することができなくて、こちない自分に容易に作業に没頭することができるようになりました。

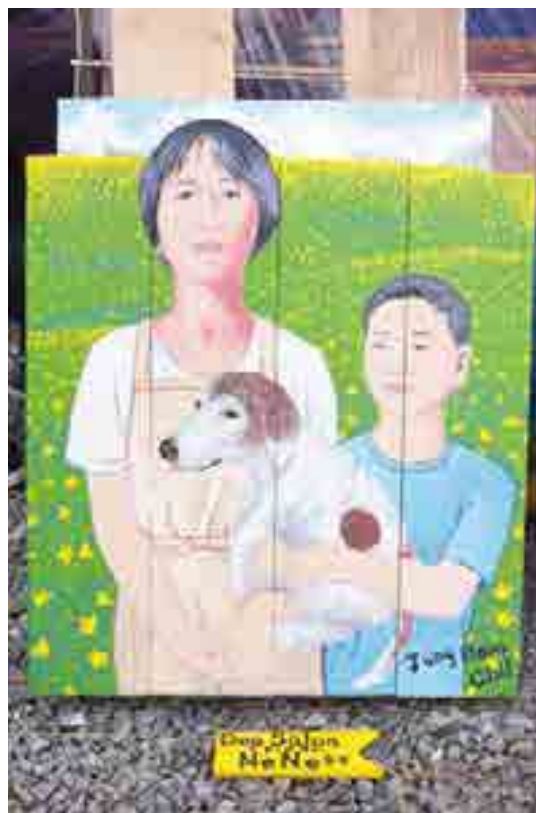
私はこのプロジェクトに参加するために、忙しい日程をなんとか調整しました。しかし、島の美しい自然と住民と一緒に作った手垢のついた作品が、プロジェクトに参加することを決めた私を誉めているようでした。10年近くの歳月中、一緒に走ってきた数多くの人々のお互いを



広島焼の一番星のアート看板と店主と

思う気持ちと情熱があったからこそ可能だったのだと思うと、改めて「くろしおアートプロジェクト」の共同体としての強靱さがうかがえます。

2018年と2019年の2回の参加でいろんな作品を作りましたが、特に記憶に残る作品は犬を題材にした作品で、普段私の作品で犬をたくさん描いているため自然な感じになりました。2018年に作ったお好み焼き専門店の一番星は、野球場と二匹の犬がアート看板の主人公で、店内のインテリア小物で野球ボールがたくさんあるのを見て、広い野球場で遊んでいる二匹の犬をテーマにスケッチしていました。一番星のこずえさんが毎日犬たちと一緒に来て絵に関心を持ってきて、予想よりも多くの時間を費やして完成しましたが、とても満足して下さって良かったです。



DogSalonNeNeのアート看板

もう一つは、DogsalonNeNeのアート看板で、家族写真のような構図で母と息子の犬で構成され、広い花畑を背景にしたシンプルな構図ですが、家族の愛情がたっぷり詰まっている作品なので、印象深く残っています。

作品が完成した後、発表会でみんなで集まってプロジェクト期間中に感じたことをお互いに共有できてのも良かったです。そして街の人の穏やかで切ない姿が記憶に残っています。

時には大変で危機的状況もあるでしょうが今ではあちこちに位置する作品の中の物語のように希望を夢見ることができるので、次のくろしおアートプロジェクトをお待ちしています。



イ・ヨンギ

李 龍氣 / Lee Yong-ki

2014 年 参加

個展及び招待展 17 回、アートフェア個人ブース展 9 回、団体展約 280 回

清州国際工芸ビエンナーレ招待作家展出品

CRAFTRECIPE 展（釜山市立美術館企画招待展）

伊丹市立工芸美術館招待展（ITAMI, JAPAN）

現在、釜山工芸名匠会、韓国美術協会、韓国工芸家会、釜山美術協会会員、

釜山大学芸術学部造形学科兼任教授、イ・ヨンギ木造型研究所代表

ハイビスカスの魚

ほのかな杉の香り漂う島の作業現場に町の子どもたちが一人二人と集まってくる。子どもたちは木の根元に腰をおろすと、埃っぽい場にもかわらず好奇心に満ちた口調で「この木で何を作るんですか」と明るい表情で問いかけてきたので、しばらく仕事の手を休めて、「魚を作っているんだ。赤いハイビスカス模様の魚」と答えると子どもたちは早く完成した作品を見たいと言って遅くまで周りで遊んでいた。

今までたくさんの作品を作ってきましたが、町の真ん中で行き交う人々と会話を交わしながら子どもたちが遊べる空間で作業したことは貴重なこと

でした。誰かの前で作品を作る過程と作業する姿を見せることも意味のあることです。

種子島に行く前、韓国で作家ミーティングをしました。種子島の様々な話を聞いて、好奇心で下調べをし、種子島のシンボルとしてハイビスカスの魚を木で作る計画を立てました。私の意見はアートディレクターと住民に好評を得てすぐに木を調達しに製材所に行きました。木は多くありましたが適当な大きさのものがなく何箇所か回ってやっと手に入れることができました。必要なものがすべてないということを実感した瞬間でした。夜遅くまで作業をしていましたが、若い母親たちの集



子どもたちが遊ぶ隣で制作をするヨンキさん



夜遅くに炊き出しをして下さった、どんぐり倶楽部のみなさん



赤いハイビスカスの魚を制作中のヨンキさん



ハイビスカスを描くヨンキさん

まりであるどんぐり倶楽部がうどんとそばを準備してくれました。温かいスープにコシのあるうどんを2杯もたいらげると、近頃では感じられなかった満腹感と人が暮らす匂いがしました。小さなことは気にせず遠慮なくお互いを理解できる場所ではないかと想像してみます。都会では感じられない人と人、人と町の関係も深いのですが、種子島に来たアーティストたちにもっと特別な関心を与えているのは何かと思いました。

プロジェクト期間中休みの日、種子島で一番長い長浜へ行きました。サツマイモのように細長い島

の西に弓のように曲がり、長さ12kmにわたって広がるウミガメの生息地です。この広い浜辺に人影は見えず青空に青黒い海、押し寄せる波の音は、数日間の緊張と疲れを癒してくれます。そして砂浜の片隅には黒い砂鉄が所々集まっており、その砂鉄がかつてここでは火縄銃の鉄材料に使われたという話を聞き、改めて資源と歴史の関係が知りたくなりました。また参加できる機会があれば、子どもたちと一緒に作って、子どもたちが乗って遊べるアートベンチを作りたいです。



モニュメントを力合わせてセッティング



完成したヨンギさんのモニュメント



イ・チャンウン

李 昶濤 / Lee Chang-woon

2015 年 参加

個展 5 回

SPACEBIRDS(PLATFORM-L)、2020

ARTISTPROJECT2019(大田創作センター、大田)、2019

若い視覚の新しい視線 2018(釜山市立美術館、釜山)、2018

不確実性、連結と共存 (水原市立アイパーク美術館、水原)、2016

釜山ビエンナーレ特別展に行く、波に出会うまで (高麗製鋼水営工場、釜山)、2014

再び訪れた種子島

早朝、西之表港の魚市場には明け方にとれた新鮮で様々な魚が入ってくると聞きました。普段釣りが好きで魚にも関心が高く新鮮な魚競売の様子を見ようと市場に行ってみると、そこにいた多くの方がプロジェクトでの作業中に手伝ってくださった方々だったので、喜んで迎えてくださり魚の名前も一つ一つ親切に教えてくれました。島の周辺には水産資源が豊富で市場の中には数多くの魚が集まり、競売の音と商売人た

ちの手の動きが忙しく動いて面白かったです。その中でも思いがけず海の珍客に出会いました。大きな伊勢海老が華やかな色彩で市場の床にあり、思わず手を出すと大きく跳ねました。びっくりしましたが、隣にいた漁師たちは笑いながら手に気をつけるように教えてくれました。種子島はフィリピンの東から北上する黒潮海流の中心にあり海洋資源も豊富で、古代から海洋文化が発達して栄えたところだそうです。



初代アートベンチの骨組みを溶接するチャンウンさん



グラインダーの使い方をチャンウンさんに教わる荒木さん

くろしおアートプロジェクトの経験としては、2015年度にアートベンチの基本的な形づくりをしながら共同制作の真意を知ったことが大きなやりがいでした。誰か一人の作業ではなく、作家と住民と一緒に作業する過程で、共同体の重要性に気づきました。住民には難しい鉄の溶接とグラインディング技術を教えたところ、すぐ身につけ丈夫なベンチの形を立派に作りました。かつて鉄文化が盛んだった場所だということを実感しました。住民自らが作品を維持・補修するには基本的な技術があるといいのではないかと思います、安全な道具の使い方を教えました、特に荒木正臣さんのグラインディングはすばらしかったです。

住民たちにはそれぞれ本業がありますが、随時作業場に立ち寄り、作家たちの作業を助け、道具や材料が足りないかチェックして作業が円滑に進むように、作家たちに配慮してくれている

空気があって、楽に作業することができました。プロジェクトで最初に島に着いて作業を始めたときは鉄パイプが足りず聞いてみたところ、翌朝、鹿児島からフェリーで来ると言われて驚きました。島ではすべてが珍しくて、材料を手に入れるのに時間がかかることを知りました。

平川浩さんにアートベンチの作業量が増えてペイントが足りなさそうだと伝えると、建築現場でペイント工事をする彼の友人に連絡して足りない分のペイントを分けてもらいました。それだけでなく、ほとんどの工具は作業現場の前にある松浦起也さんのお店で対応してくれました。少ない予算でこのように多くの作業ができたことは、プロジェクトのためにどれほど多くの方々が献身して努力してくださったかを裏付けている、といえるのではないのでしょうか。島を離れた今も、お互いを支えて暮らす種子島の人たちが懐かしいです。



アートベンチを制作するチャンウンさん



岩坪鮮魚店にてチャンウンさん制作のアートベンチを修復する、松浦さん(左)と岩坪さん(右)/2017年



キム・ジョンソン

金 鐘先 / Kim Jong-Sun

2017 年 参加

新羅大学校芸術学部彫塑科及び大学院美術学科卒業

個展、赤い窓：今日の不可能明日の現実空間アートバウンド（釜山）、2020

個展、夢を見る人を聞く、ギャラリー ELLE 招待展（ソウル）、2020

PRIVATE EXHIBIT, RED WINDOW, ART MORA GALLERY (NEW JERSEY, USA), 2019

個展、昼に浮かぶ星、ヒスギャラリー招待展（ソウル）、2018

個人展、あなたは今日どんな夢を見えていますか？ギャラリーヒ招待展（量産）、2018

個展、そこへ行く道展（釜山金海空港）釜山美術協会企画招待展、2018

熱情とエネルギー溢れる種子島

くろしおアートプロジェクトを行っている種子島に関する話を聞いて、すぐに新海誠監督のアニメ「秒速5センチメートル」が思い浮かびました。遠く離れた彼女に会いに行く話から始まるのですが、劇中では桜の花びらが落ちるのが秒速5センチという言葉が印象的でした。お話を聞いた時は種子島に行けるならぜひ10月に行きたいと思っていたところ、くろしおアートプロジェクトがその時期だったので悩まず参加すると答えていました。とても楽しみでした。「秒速5センチメートル」の二番目のパートの花苗の言葉のように、種子島に着いた時には既にいくつかの台風が通ったあとで少しずつ涼しくなっていました。サトウキビ畑から吹く涼しい風と青空に高く浮かぶ雲は「秒速5センチメートル」の世界と重なりどんどのめり込んでいきました。



月窓亭道標の制作、ヒョンジュンさんと

2011年のくろしおアートプロジェクトの立ち上げ時から今まで、プロジェクト期間中は一度も大きな台風が来たことはないと聞きました。台風の通り道にある種子島は、たくさんの台風の風雨と荒々しい海を乗り越えて暮らしてきた歴史を持っています。そのため、ずいぶん前から荒れた海で航海を続けて避航してきた数多くの難破船を救助し、安息所を提供し、再び出発するまで温情を施したのでしょう。



高速船を降りはじめの種子島



酒井酒店のアート看板制作中のジョンソンさん



西之表市のさとうきび畑 (撮影 : 平瀬)

種子島はかつて世界に開かれた歴史と海洋文化のせいか、住民の意識やライフスタイルが他地域とは違うと感じました。活発でユーモアあふれる住民たちの親しきは、見知らぬアーティストたちに温かく安らぎを与えました。また種子島の固有の方言は独特の文化があることがわかりました。「おじゃりもうせ」、「よかばんやな」など、いくつかの種子島の言葉を学びましたが、イントネーションやアクセントが難しく、それも西之表、中種子、南種子の言葉が少しずつ違うらしく、これは孤立した島の地理的環境に起因するようです。好奇心で町の商店街を回ってみると種子島の名産も多彩で面白いのですが、独特なキャラクターを持つ店主たちの個性豊かな姿が思い出されます。ほとんどの老舗はお店と主人が一体になったような自然さや、自分のやりたいことをして生きているような気がしました。

私が作ったアート看板や壁のギャラリーの主人公たちもイメージが明瞭で表情が明るく、その感じのまま作品に表れるように努力しました。作品を制作する前に、あらかじめ行われたインタビューから作品の主人公に対する情報を得て

から彼らに会ってみると、ずいぶん前から知っている人にまた会っているようで親近感のある姿で表現することができました。アートプロジェクトも10年続けていくと、町の子どもたちも幼い頃からプロジェクトを見て育ったので、気兼ねなく近づいてきて筆を取る姿は、自分で何かを表現してみたい、できるという自信を感じました。子どもたちは遊び場のようにその場が好きで、大人たちは自負心を持って積極的に参加し、誇らしく思う姿が感動的に感じられます。夕方になると涼しくなって作業しやすく、集中もよくできました。作業に追われていた頃は、住民の皆さんに、コロッケなどのたくさんの食べ物を届けていただきました。特に魚屋を営む岩坪さんが作ってくれたお刺身は、地元でないと味わえない旨みが絶品でした。

2017年に参加して以降は行けていませんでしたが今も台風の季節がくると習慣的に台風の大きさや進行方向を見ています。芸術祭の期間しばらく滞在した土地、10月の涼しい風のように美しい人が住む種子島には台風が静かに過ぎることをいつも願っています。



酒井酒店のアート看板



サラダ館種子島店のアート看板と店主の日高義人さん



キム・ユシン

金 裕新 / Kim You-sin

2019 年 参加

中央大学大学院韓国化学科

釜山大学校美術学科

個展 9 回 (釜山、ソウル)

団体展、アートフェアに多数参加

種子島で会った兄さん

島で誉さんに初めて会ったとき、私ととても似ていてびっくりしました。未来の自分の姿を見るようでした。

初めは言葉が通じずただ黙って見ていましたが、誉さんが笑いながら私を抱きしめた時、ずいぶん前に別れた兄弟に会ったようでした。私たちはお互い異なる地域と環境に住んでいましたが、とても似ていると思った町の人たちがこ

の機会を与えてくれて嬉しく、ありがたかったです。プロジェクトに参加するとき、大変だったことの一つが日本語ができずコミュニケーションがとれなかったことです。誉さんともたくさんのお話をしたかったのですが、そうできなかったのが残念でした。

種子島には韓国人が何人かが住んでいます、そのうち一家でサツマイモ農園を営んでいる



誉さん(左)とユジンさん(右)



金久牛乳販売店のアート看板と河内さんご夫妻



河内さんご家族

シンさんは奥さんと3人の娘と暮らしています。くろしおアートプロジェクトが始まった時から何年間かは夫婦と一緒に通訳をしたと聞きましたが、通訳内容が主に住民を対象にした地域活性化に関するセミナーで、文化芸術と地域再生などの内容だったそうで、ここで普段あま

り使わない専門用語が多くて苦労したと聞きました。彼らは韓国を離れ、種子島に来て20年ほど経ちますが、特に通訳の経験があったわけではないので公式行事の通訳はいろんな困難があったのではないかと思います。その他にも毎年プロジェクトをする度に駆けつけては手助けし韓国からの作家たちも彼らがすごく好きでした。家族が一緒に参加する姿が素敵で記憶に残っています。

アート看板作品をするときには金久牛乳販売店の家族の方にインタビューをしたところ、自分たちはフェラーリに乗って牛乳を配達することが夢だと言っていたことからフェラーリで牛乳を配達する家族を描いた作品が記憶に残っています。また河崎電化サービスのアート看板は店



河崎電化サービスのアート看板制作中のユシンさん

長がバイクマニアだといって電線を持ってバイクに乗る姿の作品スケッチをして、それを見た店長がとても満足していたのでそのまま作業に進み難なく作品を完成することができたため良い記憶として残っています。

今度、参加する機会があれば町の広い空間にスーパーグラフィックス（建物などに施す大きな壁画）をしたいです。住民そして子どもらが一緒に参加する象徴的な作品があればいいなと思いました。ほとんどの農業、漁業地域は人口減少により空洞化現象が急速に進んで若者が都市に流出し、町のリーダーも高齢者層が活動している一方、ここは、若い人たちが共同体活動に多く参加しているようで、今後を期待しています。



河崎電化サービスのアート看板と店主



コン・ミンジ

孔 旻智 / Kong Min-ji

2019 年 参加

慶星大学工芸デザイン学科陶磁工芸専攻卒業

洛東江河口公共美術プロジェクト SUNSETMUSEUM 参加、2020

種子島コミュニティアート参加、2019

キャラクターライセンスフェア展示 (COEX)、2016

第 34 回釜山産業デザイン展覧会 ARTISTICCRAFTSDESIGN、2014

意外なハロウィンデー

周りが暗くなってきてから、賑やかな音楽と奇妙な扮装をした子どもたちと大人たちが作業現場周辺に集まって来ました。怪物や魔女、幽霊に扮装した住民たちは、あちこちを見回りながらお互いの姿を見て楽しむ姿が面白かったです。私も自然にテンションが上がり、可愛い魔女に扮してアーティストたちと一緒に町の子どもたちにハロウィンデーのフェイスペイントをしてあげながら、夜遅くまで思い出の時間を過ごしました。ハロウィンで扮装するのは初めてで、こんなに多くの住民が皆で楽しむ姿は想像していませんでした。一番楽しんでいらっしゃる方は確か高山千史先生だと思いました。

高山先生は少し早めに来てアーティストたちに自分のコンセプトを話し、フェイスペインティングをお願いしたり、普段の本人の姿や行動と全く違う怪奇で滑稽な姿で人々にパフォーマンスを見せてくれたので、私も勇気を出せました。高山先生は町の医者として毎晩作業現場に来て作業も手伝いつつ、昼にあった面白い話や作家の作品についての自分の見解をウイットに伝えてくれました。住民の中には仕事を終えた後に作業を手伝いに来られた方がかなり多かったです。作家は夕食を食べた後は自由に作業をします。最初は大勢の人の視線が負担になりましたが、今はこのすべてを楽しんでいます。



ハロウィンでフェイスペイントをするミンジさん



酒井屋のアート看板制作中のミンジさん

私は陶芸家として作業をする時、個人的な作品のために一人で作業することに慣れていてコミュニティアートプロジェクトに適応するのがちょっと難しかったです。作業現場の周辺は散漫で、自分の専攻ではないペインティングをしなければならないのも難しく、作品を作る時間はいつも足りなかったのです。それでも一緒に作業する作家たちと積極的で親切な住民たちと一緒に働いてやりがいもあり、少しずつ余裕を持つことができました。

種子島には陶芸の工房がいくつかあると聞き、そのうちの1カ所を福元亜里沙さんの案内で福元陶苑に行ってみることができました。数人の住民がレッスンを受け、ここで使用している土は種子島で直接採取し材料として使用しており、伝統的な釜で陶器を焼くなど、地域の伝統文化がよく保存されていました。ごつい黒褐色土の固有の感じに紫色の天然釉薬は神秘的で孤独な島の感性が染み込んでいました。機会があ

ればここに泊まって種子島の伝統的な陶芸を学びながら作業をしたいと思いました。

種子島で最も有名な和菓子の一つ、菓子処酒井屋さんのアート看板を描きながら、改めてこの伝統文化をうかがうことができました。酒井屋は1913年に創業して100年以上の歴史を持ち、家族で伝統を守っているお店です。食材も種子島で生産された安納芋、紫いも、黒糖などの原料で作られ、日本全国で毎日販売されています。酒井屋さんの主人は東京で製パン・洋菓子技術を学び、26歳で帰郷して家業を継いで店を発展させたと言っていました。今では商工会の副会長を務めています。心の中では幼い頃の夢がまだ残っているそうです。それはフランスパンを作ることでした。アート看板には酒井屋さんの夢を込めてフランス風のバゲットパンを抱えているポーズに大きな帽子をかぶった姿を描いたのですが、絵が気になる娘さんが来て、短い髪がお父さん固有のキャラクターな



酒井屋社長とミンジさん

ので帽子をとってくれと要望があり帽子なしの絵を完成しました。娘さんは絵に満足して酒井屋のお菓子をお土産にしてくださっておいしく食べた記憶があります。

以前作られたアート看板を見にアートマップで探したのも面白かったです。アートの看板だけを見て、商店のストーリーが全部分かるわけはありませんが、商店ごとに人々の夢と希望が

込められていると思うと、なんとなく胸がいっぱいになりました。

もう既にくろしおアートプロジェクトが10年になったそうです。まだ町にはすべきことが多いようです。商店街には、アートの看板をずっと作っていかれたらと思います。住民の話で盛り上がり、種子島ならではの特徵として残ることができれば嬉しいです。



7

町の未来

コミュニティアート活動は地域のアイデンティティを発揮できる活動であり、芸術的挑戦が必要です。地域住民との十分なコミュニケーションや理解を基に、今後100年以上住みたい地域作りを目標にしなければなりません。地域住民が地域の活動家で、または多様な専門家であり担当公務員であり、地域の自然環境や文化的資産を素材に創意性と革新を通じて事業的価値を創出するローカルクリエイター (Local Creator) となることを期待しています。

コミュニティアート活動を通じた希望のまちづくり

東西大学校（韓国 釜山）

イ・ミョンヒ / 李 明姫

近代以降の急速な都市拡張により、都心空洞化現象を克服するために始まった都市再生は、立ち遅れた既存の都心に新しい機能を取り入れ、都市を新しく復興させようとするものであります。最近まで進められてきている経済成長中心の政策は、地域の文化的立ち遅れをもたらし、商業機能中心の都市開発は、地域住民が文化的に享受できる機会を奪う結果となってしまいました。このような中で、文化を産業として認識する動きが起ころい始め、文化に対する新しく多様なアプローチ方法により地域の特性を生かした文化とこのような文化的イメージに対する産業的価値を極大化しています。

文化活動は人々の関心を短時間で集中できる最適の媒体であります。このため、文化を積極的に活用し、産業と連携させて地域活性化の求心点として活用することができます。

実際、世界の多くの都市が地域の文化・芸術を活性化することで地域開発に成功しており、文化都市造成事業、住みやすいまちづくりなど、これらに類する形の地域開発が推進されています。文化芸術の持つ社会・経済的効果に対する関心が高まるにつれ、世界的に文化芸術を活用した発展方向についての議論が持続的に行われ

ています。すでにイギリスをはじめとする西欧社会では、文化芸術に対する政策的アプローチをエリートアーティスト中心の創作支援から一般人へのアプローチ、ひいては彼らを直接芸術創作に参加させるコミュニティアートにまで拡大しています。

1. 公共芸術とコミュニティアートの理解

公共芸術 (Public Art) は一般的に大衆のための芸術を意味します。一般大衆に公開された場所に設置されることや展示される作品をいいますが、指定された場所に設置された芸術や場所そのもののためのデザイン等も含まれます。作品が設置される場所はほとんど都市であります。最近都心の外郭または農漁村など場所を区別しない彫刻・壁画・ストリートファニチャー・デザインなど多様なジャンルを包括しています。また、最も一般的な意味の公共芸術は、単に地域社会のために制作され、地域社会が所有する芸術をいいますが、具体的に公共芸術という概念は、1960年代末アメリカ政府で始まった「芸術のための一定持分投資」プログラムと国立芸術基金の「公共の場所の芸術 (Art in Public Place)」プログラムと直接的な関連があります。

芸術のための一定持分投資プログラムは、公共の建造物を新築する時、建設予算額の一定持分を預け、芸術品のために使用するようにするものであります。このような官主導の芸術振興政策と歩調を合わせ、芸術の本質に対する意識の変化が1960年代末に起こっていました。伝統的公共芸術が公共の概念を場所と関連させて作品を作り、疎通することに重点を置いたとすれば、新しい公共芸術は場所を物理的な場所とせず、社会的・文化的・政治的疎通の空間とみなし、地域の共同体と観客の参加、一時的な作業などを提案します。

コミュニティアート (Community Art) は、様々な種類のコミュニティ活動を内包し、どこでも誰にでも生まれる形の文化芸術活動であります。プロのアーティストからも地域住民のニーズからでも生まれるし、地域の文化財団、アートセンター、学校、美術館など様々な場所で生まれます。

これまで社会的に一般化された芸術の概念は、アーティストの芸術活動、芸術創作品のみを芸術とし、これら芸術に対する感想も一部の階層が享受するものでありました。共同体芸術は、このような受動的な形態のアーティスト中心の

芸術活動や芸術鑑賞行為から脱し、アーティストをはじめとする一般人が地域、または共感を構成する共同体の構成員が能動的に参加する芸術形態であると言えるでしょう。

コミュニティアートにおけるアーティストたちの役割は、既存の作家主義的な立場から脱して、共同体が創意的な芸術活動ができるように支援する助力者の立場を取ります。共同体芸術を目指す作家たちにとって、活動舞台は画廊やスタジオではなく、街頭舞台、壁画、交通手段、器具、遊びの構造など共同体領域の中で自分たちの作品を表現するのが特徴です。これは共同体の領域内にアーティストたちの作品を露出させることで観客とより自然に疎通するためであります。

美術理論家のウォラットとジョイエル (Wallot & Joyal) は、共同体の芸術が集団の団結心や共同体の利益を高めるのに効果的に使用でき、芸術活動は集団治療の効用性を持つとしています。また、共同体芸術が地域社会に所属感を増進させ、地域住民に肯定的な影響を与え、地域で行われる活動に参加することによって、その地域社会に所属することを示す機会を持つことができるとなりました。

2. 甘川文化村（釜山、韓国）の持続可能な文化サービス

衰退していく村に関心を集めようと 2009 年、地域のアーティスト集団が中央政府である文化体育観光部主催の「村美術プロジェクト」に応募し、甘川 2 洞一帯に芸術作品を設置する「夢を見る釜山のマチュピチュ」事業が当選し、文化村造成事業の第一歩を踏み出しました。

文化村造成初期には無関心を貫いていた住民たちが現在は多くの関心と期待を寄せており、住民とアーティスト、行政がともに甘川文化村の発展について話を交わしています。

共同体芸術活動に伴う国内外の関心から、2011 年からは釜山市から支援される住宅整備基金を活用して住居環境改善事業をはじめとする生活環境改善事業を本格的に推進し、文化村造成事業による住民の生活環境改善欲求にも積極的に応え、住民から良い反応を得ました。

レジデンス創作芸術空間である「アートファクトリー・イン・ダデポ」運営委員と住民代表、そして該当自治体の公務員で運営協議会が構成され、村の未来に対する議論が始まり、訪問客に村でより有益な時間を過ごせるようにする一

方で、住宅密集地域でもあることから住民の日常生活空間として村の住民に対する配慮を共に悩みました。

訪問客が村を訪れる理由が、村の独特な景観だという点で、景観だけでなくより多くの見どころを提供しようという意見とともに、村を創造空間化し、創造的な文化コンテンツを享受できる空間へと発展させようという議論を進めました。創造空間（甘川文化村）で文化サービスの生成者であるアーティストたちと創造教育を受けた住民たちが芸術活動をし、訪れる国内外の訪問客だけでなく村の住民たちが文化サービスの享受者になります。村は単に視覚的な見どころを提供するだけでなく、村の住民が自ら文化コンテンツを持ってサービスを行うことで、文化コンテンツの生成者であるアーティストたちと享受者である訪問客が円滑に調和を成すことができる創造空間としての役割を果たしています。

少数の村代表で構成されていた村運営協議会は、村の誰もが参加できる甘川文化村住民協議会へと拡大され、村の生活改善事業を並行しながら共同体芸術事業が進むにつれ、住みやすい村づくりが持続されています。



1950 年代の甘川文化村



2010 年の甘川文化村



2020 年コロナブルーで苦しむ住民を
慰めるための明かりを灯すイベント

3. 多様な理解関係者、人のための都市再生

甘川文化村づくりプロジェクトで最も重要なのは人と人の関係でした。村の住民を中心に、直接・間接に様々な関係を持つ人々が、円滑な関係を維持しています。利害関係者は、村の住民グループや人文学者、アーティスト、デザイナーなど、多様な部門の専門家と行政担当公務員です。いつも住民が主人公です。幸いにも多くの住民が関心を持って参加しました。作品の設置場所など、直接関係する住民たちとコミュニケーションをとり、また住民たちは作品制作にも参加しました。村の小学生も文化芸術活動に参加できるよう配慮しました。「小学校でプログラムが行われると、村の大人たちがたくさん出てきて助けてました。」住民たちは住民協議会に所属し、村のための重要な決定に参加したり、町企業に採用されて仕事をします。

次はアーティストをはじめとする専門家グループの役割です。アーティストたちの役割は、前述の「アートファクトリー・イン・ダデポ」の創作空間の恩恵を受けたアーティストたちの活動舞台でもありました。階段構造の独特な村の景観は様々な色が調和する視覚的刺激が強く、造形芸術作品を追加して村に関心を集めようと

いう目標がありました。アーティストたちには村について十分理解し、作品を制作できるように促しました。村の空き家を補修してアーティストたちが居住しながら制作活動ができるようにしました。これは住民がアーティストと生活空間を共有することで文化芸術を享受する機会を共有するという意味があります。

次は行政支援の公務員の役割です。山村の生活改善のために様々な土木事業など村の公共事業が関与するため公務員の役割が重要です。直接的な関係者である公務員とは数多くのコミュニケーションを図り、外部の公務員の関心を誘導できるようにできるだけ多くの説明会や講演会を行いました。

村には大勢の人が訪れています。家族連れ、個人旅行、団体旅行客で賑わっています。村の景観的特性と近代的な生活環境を背景に写真を撮るのに最適な場所で、インターネットやSNSの噂が主な役割を果たしました。また、都市再生事業の成功例として、外国からも多くの訪問客が訪れ、村の活性化に関わっています。一つや二つのイベントで終わらず、持続的に円滑にコミュニケーションをとり、村の活性化が図られることを期待しています。



住民の意見を真っ先に聞き、町の問題を解決



住民と行政公務員が村の現場で村の問題を発見する



子どもたちが遊び回る文化村

4. 文化を通じた都市再生

古い都市の老朽化した建造物などの基盤施設は、地域経済の低迷をもたらし、地域をスラム化させました。老朽化した地域では、環境や経済、生活の再生により、都市機能の回復や都市コミュニティの復活を夢見るようになります。こうした都市再生の過程で創造的コミュニティの必要性が台頭し、独特の地域性と都市構成員の創造性が求められています。創造的コミュニティは、文化と芸術を中心とした住民の創造的な参加で、民間団体と公共団体とのパートナーシップを通じて創造的かつ有機的な環境を構築する特徴を持っています。

ニューイングランド協会が2000年に発表した「創造経済計画(The Creative Economy Initiative)」では、創造的コミュニティは創造的労働者、創造的機関、文化組織などが集まる地理的領域であると説明しています。また創造的コミュニティの意味を3つ説明しています。第一は、生活の質に対する積極的な作用。「高い生活品質は、ビジネス、雇用、住民と訪問者にとって重要な指標です。」第二に、政府が地域再生と活性化プロジェクトを進める際、文化と結合して企画を立てることができるよう激励すること。第三に、

大都市であれ地方都市であれ、行政区域ごとに芸術文化活動が人々に認識されるということです。

韓国では1995年の地方自治制定後、自治体の地域活性化手段として文化資源を導入して約30年が経ちました。地域社会や経済の活性化のための戦略として、「文化」への関心が増大し、現在、様々な形で地域開発事業が進められています。文化を通じた地域開発政策が地域のアイデンティティを確立し、地域住民の生活の質を向上させる一方、対外的に地域イメージを広報するのに効果的だということを認識し始めたのです。甘川文化村の場合、共同体芸術活動をきっかけとした住民たちの創造的芸術活動への参加により、村に対する自負心が高まり、路地や共同トイレの改善など住民の生活環境改善支援事業が進められました。また、大勢の訪問客が訪れるため、休日だけでなく平日にも若者で賑わっています。こうした状況は生活基盤を持つ居住者の不便を伴うものとなりました。

文化を通じた都市再生の一環として共同体芸術活動は、地域における専門家と非専門家が一緒に芸術活動に参加することで、自分たちがその地域社会に所属することを示す機会を持つことができるのです。



毎日文化イベントが行われる文化村



村と作品、そして住民と観光客が調和する村



甘川文化村のシンボルとなった星の王子さまの造形作品

5. 歩くのが楽しい町

西之表市商店街を拠点にスタートしたコミュニティアート活動が「くろしおアートプロジェクト」という名で10年余り続いています。国内外のアーティストたちの活動は住民たちに様々な好奇心を提供して、町には住民の手を借りて作られた芸術作品が華麗な色で飾られています。

住民の話ではしばらく「死に(しに)町」とも呼ばれた話もあったようですが、くろしおアートプロジェクトが始まって町を歩くのが楽しくなったという中学生の話もありました。この中学生の話から商店街の希望が読み取れます。初めて島に入る人々が住民を描いた壁ギャラリーの作品を見て、地域の誇りである温かい人々が近くに住んでいるということを伝えたいというメッセージでした。友達と一緒に参加したい「くろしおの芸術祭」を待ちながら、多くの人に興味を持ってもらえるよう広報することを期待しています。

コミュニティアート活動は地域のアイデンティティを発揮できる活動であり、芸術的挑戦が必要です。地域住民との十分なコミュニケーションや理解を基に、今後100年以上住みたい地域作りを目標にしなければならないでしょう。

地域住民が地域の活動家で、または多様な専門家であり担当公務員であり、地域の自然環境や文化的資産を素材に創意性と革新を通じて事業的価値を創出するローカルクリエイター(Local Creator)となることを期待しています。

イ・ミョンヒ／李明姫

現在、釜山東西大学デザイン大学に在籍しており、文化芸術サービス、コミュニティデザインなどについて研究している。

学術的研究を実践するため、レジデンス芸術創作空間「アートファクトリー・イン・ダ・デポ」の運営ガイドラインの構築と、文化芸術サービスの理想的な循環に基づき、アーティストと地域住民の共生のため、「地域を基盤とした文化芸術活動(甘川文化村)およびブランド構築」などを実践している。

あしがき座談会

2021年3月28日 (Zoom Web 会議サービス)

話し手：高山千史 社会医療法人義順顕彰会種子島医療センター

平川浩 くろしおアートプロジェクト実行委員長

田村薫 くろしおアートプロジェクトコーディネーター

岩田とも子 アーティスト (2015～参加) / 本書編集担当

岩田：では早速ですが今回高山さんから、このようなオンラインでの「あしがき座談会」の提案があり、オンライン通信しながらくろしおアートについて、またこの本について話してみることになりました。どうぞよろしくお願いします。

平川：いや～10年もようやったなと思ってますよ。

高山：この10年、いろいろターニングポイントになることが起こってるよね。ゆっくりかもしれないけど止まってはないよね。

岩田：せっかくなのでプロジェクトの年表見ましょうか。

高山：いいねこの年表。ちょっとずつプログラムが増えた分、参加する人も増えていってるよね。振り返るタイミングとしては今、丁度いい時だったよね。

田村：私も振り返ってみて、はじめはジンさんの意図をなかなかみ取れてなかったっていうことを思いましたね。

高山：ジンさんの文章にもそういう心配が書いてあったよね。

田村：ただ、作業を進めればよいじゃなくて、意図を知る必要があった。ずっとジンさんが広場でモニュメントをつくりたい言っていたのも最初は意図がわからなくて。こちらは広場でなくても「場所さえあればよい」と思っていて。

岩田：作品が完成すれば良いというよりも、どんな場所で作るかが大事だったってことなんですね。

田村：そう、みんなと一緒に同じことをするってことが大事だったんだけど。

岩田：私がプロジェクトに参加しはじめた頃はもうみなさんそんな意識があったようにみえました。

高山：それはもう少しずつ町の人々も勉強してきている過程があるんだよね。

平川：うんうん。

高山：最初はやりたい人がやってるだけって感じだったけど、最初の2,3年、よくわからないような状況で誰がどこを向いてるかわからない時もあって。意識や感覚の共有は少しずつされていったんだよね。最初はインパクトがあって、継続と進展がそれがトラディションとつな

がっていく。いろいろつながっていった、減退はしてないよね。

平川：うん、そうですね。あと、まちづくりってことに気づいたのがちょうど2015年頃だったんじゃないかな。はじめは芸術祭としか思ってなかったけど、これはまちづくりなんだってわかってきた。田村さんはどう？

田村：まちづくりについてみんなで手探りして勉強しながらこういうものかな、ってここ数年になってやっと少しわかってきたと思います。

高山：まちづくりに関しては、僕は医療の領域で地域のことしていたという経過もあって。医師として地域のために産科医療に関し動いていたことがあるんだけど、一生懸命やってやってる時はそれが非日常で、今はそうあることが当たり前のことになってきている。非日常が日常になっていった。何かを作りあげるインパクトは薄れるけども持続する、ないしは違う視点がいってくるとよい動きがうまれてくる。そういう経験があったから同じような感じでくろしおアートのことともみていた。なんかの形でまちづくりになっていけばいいな、という気持ちは最初からあったけどさ。ただ、それが具体的に何がどうなってつながるかはわからなくて。順

を追って僕らも成長したからわかってきたんじゃないかな。

岩田：その成長と様々な過程がこの本を通じて伝わるといいですね。中心メンバーでさえ最初はわかってなかったっていう。(笑)私も編集しながら「そうだったんだ・・・」と知ることが多くて面白かった。

平川：最初はくろしおアートって芸術祭ってイメージが強かった。その前に「時の芸術祭」があったというのもあるけど。時の芸術祭はすごくさんのアーティストが島に入ってきて盛り上がって。迎えるほうは大変だったけど。笑

高山：あれは爆発って感じだったよな。

平川：そうそう、すごい賑わって。アーティストたちはみんなコミュニケーションがうまいし。あ、でも田村はちょっと違ったよね。

田村：私だけ全然コミュニケーションできないアーティストでした。(笑)

岩田：芸術祭って言葉がでましたけど、本の編集をしながら「くろしおの芸術祭」「くろしおアートプロジェクト」が混同しないようになりに意識しました。

平川：そういえば「芸術祭」と「アートプロジェクト」について田村さんと議論したことあったよね。

田村：うん。「くろしおの芸術祭」は一年の中で決まった期間のことで、「くろしおアートプロジェクト」はもっと大きな流れのことかなと思っています。

高山：同感です。そうゆう風にプロジェクトとして感じられるようになったってことに、意味があるわけよ。

岩田：芸術祭で作品をつくるといえば、アーティストとしてある程度突っ走りたいという気はありますけど、くろしおアートはやっぱり感覚的に面白くて、突っ走るところと、なんか違うぞって言うところがあって芸術祭終わったあとも何かが続いている感じがして。この本づくりさえも途中からプロジェクトの一環のように思えてきました。

高山：芸術祭のほうはみんなにとって非日常性を感じる場って感じだね。

平川：去年は芸術祭なかったからなんか変な感じというか。

高山：まあ、僕もその間くろしおアートプロジェクトについて色々考えてたよ。くろしおアートのことが日常の中で浮かんたり消えたり。

田村：浮かんたり、消えたり。(笑)ちなみにどんなことが？

高山：この本を読んでいろんな人の思いを知ったっていうのもあるけど。これならもっと発展性、展開性がある形につながるといいよなって思いが強くなったけどね。

平川：そうですね、なかなかお互いのこと聞かないからね。

高山：芸術祭始まっちゃうと色んなことに必死になっちゃって振り返ることなかなかできないからね。

岩田：最後に、この本がどんなふうにどんな方に届くといいと思いますか？

田村：まずは町の方々に読んでもらいたいです。未だに参加は敷居が高いと思われていますから。ちょっとだけでも理解してもえたらうれしい。

高山：基本的に参加してみるとわかるってもんだらうね。参加して何かしてみると、自分

にも返ってくるというか。非日常的な活動に参加することによって自分をそこに置いてみるとどうなるのかなということだろう。自分探しというか。

田村：そうですね。あとは、私の地元の人にも読んでもらいたい。「なんでそんなに種子島行ってるの？」って思われていますから。（笑）

平川：そういえば、このあいだ、田村さんの誘い田村さんの地元とリモートツアーしたよね。行ったことのない町をオンラインでツアーして。あれ面白かった。くろしおりリモートツアーもやってみたい。

田村：いいですね。芸術祭期間中にできるかも。

平川：リモートツアー、何が良かったというと、見知らぬ町の商店街の人たちと話すのが楽しくて。一生懸命お店をやってるんだなって、お店の人と話すのが面白かった。会話が面白かった。

田村：それは嬉しいですね。

岩田：あ、すいません。今後のお話が少し聞けたところでちょうど通信の終了時間が迫ってきました。最後にみなさんで記念撮影しませんか？ジンさんからリクエストがあったので。

このような状況でこの本がつくられってことでこの通信画面が記録になりますよね。どんなポーズでとりましょうか。

平川：指でつくるハートがいいんじゃない？韓国はこれでしょ？

高山：あれ、どうやるんだっけ、画面がよく見えなくて作り方わからない。こう？

岩田：あ、そっちのハートの作り方も確かジンさんたちに教えてもらいましたよ。いいですね。ハイチーズ。

田村：では、みなさんありがとうございました。

岩田：お疲れ様でした。

平川：またね～

高山：じゃあね～



オンライン座談会の様子

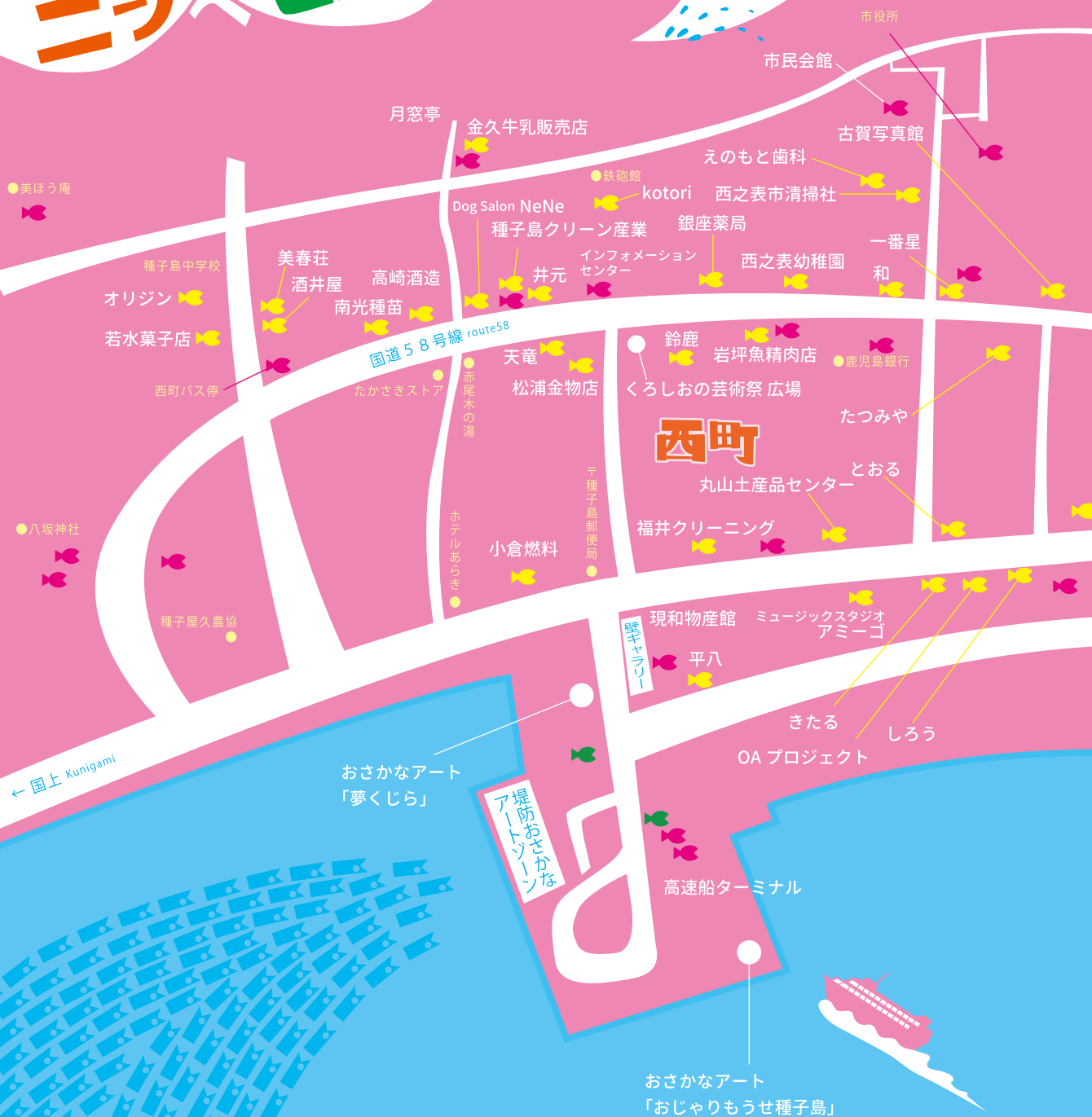
西之表市商店街 Nishinoomote Street KUROSHIO ART MAP

ニシへヒガシへ

テン

もて

カモメマップ





🐟 アートベンチ

🐟 アート看板

🐟 モニュメント

種子島
西之表市

中種子町

南種子町

めがねの西村

ダスキ

東町

天神町

浜島商店

菓子処酒井屋

日高クリーニング

逆瀬川書店

南日本新聞西之表市販売所

酒井弥商店

串まざ

陸建設

羽生電気商会

長瀬豊店

サラダ館

サンシード

アンファン

中原タイヤ

徳永整骨院

おしゃれ館ヨシナガ

りんかけ堂

フジカメラ

エスパー電気

東天紅

天神町
交番横バス停

ダイワ

酒井酒店

平和モータース

あ〜と工房壺心

和田書店

ホテル
ニュー種子島

道産子ラーメン

鴨女町

横林自動車

池波書店

● 種子島自動車学校

南種子 / Minami-tane →

- 🐟 おさかなアートは町の各所に点在しています。種子島にお越しの際はぜひ実際の町を歩いて楽しんでください。
- 🐟 作品の設置場所は制作時に決められた場所でその後一部変更されているものもあります。またお店とアート看板が設置されている場所の位置が一致していない場合や変更されている場合があります。



くろしおアートプロジェクトアートディレクター ジン・ヨンソブ / 秦 榮燮

1958 年 韓国釜山出身

慶星大学校で金属工芸を専攻し、韓国の釜山、ソウル、日本の神戸、福岡などで 20 回の個展を開催。

2009 年からはレジデンス芸術創作空間である「アートファクトリー・イン・ダデポ」を運営し、芸術の社会的参加を実践するため、釜山の「甘川文化村」でコミュニティアート活動を行っている。この活動は文化的な地域再生へとつながっている。また、釜山の精神リハビリ専門病院で患者のコミュニケーションを支援するための「幸せな美術プログラム」を行っている。中国河北省のジュワミュージックタウン、海南省の海口市と三亜でもコミュニティアートプロジェクトを実施。

2020 年には、韓国文化体育観光部が推進する公共美術プロジェクト「洛東江河口公共美術プロジェクト」として「サンセットミュージアム」を企画し、37 人のアーティストが参加した。



釜山の「甘川文化村」

謝 辞

この本が完成するにあたり、西之表市におかれましては、本事業に魅力創出への可能性を期待する様々なご支援、西之表市商工会、西之表市商店街振興協同組合におかれましては、中心市街地の活性化事業として、取り組んでいただいていることに感謝申し上げます。

地域活性化の手本となり、礎を築いてくださった故小倉達弘様には、本事業のため、ご家族様より身に余る寄付を頂き、深く感謝と敬意を申し上げます。

ジン・ヨンソプ先生におかれましては、故郷釜山甘川文化村のまちづくりのノウハウを惜しみなく伝授していただき、住民以上の情熱とパワーで真摯に向き合ってください、心より感謝を申し上げます。併せて、はるか種子島まで足を運び、協力してくださった多くのアーティストの皆様にも感謝申し上げます。

編集スタッフの皆様、新型コロナウイルス感染症の影響で思うようになりサーチ、コミュニケーションが取れない中、何度も日韓でのリモート会議を繰り返し、ご尽力いただいたことに深くお礼を申し上げます。的確な会議進行、種子島へのリサーチなどを担当してくれた岩田とも子さん、そして、2009年から12年間、この商店街のために、共に頑張ってきてくれた田村薫さんにも心から感謝申し上げます。

そのほか、多くの機関、団体、個人により多方面にわたる寄付や支援に育てられ、続けてこられた事業です。関わってくださっている皆様に心より感謝申し上げ謝辞と致します。

くろしおアートプロジェクト実行委員長 平川浩



リモート会議の様子

くろしおアートプロジェクト 10 年の記録

みんなでつくるまちづくり

2021 年 3 月 31 日 第 1 版発行

発行元：くろしおアートプロジェクト実行委員会

事業名：くろしおアートプロジェクト

編集ディレクション：イ・ミョンヒ

編集：岩田 とも子

編集協力：ジン・ヨンソブ、平川 浩、長渡 礼子

デザイン：田村 薫

写真提供：ジン・ヨンソブ、田村 薫

平瀬 祐二 (頁 10-11, 16-17, 27, 68, 159, 176, 186-187)

翻訳：イ・ミョンヒ

印刷：(株) 種子島新生社印刷

Specialthanks：住民の皆様、市役所関係者の皆様、アーティストの皆様

ウェブサイト：くろしおアートプロジェクト | <https://www.facebook.com/kuroshioart>

電子版閲覧：西之表市 | <http://www.city.nishinoomote.lg.jp>

(西之表市ホームページのトップページのバナー先より閲覧できます。)

冊子、及び事業へのお問い合わせ

西之表市商工会

〒 891-3112 鹿児島県西之表市栄町 2 番地

TEL 0997-23-1141
